
私をボードへ連れてって

相良 マミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私をボードへ連れてって

【Nコード】

N3028P

【作者名】

相良 マミ

【あらすじ】

「う、嘘でしょ?!」

大人しくて引っ込み思案の雪奈^{ゆきな}。雪奈は大学の友人たちの策略で、冬休み、雪山のペンションで住み込みのアルバイトをすることになってしまう。覚悟を決めて向かったペンションで、雪奈は、金髪ピアスの関西人、昂^{すばる}に出会った。異性に慣れない雪奈は、優しいけどちょっと強引な昂に翻弄される毎日で……。

プロローグ

雲ひとつない、高く青い空。

私の下に、斜面に沿って広がる白い大地。

私は、自分の少し後方にある小高く白い丘を見上げた。

太陽の光がまぶしくて、私は少し、目を細くした。

そのとき、丘の上から、何かが勢いよく飛び出した。

人だ。

わかる、彼だ。

青い空に、彼の姿だけが映える。

彼が宙で踊る。

空中で回転し、身体を反らせ、舞い降りてくる。

——その背中に、私は、翼を見た気がした。

ああ、私、きつと。

この人のこと。

好きに、なっちゃったんだ。

1 冬休みのアルバイト (1)

「よいしょっ……と」

私は小さく気合をいれ、両腕に力を入れた。

海外旅行用のトランクが、両腕に支えられて少しだけ持ち上がる。うう、重い……。

それでもなんとか、脚に引っ掛けずに列車を降りた。

その途端、予想以上の冷気に包まれる。列車の中との温度差に思わず目を瞑ってしまいながらも、両足の前に、トランクを下ろした。結構、重くなっちゃったなあ……。もっと荷物減らしてくればよかった。

ってゆーか、雪国なんて初めてだから、何を持ってきたらいいのかわかんなかったんだよね。

「ふう」

ようやく、力を抜く。

うわあ。息が真っ白。

私は両手を擦り合わせた後、冷気がコートの中に入って来ないようにしっかりとマフラーを巻き直した。

ついに来ちゃったんだ。

もう、みんな薄情なんだから……。

それにしてもこんなに晴れてるのに、なんでこんなに寒いのか？ 凍えちゃいそう。早く駅の中に入らなきゃ。

改札口は……あ、あった。あそこね。

大学生活二年目の冬。

私、こと、渡辺雪奈は、わたなべ・ゆきなトランクの取っ手をしっかりと握ると、真

っ白な未知なる世界への第一歩を踏み出した。

事の発端は三週間近く前。十一月の末。

私が、冬休みの件でお母さんの携帯電話に電話をかけたことから始まる。

渡辺家では毎年、年末年始の休暇を実家で過ごす。私は今年もちろんそのつもりだったから、いつから帰るかだけを電話で伝えるつもりだった。

今年は講師の先生方の間でインフルエンザが蔓延してしまい、休講が相次いだ。それで急遽、大学は例年よりも一週間ほど早く冬休みが始めることを決定した。

だから、いつもよりも早い日程で家に帰るよって、お母さんに連絡しておかないとって思ってた。

でも、電話に出たお母さんは異常にハイテンションで。

「もしもし、お母さん？　冬休みのことなんだけどね。大学のお休みが――」

「あ、雪奈、ちょうどよかった。母さんも電話しなきゃって思ってたのよ。ねえねえ、聞いてよ、雪奈。母さんとお父さんね、年末年始のお休みで旅行に行くことになったのよー♪」

「えっ？」

「それも、海外なのよ、海外」

「ええっ?!」

「ヨーロッパに行くの。ホラ、母さんたち、今年で結婚して二十五年でしょ？　記念に旅行に行かないかって、お父さんが言ってくれたの。キャー♪」

「ちよつと、そんなの聞いてないよ……」

「だから、今言ってるんじゃない。でね、せっかくだから色々回ろうってお父さんと話して、結局、一ヶ月くらいの長期旅行になったの。イタリアと、スペインと、フランスに行ってくるのよ」

「一ヶ月も?! え? で、えっと、いつから行くの?」

「えーっとねえ、三週間後の金曜日かしら? うん、そう、その日ね」

それって、私の冬休み初日と同じ日じゃない。その上、一ヶ月もだなんて。

「だからね」お母さんの声は無常にも続く。「冬休み、帰ってきてもいいけど、あなた一人になっちゃうの。ごめんね。雪奈もどこか旅行に行ったら?」

私は一人っ子だ。大学進学のため、家を離れて上京している。

お父さんが転勤族だということもあって、今の実家は高校を卒業したときの実家とは違う都市にある。だから、近所に幼馴染たちが住んでいるわけでもない。

両親のいない実家に帰るのは、私にとっては全く意味のないことだった。

それにしても。

困ったなあ。

冬休み、どうやって過ごそう……。

「雪奈、どうしたの? 元気ないね」

私、よっぽど落ち込んだ顔をしていたのかな。友達の典子ちゃんが肩を叩いた。

「うん……帰るところ、なくなっちゃった」

「ええっ?」

「雪奈、ちよっと、大丈夫?」

「ご家族に何かあったの?」

私の言葉に、仲良しグループの他の子たちまで加わってくる。

私は慌てて顔の前でぶんぶんと両手を振った。

「あっ、ううん、全然違うの。ごめんね、そうじゃなくって、えっと」

私たちは、大学の同じ学部の中良し六人グループ。

典子ちゃん、恵美ちゃん、晶子ちゃん、朋子ちゃん、秋江ちゃん、そして私。

授業もほとんど同じものを取っているから、一日中一緒だ。

もともと私は、人見知りが激しくって口下手で、あんまり自分から話す方じゃない。

その上、お父さんの転勤にくっついて引越しばかりしてきたから、『友達』って呼べる人たちがなかなかできなかった。

いつも、本や人形が『お友達』だったの。

大学に入って初めて、同じメンバーで長い時間を過ごすっていう経験をして、ようやく『友達』ができた。

こうやって普通に同年代の子と話すのは、私にとってごく最近になってようやく手に入れた『普通』なんだ。

オシャレな子、お話が上手な子、頭のイイ子、いろんな友達ができて、それがとても嬉しくて、楽しい。

「ごめんね、変な言い方になっちゃった」

私は照れ笑いして、昨日のお母さんとの電話を掻い摘んで説明した。

何度もつかえたり言い直したりしちゃったけど、多分、伝わった——と思う。

せっかくの、いつもより長い冬休みなのに、たった一人っきり。何かしないと損だよね？

お母さんの言うとおり、旅行にでも行こうかなあ……？

それにしても、お母さんってば「旅行に行けば？」なんて軽く言うってたけど、誰と行けって言うんだらう。

みんな、冬休みは、実家で家族と過ごしたり、彼氏と過ごしたりするはずだもの。いまさら私と旅行だなんて無理だよ。誘ってもらうならまだしも、自分から誘わなきゃいけないし、何より気が引け

るもの。

もし、私にも彼氏がいたら、こんなとき一緒に過ごしてもらえるのかな。

彼氏だなんて、今までに一度もできたことないから、正直よくわからないんだけど。

一人旅かぁ。ちょっとそれは心細いなぁ。

「なーんだ。『帰る場所がない』なんて言うから、ビックリしたよ」

「雪奈ぁ、元気出しながら」

「ってゆーかさぁ、雪奈のご両親って仲がいいね」

「そーそー。親の仲がいいって、イイ事じゃん」

みんなが口々に励ましてくれるけど、私の頭の中は、相変わらず『どうしよう』の五文字が支配していた。

2 冬休みのアルバイト (2)

落ち込みっぱなしの私を他所に、会話はどんどん進んでいく。

「お母さんの言うように、旅行にでも行けば？」

「雪奈が？ 一人で？ 雪奈、あつという間にオオカミさんに食べられちゃうよ」

「恵美ってば、それは雪奈に失礼よ？」

「だって、雪奈ってば、名前どおり真っ白なんだもん」

「すっごく、ピュアだしね。可愛いし」

「確かに」

「この大学が女子大でよかったかもねー」

ん？ どういう意味だろう？

みんな、たまに私のわからないコトバで話すんだ。

ううん、言葉はわかるんだけど、意味がよくわからないの。

「でも、いつまでも免疫ないのもねえ……」

免疫？ インフルエンザのこと？ 流行るって言うから予防接種は打ったけどなあ。

「そーだ。雪奈、バイトしてたんじゃないかった？」

「そういえば、カテキョのバイトしてたよね？」

みんながいっせいに私を見る。

「それがね、年末年始は、ご両親さんの実家に帰られるんだって。だから一ヶ月間お休みな」

「それじゃ、その間、収入もないの？」

その言葉を聞いて、ようやく気づいた。

うそ——っ！！

耐え切れなくなって、私は机の上に突っ伏した。

親からは、きちんと仕送りを貰っているから、別に生活に困るこ

とはない。

だけど、それは家賃と生活費の分だけ。遊ぶためのお金はアルバイトして稼ぐように、って言われている。

このままじゃ、せつかくのいつもより長い冬休みを、ヒキコモリで過ごさなきゃいけなくなっちゃう……。いっそのこと、冬眠でもしようかな。

「じゃあ、新しくバイトすればいいんじゃない？ 冬休み限定の短期バイト、たくさんあるでしょ？」

その通りだよ。うん、その通りだ。

私も頭を切り替えて、ちゃんとしなきゃ。

家に閉じこもって越冬とかしてる場合じゃないのよ。冬休みのこと、考えなきゃ。

「あ、私ちょうどバイト情報誌持ってるよー」

典子ちゃんの声だ。典子ちゃん是我的隣に座ってるし、とっても特徴のある声だからすぐわかる。

「ホント？ 見たい見たい」

「雪奈にピッタリなバイト、ないかなあ」

え？ みんな探してくれちゃってるの？

私はのろのろと頭をもたげた。

私以外の五人が、嬉々として私の隣の机に群がっている。

典子ちゃんが持っている雑誌の表紙はこんな見出しが書かれていた。

冬休みのアルバイトはこれで決まり！

短期集中バイト特集

特集1 忘年会・新年会のバイト

特集2 住み込みのバイト

毎週発行されるバイト情報誌。冬休みが近いって言うのもあって、特集が組まれているみたい。

「あ、コレ、イイ感じじゃない？」

典子ちゃんの声がした。

「あーそうかも」

「いいんじゃない？」

朋子ちゃんと晶子ちゃんの同意の声。

そして、五人の顔がいつせいに私の方を向く。

え？ 何？ なに？ ナニ？

何か……イヤな予感。

そしてまた、私以外の五人で一瞬顔を見合わせると、典子ちゃんがスチャッとケータイを取り出した。

そして、無言のままどこかヘダイヤルする。

「――あの、今、アルバイト情報誌を見てお電話しているんですけど、お電話で応募ってできるんでしょうか？」

え？ 典子ちゃん、バイトするの？

冬休みは家族と過ごすから実家に帰るって言ってなかったっけ？

「あ、ハイ、名前ですね？ 『わたなべ・ゆきな』です」

ちよっ、典子ちゃんっ！？

それ、私の名前！！

「――ええ、お天気の『雪』に奈良の『奈』って書きます」

ちよっとっ！ 典子ちゃんってばっ！！

声に出そうとしたら、恵子ちゃんに口を押さえられた。

むぐう……、声が出ないよお。

「え？ あ、学生です。〇〇女子大学の文学部英文学科で……あ、ハイ、ええ、わかりました。じゃあ、今日中に発送します。よろしくお願いします」

電話が終わり、典子ちゃんがケータイをしまった。

五人とも、私の方に笑顔を向けている。

笑顔のはずなんだけど、それが、なんか怖いよ……。

「えっとお……典子ちゃん、今、どこに電話してたのかなあ、なんて、聞いてもいいかなあ？」

恐る恐る、私は聞いてみた。

「ん？ ココよ？」

さも当たり前であるかのごとく、典子ちゃんは私の方へバイト情報誌を差し出した。

綺麗にケアしている爪でトントンとあるバイト募集の記事を弾く。

私は雑誌を受け取り、その記事の部分を讀んだ。

「雪のペンション 住み込みバイト募集！」

最寄のゲレンデからは徒歩五分。自由時間アリ。食事付。

♪明るく、元気な方、やる気のある方、歓迎♪

期間 十二月中旬～三月中旬（応相談）

年末年始に来ていただける方優遇します。

日給 八千円

連絡先 ×××・××××・××××

「……」

私の中は文字通り真っ白。

の、典子ちゃんってば、どういうつもりなのよ……。

「ほら、今の雪奈にはちょうどいいでしょ？ 食事付きの旅行気分で行っておいでよ。オマケにお金にもなるし。あ、今日中に履歴書を発送してくれて言ってた」

「確か、食堂に履歴書用の写真撮れる機械、置いてなかった？」

「あ、あったあった」

「確か、購買部に履歴書も売ってたはずだし」

「じゃあ、今から行こつ、ね、雪奈」

えっ？ えっ？？？

私は未だ状況がよく呑み込めていない状態。

恵美ちゃんと秋江ちゃんに片手ずつ掴まれて食堂に拉致されてしまった。

ワケがわからないまま、手際良く写真を取られ、朋子ちゃんが履歴書を書いて行く。

そして気がついた時には、構内にあるポストに典子ちゃんが履歴書を投函していた。

えっ、ええええええ！？

どどどど、どうなっちゃうの、私？

そしてそれから約一週間後、つまり、十日ほど前。

運がいいのか悪いのか、私はペンションのマスターを名乗る人から、アルバイト採用の連絡を受けた。

そして今日、そのペンションがあるという長野県の某駅に着いたところというわけだ。

3 初めての出会い (1)

住み込みバイトなんて、初めて。

不安でいっぱいだけど、ドキドキもする。

本当は、ちょっと期待してるんだ。

この冬休み、自分にとって初めての経験をすることで、自分の中で何かが変わるんじゃないかって。

引っ込み思案なところや、上手く話せないところが、もしかしたら、変わるんじゃないかって。

その、きっかけになるんじゃないかって。ううん、そうしたい。

本当は、いつも羨ましいんだもん。典子ちゃんや恵美ちゃんたちが。

私も、周りに流されてるだけじゃなくて、もっと自己主張したいし、素敵な恋だってしたい。

だから、自分に対して、三つの誓約を立てた。

初めてのことで挑戦する。弱音を吐かない。それと、笑顔でいる。

がんばろうね、雪奈。

雪国なんだから当たり前かもしれないんだけど、見渡す限り真っ白で、お日様が反射して眩しい。

サングラス、欲しいかもしれない。

どこかで売ってるかなあ？

改札口を出て、ちょっと周りを見渡してみた。

ほとんど人がいない。

ペンションから、お迎えの人が来てくれることになってるんだけどな。

雪で、車が動かなくなっちゃってるのかなあ？

「もしかして、あんたがワタナベさん？」

突然、背中越しに声をかけられた。

振り向くと、私とそう年齢の変わらない感じの男の人。

えーっ、私、全然、慣れてないんだよ、同年代の男の人って。

それに、この人金髪だし……。人懐っこい笑顔だけど、ちょっとコワイ、かも。

とりあえずコクコクを頷いた。

「あ、ホンマ？ よかったー。遅れてもーて、会えへんかったらどーしょーかと思っとったんや。大介兄ちゃん、怒るとメツチャ怖いねんもん」

ぎゃー！

関西弁なんですけどー！

「あ、あのー、ペンションの方、ですか？」
恐る恐る聞いてみた。

「ん？ ああ、まあそんな感じやな。ワタナベさんと一緒や。オレもペンションに働きに来とんねん」

ですよね。関西弁だもん。

長野に住んでる人じゃないとは思った。

「大介兄ちゃんーあ、ペンションのオーナーのことな。大介兄ちゃんが忙しくて行かれへんなんて言いだすもんやから、急にオレが代わりに迎えに来ることになってしもてん。連絡でけへんくて、ごめんな。心細かったやろ？」

あ、そや。自己紹介が未だやったな。オレ、中野。なかの・すばる中野昂や。まあ、しばらく一緒におることになるんやし、仲良うしたってや」

中野さんが、手を差し出してきた。
慌てて私もそれに倣う。

「渡辺雪奈です……」

「へー、『ゆきな』ちゃん言うんか。かわええ名前やなあ。べっぴんさんやし、イメージぴったりやん。ラッキーやわー」

中野さんはそう言いながら私の手を握り返した。

うわあ。初めてかもしれない、男の人と握手するの。

男の人の手って、大きいんだ。

私の場合、男の人って言うとお父さんのしか知らないから、なんだか新鮮。

「ほな、行こか。いつつまでもこんなところにおったら凍えてまうし。車、向こうの駐車場に停めとんねん」

中野さんは車回しの向こう側にある平面駐車場を指差した。

中野さんが示した方向には平面の駐車場があって、車がぼつりぼつりと停まっている。

あそこまで、雪の中歩くんだ。

実は私、こんなに積ってる雪を見るの、初めてなんだー。なんだか楽しいかも。

歩き出そうとした私の手から、中野さんがサッとトランクを奪った。

「そうや。渡辺さんて、スキーとかボードとか、やるん？」

「え？ あ、い、いいえ……」

「あー。もしかして、雪、初めてなん？」

「はい……」

あの、トランク……。

持ってもらっちゃってるんだけど、いいの？

「ほな、氣いつけて歩きや？ 滑ってまうで？」

え？ 滑るの？ 平らな場所なの？

私はそう思ったけど、歩き始めてすぐに、中野さんがそう注意してくれた意味がわかった。

何これ、歩きにくい……。両手でバランス取らないと、こ、転ぶ……。

あ、もしかして。それで中野さん、私のトランク持ってくれたの？

「この辺は暖かいさかい、昼間に雪が解けて、夜になったらまた凍って、それで滑りやすうなんねん」

いえ、十分寒いです。

中野さんは雪の中を歩くのには慣れているらしく、おしゃべりしながらもスイスイと進んでいく。

それに比べて、私は一步一步踏み締めるみたいにして歩いてるから、ちっとも進まない。

私、運動神経だけは、それなりにある方なのになあ。

うー。なんか恨めしいかも。

中野さんが私の方を振り返ってちよっと笑った。既に間が十メートルくらい離れている。

「――渡辺さん、そこでちょお待っというてんか。動いたらあかんよ？」

中野さんが私に向かって呼びかけ、先に行ってしまった。

確かに、下手に動くとなんじやいそうだから、私は言われた通り大人しく待つことにした。

中野さんの姿が、車の影に隠れて見えなくなる。

まさか、置いて行ったりしないよね？

ちよっと不安だったけど、動くとなんじやいそうで。

ううう、もどかしい……。

まさか、バイト始める前に、こんな苦労するとは思わなかったわ。しばらくすると、中野さんが手ぶらで戻って来た。

「お待たせ。トランクが邪魔やったし、先置いてきててん。ほら、オレに掴まるとき。ほんなら転ばへんよ」

中野さんが自分の左腕を差し出してくれた。

「えっと……」

この腕に掴まれてことだね？

でも、いくらこんな非常事態だからって、そんな、男の人の腕とか普通に掴んじゃっていいものなの？

「オレの腕じゃ、あかんか？」

「えっ？ いやっ、あの、全然っ、そうじゃないっですっ」

私は右手でそっと中野さんの腕に触れた。

中野さんが右の手で私の手を取って、自分の腕にしっかりと絡める。

うわーっ！ うわーっ！ 恥ずかしいよおお。

「ほら、もう大丈夫やろ？」

中野さんの言うとおりであった。

ぐらぐらしていた私の身体が、途端に安定した。

「ほんとだ……」

「雪の上歩くのってコツがあんねん。すぐ慣れるわ。それまで掴まっとき」

そして、二人で一緒に、車があるっていう方向へ歩き始めた。

4 初めての出会い (2)

中野さんは、しっかりした足取りで私を支えながら歩いている。歩きながら、私は、中野さんの歩調は、さっきよりもぐっと遅くなってるのに気付いた。

多分、私に合わせてくれてるんだ。

初め、見た目でちよつと怖いつて思っちゃったけど、なんか、中野さんってもしかして、すごいジェントルマンさん？

隣の中野さんを見上げると、「ん？」と笑顔を向けてくれた。

「それにしても、ホンマ役得やわー。こんなかわええ子と堂々と腕組んで歩けるんやもんない。大介兄ちゃんにお礼言わなあかん」

私は慌てて下を向いた。

多分、真っ赤だ。

カワイイなんて言われたことないんだもの。

学校のお友達も言ってくれるけど、でも、あれは、なんかお人形さんとかワンコちゃんとかに言うみたいない方だし。本気じゃないと思う。

「あ、ホラ、あの白いワゴンがペンションの車や。もうちよつとやし、がんばりや？」

私は頷いた。

支えてもらってるけど、やっぱり気を付けてないと転んじやいそう。

今転んじやったら、中野さんまで倒れちやいそうだし。

結構必死だ。

それにしても、未だペンションに着く前からこんな状態なのに、私、ペンションのお仕事なんてできるのかなあ？

オーナーさんや中野さんに迷惑かけちゃったらどうしよう？

中野さんが開けてくれた車のドアから、助手席に乗り込む。

ワゴンの中は広く、後ろには二列分のシートがあった。

運転席に回り込んだ中野さんが車に乗り込み、シートベルトを着用する。

あ、そうか。

私もシートベルトしなきゃ。

普段、車で移動なんてしないから、つい忘れちゃうんだよね。

中野さんが、キーを差し込みながら言った。

「そや、先言うとかわ。運転中は、どっか掴まっという方がええかもしれないんで？ オレの運転、荒っぽいし」

「ええっ!？」

私は急いでドアの上部にある取っ手につかまる。

それを見た中野さんが声を出して笑いだした。

「あははは！ 渡辺さん、よーやくしゃべってくれた。すまん。本気にするとは思わへんかった。大丈夫やって、オレ、安全運転やら」

それ、ホントにホントですよ？

「そんなに緊張せんといてーな。取って喰うたりせえへんさかい。こんなかわええ子を助手席に乗せとんのに、危ない真似でけへんって。ただな？ オレも氣いつけるけど、この時期、雪に慣れてへん車がぎょーさんおるさかい、オカマ掘られたりすんねん。せやから、もしぶつかられてしもたときは、堪忍な」

中野さんがエンジンをかける。

バックで駐車場を出るとき、中野さんが左手で助手席のヘッドレストを持って後ろを振り返った。

なんか……変な気持ち。同年代の男の人をこんな近くで見ることなんて今までなかったからかな。なんか、惹き付けられる。

よく、テレビや雑誌で『男の人に惹かれる瞬間』ってテーマにこの格好が出てくるけど、あれ、ホントだったんだ。

中野さんの運転は、宣言したとおりの安全運転。と言うよりも全然スピードを出さない。

おかげで、窓の外の景色をゆっくりと眺めることができた。

青い空、遠くに見える白い山、道や街路樹を覆う雪。

どれもとっても綺麗。

「さっきはホンマにごめんな。渡辺さん、名前以外、何も話してくれへんさかい、嫌われたんかと思った」

中野さんが、運転しながら話しかけてきた。

未だもうちょっと外を見ていたいけど、失礼だね？

「あの、ただの、人見知りなんで……」

私は中野さんの方を振り返ると正直に答えた。先に知っておいてもらった方がいい気がしたし。

「そーなんか。確かに、大人しい感じやもんなあ。そしたら、オレみたいなヤツ、うるさいんとちゃう？」

「いえ！」

そんなことないです。逆に、羨ましいくらいです。

私もそんな風に話してみたいなあって、さっきからずっと思ってるくらいなのに。

「そや、渡辺さんって、学生さんなん？」

「ええ」

「オレも学生やでー。歳は？ 聞いてもええか？」

「今、十九で、もうすぐハタチです」

「ホンマに？ なんや、オレとタメやんか。渡辺さんて、なんか落ち着いてるさかい、オレよりも年上やと思うとった」

ただ、無口なだけなんじゃないかなあ。

落ち着いてるなんて、恵美ちゃんたちに言ってもらったことないけどなあ。

「なんや、そっかー。そうやったんやー。それやったら、オレ、今

から『雪奈ちゃん』って呼ばせてもらおう
はい？

「ゆっ、ゆっ……」

『雪奈ちゃん』?!

思わず中野さんを見上げた。

「あかんのん？」

中野さんは、そう呼ぶのが当たり前、みたいな顔をしている。

そんな風に聞かれても……。

「……いえ、ダメじゃない、です、けど」

ただ、恥ずかしいんです……っていう気持ちはやっぱり言葉にならなくて。

ああ、こんなじゃダメなのに。

「ほな、『雪奈ちゃん』て呼ばせてもらうな」中野さんは満面の笑みを浮かべた。「ホラ、なんか苗字に『さん』付けて堅っ苦しいやん？　そういうの、オレあんまり好きちゃうねん。雪奈ちゃんも、オレのこと『昴』って呼んでんか」

そんな気楽に言われると、かえって構えちゃうなあ。

とてもじゃないけど、今日会ったばかりの、しかも男の人を、名前でなんて呼べないもの。

それにしても、中野さんって、すごい。口から言葉が突いて出てくるみたいに話す。

今だって、会ってからずっと中野さんが一方的に話してる感じだし。

いいなあ、私もこんな風に、思っていることをどんどん話せたらいいのに。

私は一人っ子で、高校生卒業まで、学校でもずっと無口で地味な子だった。

どうせ、すぐに引っ越しちゃうって言う考えもあったのかもしれない。

女の子とですらほとんど話さなかったから、男の子なんて話した記憶すらない。

だから余計に、戸惑っちゃう。

5 初めての出会い (3)

「ごめんな？ ホンマ、オレ、うるさいやろ。よおツレに言われんねん。『五分でいいから黙れ』って。大介兄ちゃんにも、よお言われるさかいなあ」

「そうなんですか？」

確かに、中野さんってよく話す。

関西弁の人って確かにそういうイメージあるけど、あれはテレビの中だけだと思ってた。

でも、私みたいな口下手な人には、話しかけてくれる安心感っていうのがすごく感じられるんだけどな。

「なあ、雪奈ちゃん、同じ年なんやし、その敬語やめへんか？」

「——えっと、がんばります……」

中野さんは小さくため息をついた。

「……。ま、ええわ。オレに人見知りせんようになったらでええし、普通に話してんか。それまでは我慢しといたるわ。」

そうそう、今の内に何か聞いておきたいこととかってある？」

え？ 急に話せて言われても……。困ったなあ。

でも、ペンションがどんなところかとか、バイトの仕事内容とか、聞いてみたいなあ。

あ、それに、さっき中野さん、ちょっと気になる言い方してたなあ。

なんて聞こう？

ちよっと考えてから、思い切って、さっき気になったことを聞いてみることにした。

「あの、中野さんも、アルバイトさんなんですか？ さっき、なんか、ちよっと違う言い方、してた気がして」

私の言葉に、中野さんはちょっと驚いたみたいだった。

「雪奈ちゃん、よお覚えとんのんなー。んー……確かに、ちょおちやうねんなー。」

実はな、大介兄ちゃんって、オレの親父の弟やねん。そんな、オレ、ボードがめっちゃ好きやさかい、何年か前に大介兄ちゃんに頼み込んでな、この時期になると毎年ペンションに住み込ませてもらうねん。ペンションの仕事を手伝う代わりに、宿と食事を提供してもらうちゅー約束なんや。そやし、オレはバイトじゃのーて『タダ働き』っちゅーやつちゃ」

中野さんがあつけらんかんとして言う。

タダ働きだなんて、明るく言う言葉じゃないと思うんだけどなあ。その言い方が可笑しくって、私はクスクス笑ってしまった。

「ん？ オレ、変なこと言うた？」

「いえ、中野さんって、ボードが、好きなんだなあって思ってた」

「おう、楽しいでー、ボード。雪奈ちゃんもやらへん？」

「私？ ……できるかなあ？」

「大丈夫やって。ボードって、いろんな技があんねんけど、ホンマはそんなんどーでもええねん。自分の好きなように雪の上を滑ったらええ。極端な言い方したら、斜面転がっとなってもええんやで。自分が楽しいって思えるように滑ればええねん」

「じゃあ、ちょっとだけ、やってみようかな」

チャレンジ。誓約の一つだもんね。

「そうそう、そうせなな。そーや、オレが教えたるわ」

「それは……悪いです。私、本当に初心者だから、中野さんの足引っ張っちゃうだけになりそうですし」

「ええねん、一人より二人の方が絶対に楽しいし。オレは毎年来とるんやし」

「じゃあ……バイトの空き時間にでも」

「おっしや。まかしとき！ 受講料は安うしとくわ」

ええっ？ お金取るの？

私の思ったことが、表情にも出ていたらしい。中野さんが笑った。

「冗談やって。本気にせんといてんか」

「――中野さんって冗談ばかりですね」

「そりゃ、関西人やもん。冗談言ってナンボっちゅー感じやしなあ」

「えー。あ、そうだ、アルバイトのお仕事ってどんなことするんですか？」

中野さんは赤信号で止まると、私の方を向いてニヤリと笑った。

「――雪奈ちゃん、やっと普通に話しかけてくれるようになったな。ちよつとはオレに慣れてくれたん？」

あ……。

思わず、手で口を抑える。

私、いつの間にか、中野さんのペースに巻き込まれてた？

「すみません……」

「ええっ、そこ謝るトコなん!？」中野さんが大袈裟に驚いた。「別に雪奈ちゃんなんも悪いことしてへんよ? もともと、そうせいつちゅーたんはオレやし。後は『中野さん』が『昴』になったら合格やな」

中野さんの左手が、私の頭をポンポンと優しく叩いた。

ひゃああっ!!

シートベルトの抵抗を僅かに感じた。慣性の法則だ。つまり、車が動き出たんだ。

でも、私は顔を上げられない。

今は、膝小僧を見つめるしか、できない。

だって、私、きっと、また、真っ赤だ。

男の人に頭を優しく叩かれたことなんて、今までに一度もないんだもの。

男の人って、みんな、こんなこと平気ですか？

ペンションは、駅から車で一時間近く走ったところにあった。もつとも、雪道のせいで時間がかかっただけで、距離にしたらそこまで遠くないのかもしれないけど。

その間、中野さんといういろいろ話したおかげで、随分打ち解けられたと思う。

いつの間にか、緊張が解けていた。

私にしては、すごく珍しい。

私が、こんなに早く、初対面の人と話せるようになるなんて。

さすがに未だ、『中野さん』としか呼べないけど。

「でな、今向かってるペンションなんやけどな。大介兄ちゃんとおさんの浩美さんの二人で経営してんねん。めっちゃええトコやで。白樺とか生えとんねん。雪で地面が白いのに木まで白うて、気いっけなぶつかりそうになるくらいなんやけどな。でも、晴れた日にゲレンデの頂上から見る景色とか、めっちゃ綺麗やねん。運がよかつたら、樹氷とかも見れんねんで」

車の中で、中野さんが目をキラキラさせてそう言っていたけど、その意味がなんとなくわかった。

窓の外の世界は、それまで私が知っていた世界とは全く異なるもので、まるで異世界に来たみたいだ。

『一面の銀世界』ってよく言うけど、ぼんやりとしたイメージだったものが、そのまま具現化されたような気分。

中野さんが車を止め、エンジンを切った。

ペンションに着いたんだ。

「雪奈ちゃんも、ここならきつと独りで歩けんでー。この辺は昼でも雪が溶けへんさかい、歩きやすいんや」

中野さんはシートベルトを外すと、先に車を降りた。

私もそれに習って車を降りる。

足の裏から、ふんわりとした感触が伝わってきた。

あ、雪だ。

いや、当たり前なんだけど。

でも、駅に合った雪とは、明らかに感触が違う。すっごくフワフワする。

「雪奈ちゃん、行くでー」

中野さんの声に顔を上げる。

中野さんは、右手の指で車のキーをくるくる回し、左手には私のトランクをぶら下げていた。

あっ、荷物、また持ってもらっちゃってる。

「それ、私、持ちます」

「ええよ。こんな雪ん中、トランクなんて転がされへんで？」
足下を確認する。

確かに、道らしきものはあるけど、それは雪を踏み固めたような感じになっているだけで、とてもじゃないけど、何かを転がせそうにない。

トランクは、列車を降りるときに持ちあげるのがやっとだったくらい
の重さ。私一人では運べそうになかった。

「すみません」

「オレが勝手に『持つ』ってゆーてるんやし、気にせんとき」

「ありがとうございます」

私はお礼を言った。

6 初めての出会い (4)

ペンションは、ログハウスみたいな外観。

玄関のドアの脇に『ペンション・ソフトライム』っていう同じく木でできた表札代わりの看板があった。

中野さんが玄関を開け、中に入る。ペンションの中はとても温かった。

エントランスの天井がこんなに高いのに。

きつと気密性が高いんだ。

「大介兄ちゃん、帰ったでー」

「あ、昴。お帰り。ちゃんと会えたか？」

男の人の声だ。

私の緊張が一気にぶり返した。

「おお。あ、雪奈ちゃん、あの髭生やしたオッサンが、このペンションのオーナー、大介兄ちゃんな」

「初めまして、渡辺さん。私がこのペンションのオーナーです。皆さんにはマスターって呼ばれてますけどね」

「こちらこそ、初めまして。渡辺雪奈です。しばらくの間、お世話になります」

言いながら、礼をする。

よかった。なんとか、つかえずに言えた。

マスターは、とても優しそうな人だ。

ただ、こういった場所に住んでいるからか、手がごつごつと節くれだっていた。

中野さんの言うとおり、顎髭をおしゃれに整えている。

血が繋がってるってだけあって、目元がちよっとだけ、中野さんに似てなくもないかも。

そう思いついたら、不思議と緊張が緩んだ。

それにしても、叔父って言うには随分若い気がする。

「その分だと、もう私と昴の件は、聞いたみたいですね」

と言いながら、マスターの目が急に鋭くなった。

その視線の先には中野さんがいる。中野さんが僅かに後ずさった。

「昴？ お前は誰のことを『オッサン』って言ったのかなー？ ご希望とあれば、今夜、部屋から追い出してもいいんだぞ、俺は」

「うわ、それがかわええ甥っ子に言う言葉かいな。こんな時期に外なんか追っ出されたら、それこそ死んでまうやん」

「お前なら大丈夫だろ。ゴキブリ並みの生命力だ。ちょっとやそつとじゃ死にそうにないからな」

私はつい、笑ってしまった。

仲がいいんだ、この二人。そうじゃなきゃ、こんな風に言い合えないもの。

「オ：オレ、荷物置いてくる」

分が悪いと思ったのか、中野さんがトランク持ったまま退散した。

「まったく……」マスターがその後ろ姿を目で追った。「昴の生意気なものには、本当に困るよ、全く。兄貴はどんな育て方してるんだか」

マスターはそこでふっとため息をつくど、私に笑顔を向けた。

「なんか見苦しいところを見せちゃったね」

「いえ、そんなことないです。緊張していたので、なんか、かえって、ホッとしました」

「本当かい？ それならよかったのかな？ あんな奴でも役に立つもんだな。」

さあ、そんなところに立ってないで、どうぞ中に入って。あ、靴はそこで脱いでね」

私は玄関で靴を脱いで揃えると、出されていたスリッパに足を滑り込ませた。そしてマスターに促されるまま、中へと入った。

床には絨毯が引かれていて、とても暖かい。

マスターがホールに入っすぐ右にあったドアを開けた。
その先には、ラウンジがあった。

窓は小さめだけど南を向いていて、ソファにテーブル、テレビ、
それに暖炉がある。

居心地のいいお部屋。まるで、リビングのような空間だ。

マスターの人柄が表れてるみたい。

「さて、改めて」マスターがこほんと咳払いした。「渡辺さん、ペ
ンション・ソフトライムへようこそ。これからしばらくの間、宜し
く頼みます」

「こちらこそ、よろしく願います。――あの、私、実は、こう
いう…住み込みのアルバイトって初めてで……」

みなさんの足をひっぱっちゃうかもしれないです。

語尾は口の中で消えてしまったけど、多分、マスターは私の言ひ
たいことがわかったんだと思う。

マスターが朗らかに笑った。

「大丈夫だよ、誰にでも初めてはあるさ」

私の中にあつた後ろめたさが、ゆっくりと溶けて行く。

「実は、俺もアルバイトを雇うのは初めてなんだ。今までは、俺と
奥さんと昴でやっていけてたしね。客室もそんなに多いわけじゃな
いし。でも、今年はちよつと事情があつてね」

マスターが言葉を切った。

私の後ろの何かに気を止めているんだと気づいて振り返る。

この部屋に入ってきたドアの方だ。

そこには、女性の姿があつた。お腹が大きい。

え、妊婦さん?!

「大介ってばー、渡辺さんが来たら私も呼んでって言ったのに」

その女性が言った。

マスターよりも少し若そう。口を尖らせて、ちよつと拗ねてるみ
たい。

その仕草が、なんだか可愛い。

「ごめん、浩美。忘れてたよ。よくわかったね」

「さっきそこで、昴君に会ったの」

もー、と言いながら、その女性がマスターの隣に座った。

マスターが、その肩を抱く。

うわぁ、なんかこっちが恥ずかしいよお。

「紹介するよ。俺の奥さん。浩美ひろみって言うんだ。浩美、こちらが今日からお手伝いしてくれる渡辺雪奈さん」

「はじめまして」

浩美さんが手を差し出してくれた。私も手を出し、握手する。

「こちらこそ初めまして。雪奈ちゃん：って呼んでもいいかしら？」

「え？ ええ」

浩美さんの笑顔も、マスターと同じで暖かい。

マスターがずるい、とばかりに横から口を挟んできた。

「じゃあ、俺もそう呼ぼうっと。なんか、さっき昴もそう呼んだよな。若いていいよなー」

「ホント？ あの子も隅に置けないのねえ」

「？？？ 何の話だろう？」

私は曖昧に笑顔を浮かべることで、その場を凌ぐことにした。

もはや、名前で呼ばれることへの抵抗心も沸いて来ない。

「もう察してと思うけど」マスターが言う。「雪奈ちゃんに来てもらうことになったのはね、浩美のお腹に赤ちゃんができたからなんだ。もう安定期に入ってるし、ちょっとは動いた方がいいんだけど、この身体じゃ、無理はさせられないからね。あ、だからって、雪奈ちゃんに重労働をやらせるつもりはないから安心してほしいよ。客室の掃除とか、料理を作るときの手伝いとか、洗濯とか、そういったものを手伝って欲しいんだ。力仕事は全部、昴に押し付けていいから」

ちょうど、中野さんが部屋に入ってきた。

「ちよお待ち！ 大介兄チャン、そりゃないでー。大介兄チャンも手伝ってえな。未だ三十代なんやろ？」

ええっ?! 若そうとは思ってたけど、マスターって、未だ三十代なの？

確か、中野さん、『叔父さん』って言ってたよね？

「何せ俺は『オッサン』らしいからねえ。腰痛めて動けなくなっても困るだろ？」

「未だ怒っとんのかいな……。ホンマに、もお堪忍してえな」

中野さんのその言い方が、いかにも哀れっぽくて、私はつい嘖き出してしまった。

よかった、いい人たちばかり。
がんばれそうだ、私。

7 マスター夫婦の心遣い (1)

今日は木曜日。ここに來たのは月曜日だから、ペンションでのアルバイトを始めて、三日経ったことになる。

さんざん緊張していた割には、普通に仕事をこなしていけてると思う。

逆に、これでお給料もらってもいいの？ ってくらいで、ちょっと拍子抜けしている。

朝は早く起きて、朝食作りの手伝い。自分たちも食事を取って、片付け。

お客さんが出かけている間、または、チェックアウトしたら、客室の掃除、寝具シーツの交換と洗濯、それにお風呂の掃除。

その後、廊下やりビング、プレイルームといった共用スペースの掃除。

その後は、夕食まで、自由時間だ。

買い物と夕食作りは、マスターと浩美さんでしている。

だから私は、それをお客様のいるダイニングまで運んだり、後片付けをしたりする。

私は、大学に入ってからずっと一人暮らしをしてるから、家事はなんとなく一通りこなせるようになっていたし、わからないことがあっても、マスターも浩美さんも中野さんも、みんな親切に教えてくれた。

ペンションの人たちへの私の人見知りも徐々になくなって（人見知りなんてしている場合じゃなくて）、すごく、居心地がよかった。

マスターや浩美さんという話したりもした。

どうやら、マスターと中野さんのお父さんは、随分年の離れた兄

弟らしく、マスターは未だ三十七歳なんだそうだ。浩美さんは、その四つ年下の三十三歳。

ちよっと結婚が遅かったらしく、今、浩美さんのお腹にいるのが、初めての赤ちゃんなんだって。

確かに、初産にしては、ちよっと遅めかな。

だから余計に、マスターは浩美さんの身体を気遣ってる。

ふとした瞬間にね、感じるの。ああ、この二人は、すごく愛し合ってるんだなあって。

例えば、食事の終わった食器を浩美さんの代わりにマスターが運んでいたり、浩美さんが階段を昇り降りするときにさり気なくエスコートしていたり。

本当に、些細なことなんだけど。

中野さんとも、さらに打ち解けた……と思う。

まず、呼び方が『昴さん』になった。でもこれは、打ち解けたって言うよりも、マスターからの希望、かな。

男の人の友達(?) っていうだけであんまり慣れてないのに、名前で呼ぶなんて、なんだか恥ずかしい。

でも。

「俺も浩美も『中野』だからね。雪奈ちゃんが『中野さん』って言うたびに、反応しちゃうんだよね。誰のことか区別するためにも、あいつのこと『昴』って呼んでくれないかなあ？」

マスターにそう言われちゃうと、拒否できない。

確かにその通りなんだもの。

そして、それに呼応するみたいに、昴さんは私のことを呼ぶとき、いつの間にか『雪奈ちゃん』から『雪奈』に変わった。

それは全然嫌じゃない。親しみこめてそう呼んでくれてるのがわかるから。

でも、昴さんにそう呼ばれるたび、なんか、落ち着かない気持ちになる。

こそばゆいような、齒がゆいような。胸の奥がざわざわする。それが、なんか気になっちゃう。

同じ屋根の下に居て、しょっちゅう顔を合わせるんだから、いい加減に慣れなきゃって思ってるんだけど。

昴さんは、朝のお仕事を一通り終わると、毎日のようにゲレンデへ繰り出している。

今朝は未だ、お仕事してるはずだから、ペンション内のどこかにはいるはずだけど。

そう言えば昨日は、ペンションに泊まりに来ていたOLの二人組さんと一緒に、仲良さげに帰って来ていた。ゲレンデでたまたま遇って、そのまま一緒に滑ってたんだって。

すごく明るくて陽気なOLさんたちで、昴さんもとっても楽しんだみたいだった。

本当は、昨日も一昨日も、ゲレンデに出る前に昴さんは私を誘ってくれていた。

ペンションに、貸し出し用のウェアやボードがあるから、それを使わせてもらえばいいってコトも教えてくれた。

でも、私は未だ仕事を覚え切る前から遊びに出ちゃうことになんとかなく抵抗があって、断っていた。

それに、雪山自体が初めてで、恐怖心もある。 فقط。

今日は、ちょっと出てみようかな、ゲレンデ。せっかくここまで来たんだもの。チャレンジしてみたい。

昴さんと一緒にだときっと迷惑かけちゃうから、とりあえず一人で。

「『案ずるより生むが易し』って言いますけど、本当ですね。私、もっと皆さんの足を引っ張っちゃうんじゃないかって思っていました」
客室に運ぶ新しいシーツを積み重ねながら、私は言った。

洗濯機の前には、浩美さんがいる。

「そんなことないわよお。雪奈ちゃんが来てくれて、私、すつごく助かってるんだから。家事もできるし、気も利くし、よく働いてくれるし、本当にいい子が来てくれたわ。ねえ、大介さん？」

浩美さんが見上げた先には、マスターがいる。

マスターは脚立の上で点かなくなってしまった電球を取り替える作業をしていた。

「ホントだよ。アルバイトってやっぱりアタリ・ハズレがあるからねえ。電話が来たときは、もっとハキハキした子になって想像してたけど、会ってみると全然違うね。なんか雪奈ちゃんってふんわりしてる。名前とイメージがピッタリだ」

私は苦笑するしかない。

電話したの、実は私じゃないんです……なんて、いまさら言い出せないし。

それに、今はここに来て本当によかったって思ってるもの。

典子ちゃんやみんなに感謝しなきゃ。

「本当にそうよね。とっても可愛い名前。なんか、このペンションにもピッタリだし。もしかして、冬生まれ？」

「え？ ええ……クリスマス・イブなんです、誕生日」

「えーっ！　すごいじゃない。なんかロマンティックね」

浩美さんは目をキラキラさせている。

私は曖昧に相槌を打った。

実際は、そんないいものでもないですよ？

だいたい冬休み中だし、イブなんて言ったら友達たちは彼氏とデートだし。家で過ごすだけだもの。

もちろん、お父さんもお母さんも、お祝いしてくれるけど。

お父さんはおめでとうってプレゼントをくれて、お母さんはいつも手作りのケーキを作ってくれる。お母さんは「いい加減、彼氏の一人もいないの？」って要らないツツコミも一緒にくれたりして。

そういえば、今年は、そんな風に祝ってくれる家族もいないんだ
った。
ちよつと気分が萎える。

8 マスター夫婦の心遣い (2)

「ねえねえ、大介さん。イブの日、私たちで雪奈ちゃんのお誕生日会しましょう？」

浩美さんが脚立を降りてきたマスターの服を引っ張った。

「そうだな、せっかく頑張ってもらってるんだし、お礼も兼ねてお祝いしなきゃ」マスターも笑顔だ。「イブって言ったら、もうすぐじゃないか。今日が十八日だから……六日後？」

えっえっ？

思ってもみなかった話の展開についていけない。

「あのっ、いいです、そんな、気を使わないでくださいっ」

私は一生懸命言っただけど、もうマスターも浩美さんもヤル気満々だ。

「面白そうじゃないか。昴にも言っておかなきゃな」

「あの、ありがとうございます」

私は頭を下げた。

他人の私を祝ってくれるって言う二人に心から感謝した。

「でも、この週末から冬休みに入る学校や会社が増えるから、イブの頃には、お客さんがたくさん来てるわよー。きっと忙しくなるから、今のうちに覚悟しておいてね」

おどけた調子でそんなことを言いながらも、浩美さんは手を休めない。

「はい」

私は積み重ねた今日の交換分のシーツの下に両腕を通すと持ち上げた。

その高さで前方が見えなくなる。

「雪奈ちゃん、そんなに持って大丈夫？」

浩美さんの声がする。心配してくれてるのかな。

「大丈夫です。意外と力持ちなんですよ、私」

「本当？ 無理しないでね」

それは私のセリフですよ、浩美さん。

浩美さんってば、四六時中何かしら働いてるんだもの。

ただでさえ身重で、いろいろと動きにくいはずなのに。本当に働き者だ。

そんな浩美さんを目の前にして、ラクしようだなんて思えない。

「じゃあ、行ってきますね」

私はシーツの脇から顔を出しつつ、歩き出した。

ペンション・ソフトライムには、全部で十の客室がある。全部ツインルームだ。

マスターや浩美さん、昴さん、そして私の過ごす居住区は別棟になっていて、ペンションとは屋内廊下で繋がっている。

今いらしているお客様は四組。

だいたいの人が、一泊二日や二泊三日で帰っていく。

このペンションの雰囲気からか、恋人同士だったり、女同士だったり、お客様はみんな若い年代の方ばかり。

そして、お客様までみんな、いい人たちばかりだった。

やっぱり、いい人の近くにはいい人が集まるのかな。

そんなことをぼんやり考えながら、階段を上ろうとして廊下の角を曲がった途端、何かにボフツつとぶつかった。

あれ？ ここには何もなかったはずんだけどな。

私、何か置きっぱなしにしちゃった？

シーツが崩れて来ないように気をつけながら、二、三步後ろに下がって、上半身を横に倒して見た。

ん？ 人の脚がある。

お客様は、もうみんな、出掛けられたかチェックアウトされたはず……。

「なんやなんや?!」

私の腕から、重さが消えた。

「あ……」

昴、さん。

目が合った。ドキツとする。

「なんや、雪奈かいな。こないなもん持ったまま階段歩いたらあかんって。危ないで」

昴さんは私から奪ったシーツをひょいっと自分の腕の上で整えた。

「どこや? オレが持って行つたさかい」

昴さんが先に立って、階段を上って行く。

私はその背中を複雑な気持ちで眺めた。

昴さんに出会って四日目。

そんな短い時間しか一緒に過ごしてないのに、気がつく、昴さんを目で探している自分がいたりする。

なんか、変な気持ちだ。

すっかり頼りにしちゃってるのかな、とも思うし、私にとっては初めての男の人の友達だから、変に意識して気になってるだけのかな、とも思う。

昴さんは、優しい。

私がこうやって何かを運んでいるところに出くわすと、必ず代わりに持ってくれる。

掃除しているときだったら手伝ってくれるし、一人で休憩してるときは声をかけてくれる。

ゲレンデにだって、毎日誘ってくれる。

そのたびに、私はとっても暖かい気持ちになるけど。

でも、それは、きつとみんなに対して同じように振舞っていて――

「雪奈? 何しとるん? どの部屋なんか教えてくれな、運ばれへ

ん」

昴さんの声にハツとする。昴さんが、階段の踊り場で私を見下ろしていた。

いけない。私の仕事なのに。

「ご、ごめんなさい……」

私は急いでその後を追った。

アイロンの効いたシーツが、バツと宙に広がった。

四隅の内の二箇所を持って、静かに下ろす。反対側の二箇所は、昴さんが持ってくれていた。

いつの間にか、シーツの交換まで手伝って貰っちゃってる。

私が頼んだわけじゃなくて、昴さんにとっては当たり前のことのように、シーツを部屋に運んだ後自分から広げ始めたのだ。

昴さんは昴さんで、お仕事あるはずなのに。

「すみません、ここまで手伝ってもらっちゃって……」

「そんなん気にせんでええよー。手伝うてもろてるのは、こっちの方やし」

昴さんがにっこり笑う。

その笑顔に、なんか急に落ち着かない気持ちになった。

慌てて俯いて、シーツの皺を伸ばす。

「で、でも、昴さんも、自分のお仕事があるでしょう？」

「オレ？ オレはお終わったで？ 未だお客さんも少ないし、楽

チンなんや。明日あたりから、ぎょーさん来おるけどな。雪奈も、

今のうちに覚悟しときや？」

あ。さっき、浩美さんに言われたことと同じこと言ってる。

なんだかおかしくなって、クスリと笑ってしまった。

昴さんがそれを目敏く見つける。

「ん？」

「いえ、なんでもないです」

「なんや、気色悪いなあ……思い出し笑いか？」

「そんな感じです」

昴さんが表情を歪めて頭を掻く。でも、すぐに唇の端を片方だけ上げて笑った。

「なあ、雪奈、知っとる？ 思い出し笑いする人ってな、えっちなんやって。」

そー言えば、オレら、今、密室のベッドの脇で二人っきりなんやけど……なんか変な気分になってけーへん？」

「変な気分？」

「そりゃ……男と女がベッドでするコトっちゅーたら、一つしかないやろ？」

昴さんの話が私の頭に到達するまで、一瞬、間が空く。

えっと、それって……？

その意味を理解した瞬間、私の顔が火を噴きそうくらい熱くなった。

「なっ、なりませんっ！」

もおーっ！ 昴さんのバカッ！

なんでそんな恥ずかしいこと、平気な顔で言うのよー。
信じられないっ！

9 マスター夫婦の心遣い (3)

昴さんが真っ赤になった私を見て、お腹を抱えて笑い出す。

「もしかして、雪奈、想像したん？」

「してませんからっ！」

「あははは、雪奈って、ホンマにかわええなあ。真っ赤っ赤あや」
「言わないでくださいッ！」

火照りが治まらない。

ああ、ホント恥ずかしい。

昴さんが未だ笑いながら、私を宥めるように頭をポンポンと撫でた。

「そんなんじや、雪奈の彼氏は苦労しとるんやろなあ」

「彼氏なんていませんッ！」

「あ、おらへんの？」

そーなんです。いないんです。

だからもおあんまりからかわないでください、ホント、お願い。

「――なんや、彼氏おらのんか」

「昴ー！ 昴？ なんだ、ここにいたのか」

昴さんが何か言いかけたのを遮って、マスターが客室のドアから顔を見せた。

「おお、大介兄チャン、どおしたん？」

「あ、雪奈ちゃんも一緒か。ちょうどよかった。明日の夜、森田さんが恒例の鑑賞会やるけど来るかって誘ってくれてるんだ。昴、雪奈ちゃん行って来たらどうだ？」

「ホンマに？ 行く行く。また誘うてくれたんや、嬉しいわあ。雪奈も行くやろ？」

鑑賞会？

「あの、何の話……」

「あ、森田さんっちゅうのは、近所に住んだはるオツチャンでな、星見るんが趣味なんやて。毎年、年末に、星空鑑賞会開いててん。メチャメチャ綺麗やで」

星空鑑賞会だなんて、なんか素敵。

行ってみたい……。

確かに、このあたりなら、星も綺麗に見えそうなもの。

冬の大三角、見えるかな。もしかしたら、冬のダイヤモンドもはっきり見えるかも。プレアデス星団も見えるんだろうなあ。

「じゃあ、二人共行くって、森田さんに言っておくよ」

私の表情から、イエスの返事を読み取ったらしく、マスターが言う。

「おおきに。大介兄ちゃんは？ 一緒に行かへんの？」

「今年は辞めとく。浩美を置いていけないからね。家で一緒にのんびりしてるよ。ところで、二人とも、今日、これからどうするんだ？」

マスターの声に、昴さんが何かを思い出したように手を打った。

「あ、そうや、雪奈、今日、この後ヒマ？」

「え？」

「今日こそ一緒にグレンデ行かへん？ さっきな、ホンマは、雪奈を誘おうと思って探しとったんや。昨日も一昨日も、天気があんまりよおなかったけど、今日は快晴やさかい、きつと、めっちゃ気持ちええよ」

どうしよう。

確かに、今日はグレンデに行ってみようとは思ってたけど。

昴さんと一緒に……。前に教えてくれるって言ってたけど、そんなことしたら、それこそ、昴さんが楽しめなくなっちゃうんじゃないかな。

昨日昴さんが一緒に滑ってたっていうOLさんたちくらいに、私

も滑れるんだったら別だけど。

私は枕に手をつけた。

枕カバーも取り替えなきゃね。

「でも、私、滑れないし」

挑戦したいとは思うけど、そのせいで昴さんがつまらなくなっちゃうのは、嫌だ。

「初めてなんだろう？ それなら滑れなくて当たり前さ。教えてもらえばいい」

マスターが後押ししてくれる。

「せやから、オレが教えたるんやんか」

昴さんが言った。

——本当に、優しいなあ。

私なんかに構ってたら、自分が楽しめなくなるの、わかってるはずなのに。

「私も、滑れるようになるかな、ボード」

ぽつりと呟いた。

「なるって。なるなる。オレが保証したる」昴さんが自分の胸を叩く。「オレが手取り足取り教えたるさかい、安心しいや」

その言い方に、私はさっきの話を連想してしまった。ちょっと安心できない……かも。

「お前の『手取り足取り』は安心できん」

私の代わりに、マスターが言ってくれた。ご丁寧に、手ツツコミ付きで。

「なんやねん、大介兄チャン。まるでオレに下心あるみたいな言い方せんといてんか。雪奈が誤解するやん」

「そんなことないだろう。雪奈ちゃん、こんなに可愛いんだ。お前だって健康な二十歳の男性だし？ 男だったら、多少の下心は持つてるだろう」

「うっ、うっさいわ。放っといてんか。大介兄チャンかて、浩美さんのこと、ゲレンデでナンパしたってゆーとったやないけ！」

「そーだ。すっごく可愛かったんだ。文句あるか」

な、なんかすごい内容なんですけど……。

聞いている私の方が、また赤くなっちゃいそう。

でも、内容はともかく、昴さんとマスターの掛け合いは、漫才を見てるみたいだ。

「ま、冗談は置いて」マスターが私の方を向く。「雪奈ちゃん、ゲレンデに行くなら、浩美の道具一式、使ってよ。どうせ浩美は使えないし、レンタルの物を使うより絶対にその方がいいから」

「ホンマに？　浩美さんの借りてええんやったら、その方が絶対ええわ。雪奈、借りといったら？」

「えっ、いいですよ、そんな」

私は胸の前で両手を振った。

これ以上善くして貰っちゃうなんて、恐縮しちゃう。

バイト代ももらってるし、レンタル代くらいは自分で出さなきゃ。それに、浩美さんに断りもなく、勝手に借りられないよ。

「大丈夫。浩美がそう言ってるんだ。雪奈ちゃんがゲレンデに行くなら、私の道具を使ってもらってくれて。雪奈ちゃんに使ってもええなかったなんて言ったら、俺が浩美に怒られる」

う…なんか、断る術を失った気分。

「じ、じゃあ、お言葉に甘えて……」

私はぺこりと頭を下げた。

マスターが、それでヨシ、と頷いた。

10 マスター夫婦の心遣い (4)

「実はもう、浩美の道具一式、準備できてるんだよねー。雪奈ちゃんが行くって言ったら『ハイッ』って渡せるように、メンテナンスマでバッチリ。見たトコ、雪奈ちゃんの身体のサイズは浩美とそう変わりなさそうだし」

手で顎鬚をいじりながら、マスターは私の身体を上から下までざっと眺めた。

そのマスターを、昴さんが枕で叩く。

「あでっ！」

「そのやらしい目え、やめえや、このエロオヤジ！」

「昴ッ！ 何を人聞きの悪い……」

マスターが打たれたところを擦る。

な、なんか、ケンカ始まっちゃうの？

私はおろおろしつつも、どうにか二人に声をかけた。

「あの、私、気にしてませんから……」

「ほら、な？ 雪奈ちゃんもああ言ってるだろ。そう見えるのは、お前の心がヤマシイからだ」

マスターは勝ち誇ったようににっこり笑ったが、昴さんは不服そうだ。

「とにかく、心配なのは靴だけかな。試してもらって、もし合わなかったら、そのときはレンタル用の靴から選んでもらうね。足が痛い、せつかくのボードも楽しめないからな」

「すみません。本当に、何から何まで……」

それから手早く仕事を終わらせて、ペンション内のドライルームに向かった。

今、私は、浩美さんのものだというスノーボード用のブーツに足を通している。

とても運よくと言うか何というか、足までサイズがピッタリで、板も靴もそのまま使わせてもらうことになってしまった。

今履いているブーツはちょっと大きく感じるんだけど、それでいいらしい。

「雪奈、利き足どっちかわかる？」

昴さんが、スノーボード用の板が入ったケースを開けながら私に聞いてきた。

「利き足？」

足にも利き足ってあるの？

「知らんのんか。んーと、じゃあ、右足前にして、筋斗雲に乗るカッコしてみて？」

「へ？」

筋斗雲って、アレ？

「いーから、はよやる！」

「はっ、はい！」

右足を前に出して、体重をかけてみた。

……なんか、ぎこちない感じ。

「どお？」

「うーん……」

「ま、すぐにはわからんか。今の感覚、覚えときや？ ほな、次、逆な」

今度は左足。

あ。こっちの方が、なんか自然だ。

「こっちの方がしっくりくる……かも」

「そか。雪奈は、レギュラーみたいやな。なあ大介兄ちゃん、浩美さんって、レギュラーやったっけ、グーフィーやったっけ？」

ちようどやって来たマスターに、昴さんが聞く。

マスターは、肩に何か大きめのバッグをかけていた。

「浩美はレギュラーだ」

「おお、ラッキー。浩美さんもレギュラーなんやったら、板、このまま使えるやん♪」

なんかよくわからないけど、いいことがあったみたい。

「雪奈ちゃん、ウェアはここに置いておくから。中にゴーグルとか帽子も入ってる。後は昴に聞いて？」

「はい、本当にありがとうございます」

「おおきに」

「それじゃ、気を付けて。楽しんでおいで」

そう言い残して、マスターは行ってしまった。きっと浩美さんのところに戻ったんだ。

昴さんは、自分の板とブーツを持ってペンションの外に向かって歩き出した。

私も浩美さんの板とブーツ持つ。

うわぁ、結構重いんだあ……。

よたよたと歩いていると、昴さんがすぐに戻って来て、私から板を取り上げた。

「結構重いやろ？ でも、履いたらあんまり重さは感じひんようになるし」

昴さんはいつも笑顔だ。

「あ、ありがとうございます……」
まだだ。

いつも助けられちゃってるな、私。

板とブーツを、ペンションの外の、邪魔にならないところに置く。いったん、ドライルームに戻った。

「じゃ、雪奈、オレたちも部屋戻るか。ウェア着なかんし」

昴さんが、マスターから渡されたバッグを持ち、マスターの居住区の方へ歩き出す。

マスターが私のために空けてくれた部屋は、昴さんの部屋の隣。

ちゃんとした部屋なんだけど、天井だけは屋根裏部屋みたいに斜めになっている。

普段は使っていない部屋で、私が来るから慌てて掃除したってマスターが言ってた。

マスターは、キャスターの付いた姿見まで用意してくれていた。その姿見とトランクを隅に立てて、布団を敷くと、それだけでいっぱいになっちゃうくらいの部屋だけど、あんまり部屋で過ごしてないからそれで十分。

もちろん、布団は毎朝上げている。

昴さんが、部屋の中にバッグを置いた。

「綺麗に使ってるなあ。オレの部屋とえらい違いやわ」

昴さんが部屋の中をぐるりと見回した。

えっと……なんか、恥ずかしいんですけど。

私が俯いているのに気付いたのか、昴さんが謝った。

「おお、すまんすまん。じゃあ、これ着て来てんか」

昴さんがバッグを開けて、中からいろいろと引っ張り出す。

その一つ一つを示しながら、着方を教えてくれた。

「ウェアの中は、タートルのフリースとかがええんちゃうかな。動く暑くなるさかい、あんまり着込まん方がええよ。下は、タイツ履いて後は、この中に入っとるスパッツと靴下履いて、その上からウェアな。」

あ、それと、今のうちに、脚の筋、よお伸ばしときや？ 傷めた

らあかんし」

「ハ、ハイッ！」

「ほな、オレもウェアに着替えてくるさかい」

昴さんが部屋から出て行く。隣から、ドアの音がした。

えっと、フリースは、確か何枚か持ってきてたはず。

私はトランクから、ピンク色のタートルネック・プルオーバーを出した。タイツは、今履いてるのでいいや。

うわあ、このスパッツ、クッションが付いてる？

膝とか、お尻とか……。なんか、二周りくらい太った感じだあ。
靴下も、こんなに分厚いんだ。

だから、ブーツがちょっと緩くてもいいって言ったのか。

ウェアのズボンを履き、ベルトを締める。ジャケットを羽織り、
ジッパ^①を上げた。

姿見を引っ張って来て、覗き込む。

全然知らない私がそこにいた。

茶色いズボンと白いジャケット。ちよつとぶかぶかしてる？

ニット帽を被って、ゴーグルで抑えた。

鏡の前で、身体を右に左にひねりながら、着崩れしてるところが
ないようにウェアを整える。

うん、格好だけは、今のところ一人前……かも。

11 初挑戦のスノーボード (1)

着こなしに自分なりに満足して姿見を片付けたところで、部屋の戸がノックされた。

「雪奈？ 着替え終わった？」

「あ、ハイ」

「入ってもええか？」

「ええ」

「開けんでー」

昴さんが部屋に入ってきた。

あ、昴さんも着替え終わってる。

うわあ、なんかカッコイイ、かも。

昴さんのウェアは、グレーと赤が基調色。ニットの帽子はウェアに合わせてグレー。ゴーグルが赤。

似合うなあ。スノーボードです！ って感じがする。

私は……どうかな。

珍しく昴さんは何も言わない。顎に手を当てて、繁々と私を見ている。

そんなに見られると、は、恥ずかしいんですけど。

「あの、どうですか？」

私は聞いてみた。

「――ホンマにめっちゃめっちゃ似合おとるよ。ビックリした」そしてにっこりと笑う。「ほな行こか」

それからさらに三十分後、私は昴さんに連れられて、ゲレンデへとやって来ていた。

初めてのゲレンデ。初めてのスノーボード。

ドキドキするー!!

心臓がバクバクしてるのを感じながら、ブーツに足を包んだ。浩美さんのブーツは、ワイヤー式っていうタイプらしくって、普通のタイプよりも着脱がラクなんだそうだ。

脛のところに丸いダイヤルみたいなものがあって、それをぐりぐり回すことで、靴紐の代わりのワイヤーが巻き取られて足が締まっていける。

緩めたいときは、そのダイヤルの真ん中を押しながら、ブーツを開けばいいんだって。

昂さんのブーツは靴紐式だ。こっちが普通のタイプらしい。

ぎゅーっぎゅーって、一編み一編み、自分で堅く締めていっている。大変そう……。

「ワイヤータイプ、ええなあ。オレも今度、それ買おとこかな」

昂さんよりも早く履き終えてしまった私を見て、昂さんがぼやく。次は板だ。

昂さんが、板を履く前に、インフォメーション・センターから少し離れた人の少ない場所に行こうって言った。

「雪奈は、スキーもやったことないんやったな？」

「はい……」

「ほんなら、まずは、板履いて立てるようにならな。その後、スケーティングやろ？ 転び方覚えてもろて、そんなはリフトやな」

ええええええっ、もう今日リフト乗っちゃうの？

自分の顔が一気に引きつったのがわかった。

昂さんが私の表情を見て大笑いする。

「雪奈、今日中に、リフト二回は乗ろな。大丈夫やって。オレがついてるさかい。な？」

インフォメーション・センターから十メートルほど離れて、ほとんど平らな、人の少ない場所まで来ると、昂さんが立ち止まった。「ここならええやろ」

昴さんが私に雪の上にお尻をついて座るように言う。

足を前に出すと、板の装着の仕方を教えてくれた。まずは固定される左足から。

かかととアキレス腱を板の金具に当てて、つま先と足首にベルトを巻いて固定する。

「じゃあ、一回立ってみよか」

昴さんが言い、私と向かい合ったまま数歩下がった。

え、イキナリ？

どうやって立つのか、教えてくれないの？

うーん……。

私はいろいろ考えた挙句、右足を板の手前に置き、手を後ろについてから両足の方へ体重を移動してしゃがみこむような格好をする。左足が、なんか変々。

それでもなんとか立ち上がった。

「片足は立てるな。よし。ほな、次は両足固定してみよか」

昴さんは容赦がない。

もう一度座り、さっきと同じように右足も固定した。

うわ、膝下が全然動かない……。なんかすごく不安なんですけどっ！

さっきと同じように、昴さんが数歩先で私が立つのを待っている。やっぱり、立ち方は教えてくれないのね？

さっきと同じようにしたら立てるのかな？

まず、板の上にしゃがんで、両膝を……伸ばした。

「おお？」 昴さんが目を丸くする。「雪奈、立てるやん！ 立てるようになるまで、もっと時間かかると思うとった」

ん？ もしかして、私って案外すごいのか？

それにしても、ボードって足が開きっぱなしになるんだ。

よく考えてみたら、当たり前前なんだけど……慣れないなあ。

「雪奈って、もしかして運動神経ええの？」

昴さんが私の目の前まで来た。両手を肩に置かれる。

私は脚を板に固定されてるから動けない。

うう、ちょっと近いですよ。

「多分、悪くはない、かな？」

「走るんは？ 速いん？」

「高校生のとき、五十メートル走は七秒代でした」

「それってかなり速いんとちゃうの？」

「んー……どう、なのかなあ？」

そういえば、クラスの女の子の中では三番目だった気がする。それって速いの？

「人は見かけによらんもんやなあ」

昴さん、昴さん。それって絶対に褒めてませんよね？

「そーか、そーか。そーやったんや。それやったら、今日中に木の葉くらい滑れるようになるんとちゃうかな……」

昴さんがずつとぶつぶつ呟いている。

コノハ？ って何？??

「よし、雪奈、予定変更や」

「え？」

「今からリフト乗るで。一日券買お」

え？ スケートイングは？ 転び方は？

一日券って、今日いったい何回リフト乗るつもりなんですかー？！

「スケートイングだけは、ちょっとはできなリフトに乗れへんさかい、今からリフト券売り場までの間でスケートイング教えるわ。転び方は、自然と覚えるやろ」

それで終わり？！

狼狽する私を他所に、昴さんは私の足下にしゃがみこんで、右足のベルトを外した。

そして、あつという間に、昴さんも自分自身の板を片足だけ装着する。

あ、昴さん、私と逆の足だ。

「オレ、グーフィーやねん。あ、グーフィーって言うんは、右足が

前の人な。雪奈はレギュラー。左足が前の人」

そんな違いがあるんだ。

いまさら、筋斗雲ポーズの意味を知る。

「ほんなら、スケートティングな。雪奈はやったことなさそうやけど、つまり、スケートボードに乗る感覚や。固定してへん方の足で地面蹴って、体重を固定してる方の足——軸足な、そっちに乘せる。こんな感じ」

昴さんが、私の周りを回って実演してくれた。

昴さんの滑りはとても綺麗だ。スイーッて音がしそう。

ある程度見せると、昴さんは板を両足で踏み締めずらし、ブレーキをかけた。

雪煙が舞う。

「ほなやってみ？」

昴さんのフォームを思い出す。確か、こんな感じ？

右足で板の内側の地面を蹴り上げ、同時に左足に体重を乗せた。雪の上を板がが少しだけ滑って、すぐに寸詰まってしまう。右足を地面に付いた。

やっぱり、いきなりスイーッと行くのは無理かあ。

どうしたら、上手に滑れるのかなあ。

12 初挑戦のスノーボード (2)

——五分経過。

私、かなり必死です。

だって、全然滑らないんだものー！

転ばない代わりに滑りもしないって、ちょっと悲しい、かも。

昴さんが私の方に近づいてきて、頭に手を置いてぐりぐりと撫でた。

「雪奈、ちょっと力みすぎや。リラックス、リラックス」

リラックスって言ったってっ！

私、初めてなのにーっ！

「雪の上やとな、前傾に力入れるとブレーキがかかんねん。リラックスして、ちようどええくらいに体重かけたら、前に進むさかい。さっきからずっと見とるけど、雪奈、全然こけへんし、焦らんでもすぐに上手あなるわ」

昴さんが、またスイーツと進む。

私もその後を追いかけて、地面を蹴った。

リラックス、リラックス。

——あ、滑った。

滑ったー！

昴さんが、そんな私を見てにっこりしてる。
なんかすごく嬉しい。

「雪奈、慣れてきたんやったら、地面蹴った後、右足も板の上に乗せられるか？」

昴さんが既に実演している。

私も。

お？ ちょっとぐらぐらする。けど、なんか、それっぽくできてる？ かな？

しばらくそのまま滑って、昴さんが止まった。

ん？ いつの間にか、人の多いところに来てる？

「よっしゃ。合格。ほな、リフト乗ろな」

気が付くと、そこはチケット売り場の前。

えっと……これは、もしかしてもしかします？

まだ、板を付けて、一時間も経ってませんよ？

「あの、も、もお、ですか？」

「そ。もお。そんな顔せんでも、大丈夫やって。リフトから降りるときは、オレが支えとくさかい。ちょお、ここで待ったときや？ 動いたらあかんよ？」

昴さんがチケットを買いに行ってしまった。

うわあああ。

心臓がばくばくしてます。

私、小心者なのに！。

私の心臓さん、この緊張に耐えられるかしら。

私っていつつもこう。

やる前に、緊張して、いろいろ無駄に悪いことばかり考えて、一人で焦っちゃって、初めの一步がなかなか踏み出せないの。

今日は、大丈夫だよな？

昴さんが一緒にいてくれるもの。きつと大丈夫。

大丈夫だよ、雪奈。

あ、昴さんが戻って来た。

「雪奈？」

「は、ハイッ！」

うひゃー変な声出たー！？

昴さんが笑い出す。

ヒドイ。そんな、お腹まで抱えて笑うことないじゃない。

こっちは死にそうなくらい緊張してるんだから！

「あははは、はは、雪奈、緊張しすぎ！ あはははは」

「だって」

「まあ、初めてやもんな。緊張すなっちゅー方が無理やろなあ」

そうです。そうなんです。昴さん、わかってます？

リフトですよ？ 勝手に動く椅子ですよ？

上手く乗れるかどうか、座れるかどうかもわからないですよ？

落っこちたらどーするんですか？

仮に上手く乗れたとしても、どうやって降りるんですか？

降りられなかったら、ずーっとグルグルグル回っちゃうんですよ？

すよ？

昴さんがため息をつく。

「しゃーないなあ。雪奈、オレが緊張の解けるオマジナイしたる」

昴さんはそう言って私の真ん前に立った。

おまじない？ そんなのがあるの？

昴さんが腰をかがめて、私と目線を合わせた。

すごく優しい笑顔、だけど。

近いっ、近いからっ！

ホントに近すぎっ！

手を伸ばさなくっても、触れてしまえそうな距離。

私、完全に硬直。

昴さんの手が、私の顔に伸びてきた。その手はグローブをしていない。

昴さんの指が、私の額に触れた。柔らかく。

息を呑む。

そのままスツと横にスライドしていった指が、私の顔にかかっていた髪を、耳にかけた。

そして、指先は顔の輪郭に沿って流れて行き、顎の先で止まる。

その指に、少しだけ、力が入った。私の顎が、少しだけ、上がる。

昴さんの笑顔が、すごく色っぽく見えた。

昴さんの指が、名残惜しそうに、ゆっくりと離れる。

昴さんの身体も、ゆっくりと離れていく。

同時に、私の身体が一気に脱力した。

「ホラ、な？ 緊張、解けたやろ？」

昴さんがニヤリと笑った。

もしかして、す、昴さんの言ってたおまじないって……。今の、ですか？

その場にへたり込みそうになった私を、昴さんが、おっとと持ち上げた。

「雪奈、大丈夫か？」

「な、なんとか……」

なんだか、どっと疲れが……。

し、死ぬかと思った……！

なんか、体力使い果たしちゃった感じ。

「雪奈って、ホンマに初心なんやなあ」

昴さん。その言い方って、絶対に褒めてないですよ？

どうせ私には、彼氏いたことなんてないですよ。

それどころか、同年代の男の人とも、ほとんどまともに話したこ

とすらないですよ。

昴さんが、初めてなんでもん。

だから私、昴さんの側にいると、どうしていいかわからなくてドキドキしっぱなしなんです。

「冗談のつもりやったんやけど、雪奈には刺激が強すぎたんやろか。ま、カワエエから許したる。さ、行こか。今やったらちようど、リフト空いてるみたいやし」

何を許してもらったのかサッパリわからないまま、私はリフト乗り場の列に並ばされてしまった。

13 初挑戦のスノーボード (3)

「リフトに乗るときは、焦らんと、椅子を待つんや。椅子の方から膝の裏にぶつかってくるさかい、そしたら座ればええ。雪奈が上手に乗ったら、オレも座るな」

リフトはいよいよ私たちの番。

私が右で、昴さんが左。

私は身体を半回転させて、大きな滑車に沿ってこちらに向かってくる椅子を待った。

昴さんの言ったとおり、膝の裏に当たる。それを感じてから、腰を下ろした。

乗れた！。

隣で、昴さんも座る。弾みでリフトが軽くバウンドした。

リフトに運ばれ、足が宙に浮いていく。同時に、左足が板の重さで下に引っ張られる。

うう、重い……かも。

「落ちたらあかんし、セーフティ・バー降ろすな」

昴さんが、上からセーフティ・バーと呼ばれた金属の棒を降ろした。

あ、これで落っこちないようにするのか。

それにしても、リフトに乗ると板の重さを感じる。さっきまで全然そんなこと思わなかったのに。

「雪奈？ こうしたら、楽やで」

昴さんが自分の足下を指差した。足を持ち上げて、私が身を乗り出さなくても見えるようにしてくれている。

昴さんは、右足に固定された板の半分を、左足の足首に乗せていた。

ああすると楽なの？ 私もやってみよう。

「よいしょっ」

板が重くて、声が出てしまった。

左足にぶら下がっていた板を、右足に乗せる。

あ。確かに、楽になった。重さが分散されたのかあ。

リフトは、地面よりも随分高いところを通っていた。下を滑走する人たちが小さく見える。

今は、スキーヤーさんもボーダーさんもたくさんいるんだ。

あ、あの人転んだ。うわあ痛そう……。

あっちの人は、上手だなあ。雪の上に波線を描いてるみたい。

あれ？ あそこにあるのって、オリンピックとかでやってる『ハーフパイプ』っていうやつだね？

その隣は、ジャンプ台？！

ふわああっ、跳んだ！ すごおい……。

「ん？ 雪奈、ああいうんに興味あるんか？」

昴さん、私の見ているものに気づいたみたい。

「興味、って言うか、みんなすごいなあって思っ。怖くないのかなあ」

「そやなあ。初めは誰でも怖いんとちゃうの？ でも、途中でいっぺんでも『怖い』って思ってもたら失敗するさかい、思い切らんかん。あ、ホラ、落ちた。うわー背中から真っ逆さまや。かわいそめっちゃ痛そうな落ち方しはったなあ。……でもな、不思議なもので、技が一回決まると、病み付きになんねんなあ」

昴さんも、あんなこと、やるのかな？

きつと、技が成功したら、気持ちいいんだろうなあ……。

「あ、雪奈、もうすぐ頂上に着くで。バー、上げるな」

また、緊張してきました……。

胸の辺りをぎゅっと掴む。

あー地面が近づいてきたよお。

ふんわりと、腰に何かが当たる。
え？

「すっ、昴さんっ?!」

「オレが雪奈を支えてるさかい、雪奈は何も考えんと、右足を板の上に乗せてスケーティングな。転びそうやって思ったらオレにしがみついたとき? な?」

って、あのっ、それどころじゃないです!

私の右腰に昴さんの右腕が回ってて、左肩には左手が当てられて、ぎゅっ…て、ぎゅってされてる!

これって、どー考えても、抱き寄せられてるよね? ね? ね?
そんな風にされたら、私、身体起こしてられないじゃないですか
ー!

自然と、しがみつくなかないじゃないですかー!!
そんなの、恥ずかしすぎて、無理——ッ!!!
どっとうしよう?

「雪奈、板立てて」

板の裏が雪に覆われた地面に当たる。

うわあああ!

もお着いちゃったの?

待ってっ! 未だ、心の準備がッ!!

「ほら、立つで? セーのっ!」

昴さんの腕に力が込められたのを感じ、思わず目を瞑ってしまう。
そして、思い切って立ち上がった。

昴さんのウェアのしゃりしゃりした感覚が頬に伝わってくる。
ひゃああ……。

顔にふわりとした涼しい風を感じ、止まった。

目を開ける。

無事だ。ってゆーか、私ってば、いつの間にか昴さんのジャケツ
ト、しっかり掴んでるし。

ジャケットをそっと放すと、昴さんが私を立たせてくれた。

「な？ 別にリフトってゆうても、たいしたことなかったやろ？」

イエエ。そんなことは、ナイです。

リフトじゃなくて、別のことに意識を奪われてたのは確かだけど、
とつても、たいしたコト、あります。

うーあー。早く一人で降りられるようにならないと、別の意味で、
心臓が持たない、かも。

「ま、次乗るときには、今よりもっと上手く乗れるはずやし、あ
んまり気にせんとき」

そう言いながら、昴さんは私の頭にぽんぽんと手を置いた。

「ん？ どしたん？」

「昴さん、よく私の頭、叩きますよね？」

なんか、小さい子を相手にしてるみたいな仕草。

昴さんの手、安心するんだけど……私って、そんなに子供っぽい
？ 昴さん、私と同じ年だって言ってたよね？

「あー……そう言えば、そーかもしれないな」昴さんはまた私の頭
をぽんぽんってする。「ちょうどええねん。高さが。なんか、雪奈
見とると、やりたなんねん」

そんな理由？！

「嫌なんやったら、やめるで？」

「そういうわけじゃ、ないんですけど」

ただ。ただね。そうされる度に、なんか、なんだか、ちょっと、
切なくなるの。

「ならええやん。急にそんなこと言いだすさかい、嫌なんかと思った」
昴さんが私の背中を押す。「さ、滑ろおな。まずは板、履かなな」

昴さんが隅に寄ってしゃがむ。そして、自分の隣の雪の上をぽふ
ぽふと叩いた。

「雪奈も、早お。ここ座りいや」

「はっ、ハイ！」

あーもお。もしかして、私、昴さんに振り回されっぱなし？

14 初挑戦のスノーボード (4)

結局、板を履いたのは私だけ。昴さんは両足を固定した私の手を取って、スケーティングで引っ張り始めた。

「あの、どこへ？」

「こっちに、ええコースあんねん。雪奈でも滑れるトコや。心配あらへん」

どっちにしろ、未だ一人じゃ滑れない私は連れて行ってもらえない。大人しく、されるがままにしていた。

——んだけど。

「さ、着いたで」

そう言って昴さんが止まった。コースの入口、下り坂に入るか入らないかって言うところ。

上半身を左右に捻って準備運動する昴さんの向こうに、私は『中級向け』という立て札があるのを見つけてしまった。

——ええっ!?

「あの、ここ、中級者向けって……」

「ん？ ああ」私の視線の先にある立札に、昴さんも気がついた。

「あんなん気にしとったらあかん」

気にします！

昴さんってばスパルタ教育過ぎ！ いきなり中級者向けのコースってどうなの!?

すっごく不安そうな顔をした私を見て、昴さんは苦笑した。

「ホンマやって。このコースはずっとなだらかなんや。中級者向けって書いてあるんは、途中で休憩できるポイントが全然ないってだけやねん。下手に初級者コース行くと、あっちにおる人らみんな初心者やから、ぶつかりそうになってもお互いに避けられるほど上

手はないし、返って危ないねん」

そうは言ってくれるけど、すっごく、不安。

「まあ、ちょっとずつ滑ろ、な？ 初めは立って斜面をズルズル降りるだけやさかい。ゆるーっくり行こ。オレも板履くし、雪奈、ちょお座っててんか」

昴さんはそう言うのと、私の手を取ったまま私を座らせた。そして、その隣に自分も座ると、手早く左足をボードに固定する。

あつという間に終わらせると、斜面にひよいと立ち上がった。

「雪奈も立てるか？」

えっと、どうだろう……。平らなところとは違うから、ちょっと難しい、かも。

両足に力を入れようとすると、案の定、板がずるりと滑った。どうやったら上手く立てるの？

周りをちよつと見回す。少し離れたところに、同じように立ち上がろうとしてる人がいた。そつとその人を観察する。

あ、動きとしては、平らなところで立つのと一緒にだ。でも、あの人が、板が全然動かない。どうやってるのかなあ？

また別の人を観察してみる。その人も、難なくヒョイと立つと、颯爽と滑り去って行った。

あ、そうか。ボードは斜面の下に向かって滑るんだ。だから、斜面に対して垂直に板を置けば……

私はボードで何度か足下を削り、雪の堰を作るとその上に斜面と垂直になるように板を置いた。後は、平らな所と同じ要領で……。

「よっ……と」

ようやく、斜面に立ちあがった。

正面を見ると、いつの間に移動したのか、昴さんがいた。すごく驚いた顔をして。その右手が僅かに私の方へ向かって上がっている。もしかして、引っ張り上げようとしてくれてた……？

「あ、あの、ごめんなさい」

なんだか申し訳なくなつて、とりあえず謝る。昴さんはハッと表

情を変えて、笑い出した。

「なんやの、雪奈。すごいやん。何も教えとらんのに、イキナリ斜面で立ちよるとは思わへんかったわ。オレ要らんやん」

「そ、そんなことないです」

「そおか？」

昴さんが悪戯っぽく聞いてくる。私は一生懸命頷いた。

だって、これからどうしたらいいのか、さっぱりわかんないですもん。もし今置いて行かれたりしたら、私ホントに、泣いちゃいそう。

でも、昴さんはやっぱり笑ってて。

「なんかオレ、すごい楽しなってきたわ。雪奈、今日一日でどれくらい滑れるようになるんやろか」

昴さんはそう言うと、勢いよく身体を振って反転した。私と同じ方向——斜面の下の方が正面になるように立つ。そして、私を振り返った。

「雪奈、オレが今から滑るんとおんなじようにして、ついて来てんか」

「は、はい」

私が頷くと、昴さんはにっこり笑った。

昴さんが前を向く。そしてそのままずりずりと斜面を降り始めた。板を斜面に垂直にしたまま、ずるずるとずり落ちて行くような感じ。スピードも全然出てない。

あれなら、私にもできそう。

私はきゅっと唇を一文字にして決心を固めると、昴さんの後を追って、斜面をずり落ち始めた。

数メートル先で、昴さんが止まっている。いつの間にかまた反転して、身体ごと私の方へ向いている。

「そおそお。上手いやん」

昴さんまでもう少し。あとちょっとで手が届きそう。

と思ったら、昴さんは私の方を向いたまま、後ろの方へとさらに

斜面をずり落ち始めた。

ええーっ！？ 昴さん、ずるい！

離れて行った昴さんは、私とある程度の距離を取ると手を振った。私の負けん気が働く。

私はその後を追った。

ずずず……ずずず……ずず……

うう、なんだかカッコ悪いなあ。

もうちょっと、カッコよく滑れるようになるといいんだけど。

私の後ろから、たくさんの人たちが滑り降りて来ては追い抜いて行く。でもみんなすっごく上手くて、私を綺麗に避けてくれた。

昴さんが言ったのって、このことだったんだ。

しばらくずり落ちていると、だんだんコツがつかめて来た。余分な力が抜けてくる。

あ、そうか。膝を使えばいいんだ。膝を屈伸するとスピードが変わる。重心を落とすと安定するみたい。左右の脚にかける体重のバランスを変えると、ちよつとずつだけ体重をかけた方に移動しながらずり落ちていく。

うんうん、なるほどなるほど。

昴さんは、十メートルほど下のコースの隅の方で立っている。私は昴さんのいる方へと体重を左右の足にかけながら滑り降りて行った。

ようやく、昴さんに追いついた。昴さんは何故かすっごく嬉しそうな顔をしている。

「雪奈、よおがんばったな。ほんなら、次は逆やってみよか」

私は昴さんに言われるまま、その場にしゃがむと雪の上を横に転がるようにして身体を反転させた。

そのまま立ち上がろうとしたら、ボードが雪に取られた。身体がぐくんと落ちる。

「きゃ……」

「あかん！」

ざざあああっ!!

閉じていた目を開けると、目の前にあったのは、一面の白。私は斜面にうつ伏せになって倒れていた。

冷たい……。でも、思ったよりも痛くなかった。雪、だからかな。私は起き上がろうとして、頭の上の方に投げ出していた腕を動かそうとした。そこで、腕に妙な抵抗があるのに気づいた。

見ると、私の腕を昴さんが掴んでいた。雪の上に座り込むようにして。

昴さんのボードの下には、大きな雪の堰ができている。相当力を入れてブレーキをかけてくれたみたい。

「あ、あの、ごめんなさい……」

私が言うと、昴さんは上体を起こして私を覗き込んだ。そのまま私の両腕を取って引っ張り、斜面に座らせる。

昴さんは私のウェアについた雪を手で払いながら聞いてきた。

「雪奈、大丈夫か？」

「平気です」

「怪我は？　してへんか？」

「大丈夫です」

昴さんはホッとしたように大きくため息をついた。

「よかったあ。ホンマ、心臓止まるかと思った……」

15 初挑戦のスノーボード (5)

古人は偉大だ。

油断大敵。本当にその通り。

ちよつと斜面を進めるようになって油断してたから、盛大に転んじやっただろうなあ。

反省しなきゃね、雪奈。

昴さんにも、ものすごく心配されちゃったし。今でさえ迷惑かけっぱなしなのに、これ以上迷惑かけたら、嫌われちゃうよ。

私はボードに右足を固定すると立ち上がった。

昴さんはとくにボードを履き終えていて、数メートル程下まで滑って私が追いかけて行くのを待っている。

今は、今日三回目のリフトを降りたところだ。

さつき結構派手に転んだことで、逆に転ぶことへの恐怖心がなくなった、かな。何事も、失敗しないと覚えないうんだって、改めて身を以って理解した気がする。

リフトは相変わらず怖くって、未だ昴さんの助けがないと上手く降りられないんだけど。でも、別の意味でドキドキするから、本当に、早く慣れなきゃって思う。

「雪奈ー、はよお！」

昴さんが両手をメガホンみたいにして私に向かって叫んだ。

「今行きますー！」

私は手を振ってそれに応えて、左足を前にし、斜面に対してボードが斜めになるようにすると、左足に体重をかけた。

重力に従って、ボードがスーッと斜面をほとんど真横に滑る。まずは左方向へ。

そのまま勢いを失って止まりかけたとき、今度は右足に体重をかける。斜面の下の方を向いたまま、今度は右横の方へとボードが滑り始めた。ある程度行ってまた止まりかけたら、今度はまた左足……。

ボードのエッジの描く軌跡が、左右にギザギザとした線になる。

これが昴さんが言っていた『コノハ』って言う滑り方らしい。木の葉が左右に揺れながらひらひら落ちる感じに似てるから、この名前なんだって。

さっきのずりずり斜面を滑り落ちて行くのよりもずっと、スノーボードをしてるって気持ちになれる。

ずりずり斜面を滑り落ちるのと同じく、この滑り方にも表と裏があって、それが上手く滑れるようになったらようやく、左右のターン。そこまでできるようになったら、普通のスノーボーダーが滑ってる波々した軌跡のスラロームって滑り方ができるようになるんだって。

私はようやく、コノハの表ができるようになったところ。

昴さんが待っていてくれたところに追いつくと、昴さんはにっこり笑って、私の頭をぽふぽふと叩いた。

「雪奈、ホンマに上達早いな。教えがいあるわー」

「そう、ですか？」

結構体力消耗してるなあ。普段、運動なんてほとんどしないから身体動かすのなんて、通学のときの自転車くらいなもの。きっと明日は筋肉痛だろうなあ。

「そおやって。ホレ、あっち見てみ？」

私は昴さんの指さした方向を見た。

ちよつとした谷を隔てて五十メートル程離れたところに、初心者向けらしきコースが見える。そこにはボードを付けたまま上手に立てずにすぐに転んでる人や子供たちが大勢いた。

「な？」

確かに、すぐに立てるようになったし、あの人たちよりは上手、

かも。

でも、それはきつと、私の上達が早いからじゃなくて。

「先生がいいからですよ、きつと」

「ああ確かに、それもあるやろなあ」

昴さんが納得したように腕を組んでうんうんと頷く。私は堪え切れなくなつてクスクスと笑つてしまった。

「なんやの、雪奈が言い出したんやん」

「そうですけど……昴さんってば、すぐく納得するから」

「ええねん。褒められたときは素直に受け取っとけば。」

せやけど、ホンマに雪奈、オレの予想以上や。まさか今日、お昼食べる前にコノハが滑れるようになるとは思わへんかった」

「でも、まだ表だけですし」

「大丈夫、雪奈やったら、すぐに裏もできるようになるわ。表コノハかて、さっき始めたばかりやのに、もう滑れるんやから。」

じゃあ、今から裏コノハで下まで降りて、もう一回リフト乗ったら、頂上でメシ喰お。もお二時や。腹減ったわー」

「えっ?!」

昴さんに言われて初めて、まだお昼ごはんすら食べていないことに気がついた。

私、そんなに熱中してやってたの?!

「あ、ごめんなさい……」

「え?　なんで雪奈が謝るん?」

「時間、全然気付かなくって」

「時間わからんようなるくらい一生懸命やってたってことやろ?」

オレも嬉しいわ。面白いやろ、ボード」

うん、面白い。

私は頷いた。昴さんが満足そうににっこりと微笑んだ。

「ほな、行こか。今度は雪奈が先な。後から追いかけるさかい、好きなトコまで行って止まっというてんか。一気に下まで降りれるんやったらそれでもええし」

いや、それは無理です。だってまだ、コースの半分も滑ってないもの。

私は裏コノハに切り替えるため、一度雪の上に座って身体を反転させると立ち上がった。

「じゃあ、先に行きますね」

そう言っただけで私は裏コノハで滑り始めた。

右……左……右……左……

単調だけど、すごく楽しい。冷たいはずの風も、全然そう思わない。

滑っている内に、コノハのコツもつかめて来た。

まず、進行方向を向く。目線が落ちないように、遠くを見る。裏コノハの場合は足首と膝をちゃんと使って、エッジを立てる。

初めはほとんど真横に進んでは切り返していたけど、だんだんと角度をつけて斜面を下れるようになって来た、かな。未だスピードが出過ぎると怖いけど。

しばらくそのまま滑って、コースが大きくカーブする少し手前で私は止まった。斜面の方を向いたまま、膝を雪に着く。

昴さん、どこかなあ？

斜面の上を見上げて、昴さんを探す。でも、みんなスノーウェアを着て、帽子を被って、しかもゴーグルしてるから、誰が誰かわからないなあ。

昴さんのウェアってどんなのだった？ えっと、確か、グレーと赤だったよね。

——あ、あれかな？

コースの中央を滑り降りてくる、スノーボーダー。ウェアの色が昴さんと同じ。すごく綺麗なフォームで、コースのこぶの間を細かいターンで抜けながら滑り降りて来る。

そのボーダーさんがエッジを立てるたびに、粉雪が舞う……。え？

ボードがこぶに乗り上げた。今までの勢いで身体が宙に浮く。そ

の人はそのまま空中でしゃがむように膝を抱え、また雪に着地する前に膝を伸ばす。そのまま大きく急ターンして私の方へと進行方向を曲げると、真っ直ぐ進んできた。

あのボーダーさん、やっぱり、昴さんだ。すごく、上手い。

本当はあんなに滑れるのに、きつと滑りたいんだろうに、今日は私に付き合って我慢してくれてるんだ……。

昴さんは私の目の前まで来ると身体を捻り、ブレーキをかけた。

ざざああっ……

大きく雪が舞い、私の身体にかかる。

私は首を振って顔や髪に着いた雪を払い落すと、大笑いしている昴さんを見上げた。

「あははは、すまん」

「もお！ 悪戯しないでくださいよっ！」

16 四人組との出会い (1)

「――あ、雪奈。どお？ 元気でやってる？」

「うん、元気だよ」

夜、典子ちゃんからケータイに電話がかかってきた。

夕食の後片付けも終えて、お風呂にも入って、歯も磨いて、ちょっとみんなで雑談して、後は寝るだけ。ボードで疲れた身体を布団に横たえた状態で話す。

「そ？ 泣いてない？ バイト先の方々に迷惑かけてない？」

「だあいじょうぶだってば」

私は苦笑しつつ答えた。

典子ちゃんは、ときどきお母さんみたいだ。どんなときでも、何をやるにも、いつも一番最後になる私を忘れずに待っていてくれる。今日の電話も、きつと私のことを心配してかけてきてくれるんだ。

「そっちは寒いでしょ？」

「うん。でも、雪がすごく綺麗なの」

「へえ……いいなあ。私も今度、彼氏にボード連れて行ってもらおうと」

「あ、そうだ。あのね、私も今日、ボードやってみたよ」

私がそう言うと、典子ちゃんはすごく大きな驚きの声を上げた。耳がキーンってなる。

「ウツソ、雪奈が?! できたの？」

「うん……まあまあ、かな。コノハって言うのができるようになった」

「本当？ すごいじゃん」

「でもたくさん転んで、アオアザいっぱい」

お風呂に入ったとき、鏡見て驚いたもん。膝とか、腕とか、アオ

アザって言うよりなんかグロテスクな紫色になった。

「それでもすごいよ。雪奈のことだから、ボード履いて立つのがやつとかと思ったのに」

「先生が、よかったから……かな」

昂さんが、丁寧に教えてくれたから。だからきつと、今日が初めてのボードだったのに、一日でコノハまで滑れるようになったんだと思う。

「――先生？」

訝しげな典子ちゃんの声が聞こえた。

「うん。えっと、ペンションのオーナーさんの甥っ子さん。同じ歳の」

「ふーん……」

典子ちゃんはその言っただけで、なんか、納得してないみたい。別に嘘は言ってないんだけどな。

なんだかケータイの電波を通して私のことを探られてるような気がして、なんだかすごく恥ずかしくなってくる。

典子ちゃんお願い、何か話して。

私の願いが届いたのか、典子ちゃんの声が聞こえてきた。

「雪奈、あのね……」

「ん？ 何？」

「……いいや、やっぱやめとく」

「そうなの？」

「うん。あ、もうこんな時間じゃない。明日の朝、早いんでしょ？ そろそろ切るね」

典子ちゃんに言われて時計を見たら、いつの間にかビックリする時間になった。今からすぐ寝ても、六時間くらいしか眠れないなあ。疲れてるから、八時間くらい眠りたいけど。

「うん。典子ちゃん、電話ありがとう」

「また電話するよ。じゃあね、おやすみ」

「おやすみ」

ケータイを閉じて枕元に置くと、私は目を閉じた。

* * *

ケータイにセットしていた目覚ましアラームが鳴り始めた。

私はそれを止めようと腕を伸ばした。その途端、痺れるような違和感が腕を走る。

うう、痛い……。

我慢して、とりあえずアラームを止めた。

二の腕を擦りながら寝返りをうとうとしたら、身体中が筋肉痛になっっているのがわかった。脚も腹筋も痛い。

やっぱりなっちゃった、筋肉痛……。なるよね、そりゃ。普段全然運動してないんだもん。でも、一日で来たんだからヨシとしておこう。

ぎしぎし言う身体を叱咤して、私はなんとか布団から這い出した。屋内は暖房施設が完備されてるから、部屋の中はむしろ大学の下宿先よりも暖かい。

頭がぼーっとする。私、低血圧だから、朝、弱いんだよね。

眠い目を擦り擦り顔を上げると、側に置いている姿見に、大きめの薄い桃色のパジャマを着た自分が映っているのが見えた。寝起きていうのもあって、なんだかすごく情けない感じだ。

あ、寝癖が出てる……。

さすがにそんな状態でみんなの前に顔を出すわけに行かないから、私はとりあえず、顔を洗いに洗面所に行くことにした。ついでに、寝癖も直そう。

「よっと」

立ち上がって、部屋のドアに手を掛ける。

欠伸しながら外に出ると、ちょうどタイミングよく、隣の部屋の

ドアも開いた。

出てきた昴さんと目が合う。私は慌てて欠伸の口を閉じた。見られちゃった、かも。

「ああ、雪奈。おはようさん」

昴さんが言った。

「お、おはようございます……」

私が俯き加減で言うと、昴さんはくすりと笑った。

「昨日がんばったし、未だ身体が疲れとるんやな。欠伸も出るはずや」

ああ、やっぱり、見られちゃってたんだ。恥ずかしいなあ。昴さんの方、向けないよ。

待ってたら、先に行ってくれるかな。

私は俯いて昴さんのつま先を見つつそのままちよつと待ってみたけど、昴さんは全然動かない。不思議に思っ様子を見ようとしたとき、昴さんの手が私の頭にぽんと乗った。今度はそのせいで、前を向けなくなる。

「あの、昴さん……？」

ちよつと困って私が声をかけると、昴さんが言った。

「雪奈、その格好のまんま、あんま部屋の外に出えへん方がええよ」
頭の上から、昴さんの手が離れた。重さがなくなつて、ようやく前を向けるようになる。

昴さんを見ると、悪戯っぽく笑っていた。

「ま、オレとしては、パジャマ姿の色っぽいネエちゃんやったら、いつでも何人でも大歓迎やけどな♪」

そう言われて初めて、自分の状態を意識する。

私、パジャマ一枚だ。パーカーも着てない。それに、寝起きだし、寝癖も立ってるし。

嘘——っ!?

は、恥ずかしすぎる……っ。

「あはははは、雪奈、また顔が、真っ赤っ赤あや。そのまんまやと

冷えるさかい、風邪引かんようにしいや」

昴さんはそのまま、手をひらひらと振って廊下の向こうへと歩いて行く。

私は、その後姿を複雑な思いで眺めていた。

17 四人組との出会い (2)

今日から、ペンションのお仕事が一気に忙しくなる。今日はチェックアウトのお客様が一组、入れ替わりで新しいお客様が二組六名いらっしやる。そして、明後日からは予約で満室だ。

私は身支度を終えると、厨房へ向かった。お客様への朝ごはんを作るマスターと浩美さんのお手伝いをするためだ。野菜を切ったり、卵を焼いたり、食器を並べたり。

いつもはすごく楽しい作業だけど、今日は腕と脚が痛くって何かと苦労する。

それでも、そんなこと微塵も顔に出さないように気を付けなきゃね。身体が痛いのは自分の運動不足のせいだもん。しかもっ面のスタッフじゃあ、お客様だけじゃなくて、マスターや浩美さんにまで嫌な思いさせちゃう。

笑顔でいるって、バイトする前に誓約も立てたし。

お客様の朝ご飯が終わって、後片付けをして、そうしたらようやく私と昴さんの朝ご飯。

マスターと浩美さんはいつも、お客様の食事を準備する前に食べ終えているから、二人っきりで隣同士に座っての食事だ。

でも、気まずさとかは全くなって、たいていは昴さんがずっと話してくれてる。

「そう言えば、雪奈、身体は痛うないか？」

「痛いです……」

私は苦笑しつつ答えた。なんだか、朝起きたばかりのときよりも、今の方が痛みが大きくなってる気がする。気のせいであって欲しいなあ。

「今日の仕事、あんまり無理したらアカンよ。重いもん持つときは、必ずオレ呼びや」

「ありがとうございます」

それにしても、昴さんってすごくよく食べる。私の三倍くらい食べてる。だから体力あるのかなあ。

そうじゃなきゃ、あんな上手に滑れないよね。

私の視線に気づいたのか、昴さんはパンを銜えたまま「ん？」という視線を投げかけて来た。

「雪奈、どしたん？」

「あ、えっと。あの、よく食べるなって思っ」

「そおか？　こんくらい普通やろ。雪奈が食わなさ過ぎやねん。せやから、そんな細っこいんや」

そう言っ、昴さんはおもむろに私の腕を取った。もちろん、私は昴さんの方へ引っ張られることになる。

「ほれ、やっぱり細すぎ。骨と皮しかないみたいやん」

私の肘の下あたりをガツチリと掴んだまま、昴さんは私を覗き見た。私の身体が知らず強張る。

あっあの、近いです、顔……。

もうちょっと距離がないと、なんかドキドキして、だめなんです。でも昴さんは離してくれなくて。私は、ちょっと困った顔で、無言のまま、昴さんを見つめ返した。

「――ま、そう言うても、いきなりは食われへんもんなんやろなあ」
昴さんが、ふう、とため息をつき、腕を放した。そして、上に大きく伸びをする。

「あー食った食った。ほな、オレ仕事行くわ。さっき、大介兄ちゃんが外で何かやっててん。それ手伝うてくるわ。雪奈は浩美さんの方お願いな」

昴さんは椅子から立ち上がると、食器を流し台に置き、ダイニングを出て行った。

私は、自分と昴さんの朝食分の食器を洗ってから、浩美さんを探

しにお洗濯の部屋へと向かう。この時間はいつもそこにいるはず。浩美さんを手伝いつつ、出掛けられたりチェックアウトされたりしたお客様の客室に行き、空気を入れ替え、掃除し、シーツを取り替える。これがなかなか重労働。満身創痍の今の身体には少し堪えた。

それが終わったら、共用スペースのお掃除。ラウンジとか、エントランスとか。

マスターはこのペンションはあまり大きくないよって言ってたけど、私にとっては十分過ぎるくらいに大きい。

ラウンジの鐘時計が鳴った。

いつの間にか十一時。もうちょっとで、午前中のお仕事が終わる。あとは玄関の掃き掃除だけ。

私は箒を手に取り、玄関に降りた。

そのとき、ペンションの扉が開いた。外から見たことのない二人の男性が入って来る。誰、かな。

「すみません、今日からここに予約している河合と申しますが……」
先に入って来た男の人が私に向かって言った。

育ちのよさそうな、物腰の柔らかい人だ。未だ若そうだけど、すごく落ち着いてて、大人の男の人って雰囲気がある。優しいような笑顔が、安心させてくれた。

その後ろにいるのは、河合と名乗った人よりも背の高い男の人。ペンションの中を物珍しそうに見回している。ちょっとワイルドな感じで、昴さんとは質の違うヤンチャさを感じた。恵美ちゃんや朋子ちゃんがいたら、さぞうるさくはしゃぐんだろうなあ。

「河合様、ですか？」

私はそう答えながら、昨夜確認しておいた宿泊予定者の名前を思い出す。

確か、今日から三泊四日で宿泊することになっている四名様の、

代表者さんのお名前が『河合』だった。きっとこの方がその、『河合』さんなんだ。

「ようこそおいでくださいました」

私はそう言って礼をする。

河合さんは会釈を返してくれた後、私に尋ねてきた。

「チェックインは十五時以降でしたよね？ すみませんが、荷物だけ預かっていただけませんか？ それと、できれば着替えもしたいんですが」

えっと、荷物を預かるのはできるけど、着替えとなると……私が勝手に決められないことなただけだな。

うーん、どうしよう？

「雪奈ちゃん、どこだい？」

ちょうどタイミングよく、廊下の奥の方からマスターの声が聞こえて来た。

私は窺うようにして、河合さんともう一人の男の人の方を見た。二人とも、目が「どうぞ」って言うてくれてる。それを確認すると、私はマスターの声がした方に向かって声をかけた。

「あっ、あのっ、マスター！ 私、ここです」

「なんだ、そっちな」

マスターがそう言いながら、パタパタと玄関の方へ歩んできて、私の目の前に立つ二人に目を止めた。

「おや、お客様？」

「あの、マスター。今日から宿泊されるご予約の河合様です。お荷物預かりと着替えをされたいということなんですけど」

私が言うと、河合さんはマスターに向かってにこやかに軽く頭を下げた。

マスターが私の隣まで来て、小声で尋ねて来た。

「雪奈ちゃん、今日からのお客様のお部屋ってもう準備終わってたよね？」

「ええ」

「じゃあ、もうチェックインしてもらっていいよ。僕は荷物持ちに
昂を連れて来るから」

マスターはそう言うと、二人の方を向き直った。

「ようこそおいでくださいました。もうお部屋をご用意できますの
で、どうぞチェックインなさってください。お着替えもお部屋でど
うぞ。チェックインの手続きは、この子が行いますので」

マスターに言われて私は急いでカウンターに入った。宿泊者の管
理帳簿を出す。

河合さんがカウンター越しに寄って来た。

「どうもありがとう」

笑顔でそう言った河合さんに、私の心臓が、とくん、と鳴った。

18 四人組との出会い (3)

私はマスターが昴さん呼びに行っている間に、河合さんにチェックイン用の書類を書いていただくことにした。

河合さんにボールペンを手渡ししながら書類を見せ、どこに何を記入して欲しいかを簡単に説明する。そんな私たちを見て、もう一人の男の人が外に出て行った。

「あ、あの……」

私が引きとめようとしたら、河合さんが顔を上げた。ふんわりと笑う。

「浅倉なら、放っておいて大丈夫だよ。きっと、車で待ってる二人を呼びに行ったただだから」

すぐ目の前で、本当に優しいような笑顔を見せる河合さんに、私は思わず見惚れた。

——って、私、何考えてるの?! 今、仕事なのに。

「ここに、全員の名前を書けばいいんだね?」

河合さんはそう言って、明らかに変なはずの私を気にする様子もなく、書類を記入し書き始めた。

……こんな笑顔の男の人、初めて、かも。マスターとも、昴さんとも違う。もちろん、二人ともとっても優しい人なだけど。大人の余裕って言うのかな? あ、でもマスターも大人の男の人だね。

「へー、ここ?」

「かわいいー」

女性の声と共に、またペンションの扉が開いた。

「お前ら、そんなトコで止まんな。さみい。早く入れって」

入って来たのは、髪が長くて背の高い女の人と、可愛い女の人。それと、さっき河合さんが『浅倉』って呼んだ男の人。その両

手には荷物を持っている。

「何よ、浅倉。随分眠そうね」

背の高い女の人が、浅倉さんに声をかけた。

「うるせーな。誰かさんがすぐ隣でグーグー鼾掻いてたせいで、うるさくて眠れなかったんだよ」

「嘘?!」

「もー、浅倉君ってば。冗談でも女の子にそんなこと言っちゃダメよー。香蓮、大丈夫。鼾なんて掻いてないから」

河合さんの後ろでは楽しげな会話が繰り広げられている。

さり気なく河合さんの記入する書類を覗き見ると、想像通りの綺麗な字が並んでいた。既に宿泊する四名全員分の氏名は既に書き終えて、今は住所を書いている。

私は書かれている名前とさっきの会話を頼りに、誰が誰なのかを当て嵌めてみた。

書類を書いてくださっているのが河合正紀さん、眠そうだと言われていたのが浅倉大地さん、そして、背の高い女性が永野香蓮さん、可愛い方は武田真由子さんっていう名前らしい。

随分仲良さそうだな……。社会人っぽいけど、どんな関係の人たちなんだろう?　もしかしたら、ダブルデート、かも。

「雪奈、お客さん来たんやって?」

河合さんがチェックインの手続きを終える頃、昴さんの声が近づいてきた。

「あ、はい。お部屋にご案内してくれてマスターが……」

昴さんに答えつつ振り返る。昴さんはお客様方に会釈して言った。「荷物はオレが運びますさかいそこに置いといてくれてええんで、先に、この子に部屋まで案内してもらってください」

「そんじゃ頼もうかな。でも、全部は大変だろ。オレと正紀は自分で運ぶからいいや。こいつらの分だけ頼むわ」

浅倉さんがそう言いながら、永野さんと武田さんの方を示した。

「そうですか？ ほな、女性の分だけですね？」

昴さんが永野さんと武田さんの側に行く。

「これでいいかな？」

目の前で声がした。河合さんが、ボールペンと書類を私の方にすつと差し出してくれている。その笑顔がなんか素敵で、私は河合さんが書類を書き終えたんだって気付くのには、数秒かかってしまった。いけない。私、また、ばおっとしてた。

「あ、ありがとうございます」

私はそれを受け取り、カウンターの影にあるキーボックスから部屋の鍵を二つ取り出す。

顔を上げると、浅倉さんと河合さん、それと昴さんが、荷物からボードやブーツをより分けてホールの隅の方に固めて置いていた。

「じゃあ、お部屋はこちらですので」

私がそう声をかけると、男性陣は荷物を持って、女性陣はそのまま、こちらを向く。私はそれを確認してから客室に向かって歩き始めた。そのすぐ後ろにお客様四名、しんがりに、荷物を一つだけ持った昴さんが続く。

廊下は広くないから二人が横に並ぶといっぱいだ。先頭を歩く私の後ろから、河合さんと武田さん、浅倉さんと永野さんがそれぞれ隣同士に並んで話している声が聞こえてくる。

「ありがと、河合君。結局ずっと運転してもらっちゃって、ごめんね」

「いいえ、どういたしまして。でも、その分僕は、出発前にちゃんと寝かせてもらったからね。みんなみたく残業しなかったから」

「ったくさ、お前もうちょっと行儀よく眠れねえの？」

「大きなお世話よ」

「昨日早く帰れたんだ。そっかあ。じゃあ、未だ体力ある？」

「もちろん。今日もこの後、着替えたらずぐにでも滑りに行こうって思ってるよ」

「お前、寝てる間にござそ動くもんだから、気になって眠れなか

ったじゃねーか。オレ昨日の夜、残業ですげえ遅かったってのに」

「そんなの知らないわよ」

「賛成♪ 私に教えてくれるって言う約束、覚えてる？」

「もちろん」

「ったく、この後滑りに行くつつーのによー……」

「そう言えば、浅倉ってボードやるの？」

そんな仲の良さげな会話を聞いていたら、いつの間にか私まで笑顔になっていた。すごく、賑やかだ。

皆さんの部屋の前に着いた。お隣同士のツインルーム。まったく同じ間取りのお部屋が二つ。

私が部屋の扉を開けると、永野さんと武田さんが歓声を上げながら入って行った。少し遅れて、河合さんと浅倉さん。

昂さんが、部屋の入り口近くに、持ってきて来ていた荷物を置いた。

「じゃあ、オレ、もう一つの荷物を持って来ますんで」

昂さんはそう言い残して、小走りで廊下を駆けて行った。

私はとりあえず今開けた方の客室に入らせていただいて、簡単に部屋の設備の使い方とお風呂やお食事のことを説明する。

「もう一部屋は、お隣のお部屋を取っておりますので」

そう言って私が部屋を出たら、後から河合さんと浅倉さんがついて来た。

——あれ？

少し不思議に思いながらも一つの部屋を開けると、やっぱり河合さんと浅倉さんが入って行く。

女性のお部屋と男性のお部屋になるの、かな？ ダブルカップルなのかなって思ってたけど、違ったのかな。

「あの、鍵を……」

私が部屋の鍵を渡そうとしたら、二人が同時に振り返った。

大人の男の人二人に注目されて、私の身体が急に緊張し始める。

「ああ、忘れてた」

「ごめんね。ありがとう」

手前にいた河合さんが苦笑しながら言い、私に手を差し出してくれる。私は中途半端に前に差し出していたルーム・キーを、その大きな手の上に置いた。

間近で見る河合さんは、想像していたよりもすごく遅しくて、なのにそれに不釣り合いなくらいに、優しく微笑んでくれている。

そのとき、階段の方から足音が聞こえて来た。我に返る。

私、また、見惚れてた……かも。

なんか、私、変だ。

なんだか、すごくいけないことをしてしまったような気がして来て、私は恥ずかしくなった。

うう、なんか頬が熱い、かも。気のせいでもありますように。

19 四人組との出会い (4)

焦りを誤魔化したくて、足音の聞こえた方を向いた。階段の奥から、昴さんがやって来るのが見えた。

「雪奈、施設案内終わった？」

「え？ あ、はい。——えっと、お疲れ様です」

「疲れてへんよ。こんなんどってことないわ」

昴さんはそのまま私の目の前——つまり、河合さんと浅倉さんの部屋の前までやって来た。その表情が、僅かに曇る。

「雪奈、どしたん？ 顔赤いで？」

ウソっ？！

両手を頬に当てる。やっぱり、熱い？ え、わかつちゃう？

「風邪ひいたんか？」

昴さんが小声で私に聞いてくれる。私は小さく首を横に振った。

「ほんならええけど……気いつけや？」

昴さんは私にちよっと笑い掛けてくれた。そして、持って来た荷物をまた部屋の入口に置く。

「荷物、ここに置いときますさかい」

「ありがとう」

河合さんがお礼を言った。

顔を上げて河合さんたちの方を向いた昴さんが、不思議そうな表情になる。

「あれ？ 男部屋と女部屋なんですか？ オレ、カップルで部屋割りするんやと思うとった」

「は？」

「ぷっ……あはははは」

「ち、ちよっ……！」

私は思わず昴さんの腕を掴んだ。

そーいうことは、思ったとしても、口に出しちゃダメですよっ!!
昴さんは別段悪びれている様子もない。それどころか、私に「なあ、雪奈もそう思わへんかった?」なんて小声で聞いてくるから、もお、私は焦ってしまった。

ますます、頬が熱くなる。

私は恐る恐る二人の方を見た。でも、私の心配を余所に、河合さんは愉快そうに笑っているし、浅倉さんは啞然とした状態で固まっている。

「――だってさ」

ようやく息が整って、普通に話せるようになった河合さんが、浅倉さんにそう言うのと、浅倉さんは不機嫌そうに河合さんを睨んだ。

「なんでオレに話振るんだよ、正紀」

「いや、なんとなく?」河合さんは意味ありげに言って、私たちの方を見た。「残念ながら、僕たちはただの会社の同僚。僕たち四人の間では、カップルはいないよ。今のところは。――だよ、浅倉?」

「いちいちオレに確認すんなっての」

浅倉さんは、なんか不貞腐れてるのか照れているのかわからない表情でそっぽを向いてしまった。

きっと、何か事情があるんだろうなあ。

「なんや、そうやったんですか」

昴さんはそう言って少し嘆息した。そしてすぐに、表情が明るく切り替わる。

「どないします?　すぐ滑りに行かはるんですか?」

「正紀、どーする?」

浅倉さんがまた河合さんの方を向いて話しかけた。

「そうだね、武田さんや永野さんにも聞いてみないとね。ここから一番近いグレンデってどう行けばいいのかな?」

「それやったら、ペンション出て、東に五分くらい歩いたトコです。」

コースもぎょうさんありますさかい」

「マジで？ 近ッ！」

と言ったのは浅倉さん。その声が、すごく嬉しそうだった。きっと浅倉さんも昴さんと同じで雪遊びが大好きなんだろうなあ。

「ほんなら、道具はあのまま下に置いときますんで。夕食は六時半でええですか？」

「うん、ありがとう」

「スキー場はナイター設備もあるんで、食べ終わってからでもなんぼでも滑れます。使い終わった道具はドライルームに入れといてください。あ、盗まれんようにだけ気い付けてくださいね」

昴さんはそう言うのと、私にだけわかるように、軽く私の背中を叩いた。

あ、そうだ。案内の最後の言葉、言わなきゃ。

「えっと、それでは、お寛ぎください」

私は未だ少し熱く感じる頬を隠すように失礼しますと礼をして、部屋の扉を閉めた。

「お前、さっきのぜってーワザとだろ？」

完全に扉が閉まる直前、部屋の中から浅倉さんの声が聞こえて来て、私はクスリと笑みを零した。そして昴さんと一緒に階段の方へと向かった。

廊下の突き当たりに階段がある。階段の幅があまり広くないから、一人ずつ歩いた方が安全だ。昴さんが先に階段を降り始めた。私もその後を追うようにして歩きながら言った。

「なんか、素敵な人たちですね」

「せやなあ。……社会人かな？ 若そうやけど。ゲレンデで会うかもしれないへんなあ。ま、どっちにせよ、あの二人よりオレの方がええ男やろ？」

「え？ あ、えっと……」

突然そんなこと聞かれても……。なんて答えればいいのか？

さつき会ったばかりのひとたちなのに、そんなこと考えて見えないよ。確かに、河合さんのことを素敵だなんて思ったけど。

だいたい、昴さんも、河合さんも、浅倉さんも、全然違うタイプの人に見えるんだけどなあ？ それって、比較できないよね？

答えに困る私の目の前で、昴さんが大袈裟に肩を落とした。

「ホンマにもー、雪奈は……。こーゆー時は、ウソでも『そうです』って言うとかもんや」

そういうものなんですか？

でもそれって、なんか少し違いますか？

昴さんが、踊り場で立ち止まって振り返った。いつもの明るい笑顔で私を見上げる。

「そーや、雪奈。今朝の仕事、もお終わった？」

「あ、あと、玄関掃除だけ……」

「ホンマ？ それやったら、それ終わったら今日も一緒にボード行かへん？」

行きたいです！ と言いかけて、躊躇した。

すぐく、行きたい。昨日すぐく楽しかったし。だけどきつと、私に付き合ってたなら、昴さんは今日も楽しめないよね。

「えつと……今日は、遠慮しようかなって……」

「え？ なんで？ 昨日、面白うなかった？」

「いいえ！ すぐく面白かったです」

身体中が痛いけど、もっともっと上手に滑れるようになりたいって思うし。

「ほんなら、なんで？ もしかして、脚傷めたんか？」

昴さんが階段を上って来て、私のすぐ目の前——私が立つ段の一段下——に立った。頭の位置がほとんど同じ高さになる。

ち、近いですってば……。

硬直する私とは逆に、昴さんすぐく心配そうに私の顔を覗き込んできた。

「いえ、あの、大丈夫です、けど」

「けど？」

「今日は、一人で滑ろうかな…って…」

窺うように言った私を見て、昴さんは口を一文字に閉じると少し目を細くした。その目が、完全に据わってる。

「……あかん」

「はい？」

「それは許されへん」

「えっ、あの……」

「却下や。雪奈には、まだまだぎょうさん覚えてもらわなあかんことがあんねん。せやから、一人で滑るんは許さへん」

「でも……」

「『でも』も『だって』もない。さっさと掃除終わらし！」

「は、はいっ」

思わず直立して返事した。だって、それくらい迫力があつたんだもの、昴さんの言い方。

途端に昴さんはふっと笑い、私の頭に手を置いた。また、ぽんぽんと叩く。

「ええ返事や」

そう言い残して、昴さんは階段を降りて行った。

20 妹キャラの認定 (1)

玄関掃除の続きをしにホール行くと、マスターが箒を片付けようとしてるところだった。

「あっ、すみません。未だ終わってないんです」

私が駆け寄ると、マスターはにっこり笑った。

「いいよ、俺がやっておいたから」

「ご…ごめんなさい…」

私は頭を下げて謝った。

玄関掃除、私の仕事なのに。マスターにやってもらうことになっちゃうなんて…。

顔を上げると、マスターはちよつと困った顔で微笑んでいた。

「いや、謝られると俺が困るんだけどな。お客様を案内してって頼んだの、俺だし。」

それよりも、他の仕事は終わった？」

「はい」

「今日もボード行くんだろう？」

私は頷く。マスターはまた苦笑し、掃除用具入れを開けて箒をその中に入れた。

「昴が待ってるだろうから、早く行ってやって。アイツがペンションの中にいると、うるさくて叶わない」

口は少し悪いけど、マスターの言い方には不思議と昴さんへの思いやりが込められているように感じた。やっぱり、仲良しなんだな、この二人。

「ありがとうございます」

私はそう言いながら礼をして、部屋に向かった。

＊ ＊ ＊

「雪奈、上手あなったなあ」

真っ白い雪の上。裏コノハで滑り降りた私に、昴さんが言った。

「昴さんが教えてくれたからですよ」

私がゴーグルを上げて答えると、昴さんはニヤリと笑って鼻を擦った。

「せやろ？ 先生がちゃうと、上達も早いねん」

マスターが玄関掃除をしていてくれたおかげで、あれからすぐにスキー場へ繰り出すことができた。

昨日、重いなあって思ってたボードも、歩きにくいなあって思ってたブーツも、今日は全然そんな風に感じないから不思議。

それってきつと、ボードをするのが面白いからだよね？

私と昴さんは、準備運動をして、また一日券を買って、すぐにリフトに乗った。今は、そこから下っている途中の二本目。

滑りながら気がついたんだけど。私、昨日よりも明らかに長い距離を、苦痛なく、むしろ楽しい気持ちで滑れるようになってる……気がする。そんな気がするだけかもしれないけど。

それに、相変わらず、コノハ滑りって言う滑り方しかできないけど。

でも、表コノハも裏コノハも普通に滑れるようになったし、昨日初めて滑ったときにはあんなに怖いと思った中級者コースを、怖いて全然思わなくなった。それって、ちょっとは上手くなったってコトでいい、よね？

うん、本格的にハマりそうです、ボード。
すごく、楽しい。

私自身、こんな風に何かにハマるってことが今まであんまりなか

ったから、なんだか余計に新鮮。

今なら、昴さんがボードにのめり込んだ気持ちがちょっとわかる、かな。

「ほな、続き行こか。今日二本目で未だ身体が温まってへんはずやさかい、無理せえへんようにな」

昴さんが私に言う。私は頷いて、ボードを斜めに構えた。

コノハ滑りの角度も、昨日よりも傾斜をつけられるようになってきてる。

この辺りなら人も少ないし、もうちょっとスピード出しても大丈夫かな？

そう思って、私は今までよりもちょっとだけ角度をつけてボードを傾けた。今度は、表のコノハで。

——顔に当たる風が変わった。今までは頬を撫でるみたいな風だったのが、ちょっとぶつかって来るみたいな感じ。ゴーグルをかけてないと、きつと目を開けてられない。

でも。うわ……気持ちいい。

表コノハで斜面を下りながら真正面を見ると、目の前に広大なパノラマが展開する。それを眺めながら、心地いい風を身体全体で受け止めていると、なんだかそのまま浮いていきそうな、この澄んだ空気に身体が溶けていきそうな、そんな気さえする。

つい一週間前まで、ううん、一昨日まで、こんな世界知らなかったのに。夢みたい。

適度に進んで折り返しのターンをする。

少しずつ、角度が変わっていく景色を見ながら、私は知らず微笑んでいた。

そのまま何度も何度もターンして、ふと気付く。

そう言えば、私、しばらく止まってない。昴さんが追いついて来ないけど、もしかしてはぐれちゃったのかな？ いったん止まって、昴さんを待った方がいいかもしれない。

私はボードの角度を甘くしてスピードを落とした。

「うわっ!？」

——え?!

背後で声がした。振り向く。すぐ目の前に人がいる。

いけないっ、ぶつかっちゃう——!!

私の身体が強張った。ボードが止まる。そのすぐ脇をギリギリのコースで、カーキ色の影が風のようにすり抜けていく。

カーキ色のウェアを着たその人は、私の脇を通り抜けると左手を雪に着いてブレーキをかけた。真っ白い雪煙が舞い上がる。

び…びっくりしたあ…。

脚から力が抜けていき、私はその場に膝を付いた。

「ごめん、大丈夫?」

カーキ色のウェアの人は、そう言いながらスノーボードを金具を片方外す。そして片足で器用に歩いて、私の方へ近づいて来た。声が低い。どうやら、男の人みたい。

「はい、なんとか…。あ、あの、すみません、でした…。」

今のは多分、周りに注意してなかった私が悪いよね。急にブレーキ掛けたりして。

「いや、今のは僕の方が悪いんだよ。滑ってるときは後ろまで見えないからね。驚かせてごめんね」

そう言いながら、カーキ色のウェアの男の人は私の目の前で止まった。

そこまで近づいて気が付いた。この声、それに背格好。この人、もしかして——

「ちよっと、河合君っ!？」

甲高い声とともに、小柄な女性ボーダーが私の隣辺りで止まった。今、『河合』って呼ばれてた。ってことは、この人、やっぱり…。

「今の、ホント危なかったわよ?」

「うん、反省してる」

カーキ色のウェアの人が、女性ボーダーさんに向かって苦笑しつつゴーグルを取った。やっぱり、『河合さん』だ。ってことは、この女性ボーダーさんは、武田さん？

「こんな可愛い子——ってあれ？　あなた、ペンションの……？」

武田さんも私に気づいたらしい。ゴーグルを取って膝をつき、身を乗り出すようにして私を覗き込んでくる。そして、両手を伸ばして私のゴーグルを額に上げた。

え、えっと……。あの……。

「やっぱり！　ね、そうよね？」

重ねて聞かれた私は、小さく「はい」と返事をしつつ頷いた。

「ちよっと武田さん、そんなに覗きこんだら雪奈さんに失礼だよ」

河合さんが私の名前を口にした。

武田さんが、それもそうねと乗り出していた上半身を起こす。

あれ？　河合さん、なんで私の名前知ってるの？　私、名乗ったっけ？

「ああ、勝手に名前で呼んじゃってごめんね。昴君って言ったっけ、あの男の子がそう呼んでいたから」

私が驚いたのがわかったらしく、河合さんは私の名前を知っている理由を説明してくれた。

21 妹キャラの認定 (2)

「今は休憩中なの？」

武田さんが聞いてくる。

「ええ」

「昴君は？」

「多分、もうすぐ来ると思います」

そう答えたとき、私の名前を呼ぶ声が聞こえて来た。

「ゆきなあー！」

ちよっ、昴さん、声大きいです！ みんなに聞こえるじゃないですかつ！？ は、恥ずかしい……。

私は頬が熱くなるのを感じた。河合さんと武田さんが、声を殺しつつも愉快そうに笑っている。

もおー。昴さんのバカっ！

昴さんは河合さんの後ろあたりで止まると、ゴーグルを上げた。

「雪奈？」

私は頬を少し膨らませながら、昴さんを上目遣いで睨んだ。でも昴さんは私の側にいる二人を見ている。

その昴さんの表情が、すぐに笑顔になった。昴さんもすぐに、私と一緒に居るのがさっきのお客さんの『河合さん』と『武田さん』だってことに気がついたみたい。

「ああ、さっきの……。もうゲレンデに来はったんですか？」

「未だ一本目だけだね」

河合さんが昴さんの方を振り返って言った。

「運転で疲れてるんとかやいますのん？」

「ありがとう。大丈夫だよ。出発前にちゃんと寝ておいたから」

「そうなんや。せやけど、気いづけな身体壊しますよ？」

「うん、今日は無理しないようにするよ。それにしても、ペンションからゲレンデまで本当に近いんだね」

昴さんと河合さんが話している。

でも、なんだろう。なんか、昴さんの雰囲気、変……な気がする。考えすぎかな？

そう言えば、河合さんと武田さんしかいないけど、浅倉さんと永野さんはどうしてるんだろう？

私は二人の会話を眺めがら、ぼんやりとそんなことを考えていた。「そうやねん。せやから、雪で遊ぶんにはホンマにめっちゃ便利なんですわ」昴さんが言い、その後小首を傾げた。「そう言えば、あとのお二人はどこにいはるんですか？」

あ、昴さんも私と同じこと思ってたんだ。だから、変な感じがしたの、かな……。でも、違う気がする。なんかしつくり来ない。って私、何考えてるんだろう。まだ昴さんと知り合って数日しか経ってないのに。昴さんのこと、何でも知ってるってわけじゃないんだから。そんな偉そうなこと思っちゃいけないよね。

「あの二人なら、未だ下にいるんじゃない？」

隣から聞こえてきた武田さんの声に私は我に返った。武田さんが続けて言う。

「香蓮、今日が初ボードだって言ってたし」

あ、そうなんだ。永野さんは、今日初めてボードするんだ。昨日の私みたい。

「そうだね。まあ、永野さんならすぐに上達するだろうけどね」

「ああ、言えてる。今日中にスラロームくらいできるようになるかも」

え？ スラロームって、コノハとターンの次に覚えるって昴さんが言ってたやつだよ？

それって、一日でできるようになっちゃうものなの？

頭の上に疑問符を浮かべる私の隣で、武田さんが小さく気合いを入れて立ち上がった。膝を付いたまま私が見上げると、武田さんは

につこりと私に笑いかけてくれて、言った。

「ねえねえ、せっかくだし、一緒に滑らない？　香蓮や浅倉君も、きつとその辺で合流できるだろうし」

「確かに、みんなで滑った方が楽しそうだね」

河合さんも言い、ふんわりとした笑顔になる。本当に優しそうに笑うなあ、この人。

私が見ていると、河合さんはその視線に気付いたのか私の方を向いた。条件反射みたいに、私は慌てて目を逸らして何でもない振りをする。

「ねえ、どお？」

武田さんがそんな私に重ねて尋ねてきた。

私、まだ斜面を下ることしかできないんだけど、そんな実力で他の人と滑ったりしていいのかな？

答えに貧窮した私は、助けを求めるように昴さんの方を見た。昴さんはそんな私を見て苦笑していたけど、私と目が合うと代わりに言ってくれた。

「そやな。大勢の方がきつとおもろいわ。

って言うても、オレたち夕方からまた仕事があるさかい、ちよつと早めに上がらせてもらわなあかんねんけど……」

「あ、そっかあ。じゃあ、それまでは一緒に滑ろ。ね？」

「あ、はい。あの、よろしくお願いします」

私がそう言うと、武田さんは嬉しそうに笑った。

「雪奈さん」呼ばれた方を向くと、河合さんが私の方に手を差し伸べていた。「立てる？」

えっと……。

私はこくと頷いた。それを見たはずなのに、河合さんは笑顔で手を差し出したままだ。なんだか、王子様がお姫様にするみたいな仕草。

掴まれって言うてるの、かな？

私が河合さんの手の上にそっと自分の右手を乗せると、河合さん

は私の手を優しく握った。その直後、吃驚するくらい強い力で、ぐいと引き上げられる。弾みで、私の膝が伸びた。そのまま、私の身体が立ち上がる。

「雪の上に長く座っていると、身体が冷えるから。女の子は身体冷やしちゃだめだよ。気を付けてね」

河合さんはそう言うと言いつつ私の手を放した。

「あ、ありがとうございます……」

「それじゃ、私行くねー!」

武田さんが片手でゴーグルを下ろし、もう一方の手を振りながら滑り降りて行く。その後を追いかけるように、ゴーグルを着けた河合さんが滑り始めた。

滑らかな身体の動き、無駄のないフォーム。ターンの度に白い絹の帯のような雪の尾が後方に靡く。

河合さんの滑りを例えるなら、そう、風みたい。爽やかで暖かい、五月の風。

「きれい……」

私は呟いた。

あんな風に、滑れるようになりたい。まだまだ、何年も先の話になっちゃうだろうけど。

「雪奈?」

昴さんに呼ばれて私は我に返った。

「は、はい??!」

「何か言うた? なんや、さっきからずっと、ぼおつとしとるみたいやし……」

いつの間にか、昴さんはゴーグルを下ろしている。

「あ、えっと、たいしたことじゃないんで」

「そうなん?」

「あの、河合さんの滑りが綺麗だなんて思って」

「……せやなあ」

昴さんは呟くように言って、小さくなっていく河合さんの後ろ姿

を目で追った。何か考えているみたいな表情。どうしたんだろう？
滑りたい、のかな？

「昂さん、行かないんですか？」

「オレ？ オレは最後。雪奈の後からすぐ行くさかい。雪奈、先行
ってんか」

「あ、はい」

私は慌ててゴーグルを下げてボードを構えると、スタートした。

22 妹キャラの認定 (3)

できるだけ急いで、ゲレンデを下る。

それにしても、やっぱり、スラロームで滑ってる人にコノハで追いつこうとすると、本当に大変。私も、スラロームができるようになりたいな。後で昴さんに教えてってお願いしてみようかな。

そのまま滑って行くと、あと二百メートルくらいでゲレンデの一番下に着くってくらいの場合に、武田さんと河合さんが並んで立っているのが見えた。

スピードを落としつつ近づき、最後に膝をぐっと曲げて、二人の少し後ろで止まった。

「あれ？ いないみたい……」

「そうだねえ。この辺にいたと思ったんだけどなあ」

二人の声が聞こえて来る。

いるはずの人がいないみたい。もちろん、浅倉さんと永野さんのことだ。

「あ、来た来た」武田さんが私に気が付いて言った。「お疲れー」

「あれ？ あの二人、いはいりませんのん？」

すぐ後ろから声が聞こえてきて、私の身体がびくって動いた。

振り返ると、私の背中の方に昴さんが来て立っている。い、いつの間に？！

「雪奈、驚き過ぎや」

昴さんは呆れ顔で言い、「ま、そこがええんやけどな」と付け足すとまた私の頭に手をぽんぽんと置いた。

私が昴さんを見上げて抗議の口を開きかけたとき、後ろからくすくすと笑う声が聞こえてくる。

「もー、当てられちゃうわ。仲がいいのね」

武田さんの声に正面の方へと首を戻す。

って、え？ 当てられちゃうって？ 何、どういうこと？

「ねえ、河合君？ そう思わない？」

「そうだね。微笑ましい」

微笑ましいって、私と昴さんのこと？ あ、もしかして、勘違いされてる？

ようやく二人が何を言わんとするのかわかって、焦る。

「え？ あ、ちがつ……」

ちゃんと否定しなきゃって思うのに、うまく言葉にならない。

そんなわけじゃないですか。昴さんみたいに明るくて暖かくて太陽みたいな人が、私みたいな子とだなんて、ありえないですって。

「……ちやいますよ」業を煮やしたのか、昴さんが口を挟んだ。「そんなんじゃないやしません。雪奈はオレにとって妹みたいなもんやさかい」

え？ い、妹？ 昴さんってば、私のこと、そんな風に見てるの？ そんな考えのよぎる私の頭を、昴さんがまたぽんぽんと撫でてくれる。

「そうなの？ えー」

武田さんは未だ何か言いたげだ。河合さんは相変わらずにこにと微笑んでいる。武田さんは、残念そうに私たちを見、次に河合さんを見、少し肩を竦めて苦笑しつつ付け加えた。

「確かに、雪奈ちゃんって妹キャラっぽい……」

武田さんまでっ！？

私はちよっぴり傷ついた、気がした。

「ま、それはそうと」昴さんがこの話題はおしまい、とでも言うように声を出す。「浅倉さんと永野さん、いはりませんねえ」

「そうそう、そうなのよ。おかしいなあ？」

「怪我でもしはったんやろか？」

「永野さんの運動神経なら、それはないと思うけど」

眉根を寄せる武田さんと、微笑みを絶やさない河合さん。そして、そんな二人にもうすっかり溶け込んでしまっている昴さんを、私は感心しつつ眺めた。

すごいなあ、昴さんは。誰とでもすぐに打ち解けて話せちゃうんだもの。羨ましい。私みたいに、上手くしゃべれないなんて悩み、ないんだろなあ。

だいたい、昴さんって何か悩みあるのかなあ？ 大体のことは笑い飛ばしちゃいそうだね。くよくよ考えて、結局行動できない私とは、大違いだ。

そんな私の考えを他所に、みんなは斜面のあちこちを眺める。私もゲレンデの中に二人の影を探した。雪が太陽の光を反射してちょっと眩しい。ゴーグルかけてなかったら、目が痛くなりそう。

ゲレンデにはいろんな人がいて、中には男女のカップルらしき人たちもいるけど、浅倉さんと永野さんらしき人影は、ここから下のどこにも見当たらない。

「ここでちょっと待ったときましょか？ 戻って来はるかもしれへんさかい」

昴さんが言うと、河合さんが首を横に振った。

「いや、滑ろう。ここにいたら周りに迷惑になるしね。僕たちも一周してる内に、きっと会えるよ」

「そうね」

武田さんが同意して立ち上がる。そして、自分の後方の、斜面の上の方を見上げた。その少し乾いた口が小さく開いたまま固まる。

「あれ？ ねえねえ、河合君。あれ、香蓮じゃない？」

武田さんが誰かを指差しながら、河合さんの方を振り返った。

「え、どこ？」

「ほら、あれ。あそこ。白いウェアにグレーのパンツの人」

「え？ ああ、あれ？ あの、スラローム……してる人？」

河合さんが身を屈めて、武田さんの指先を追う。私と昴さんも、武田さんの指し示す方向を見た。

そこには、颯爽と斜面を滑り降りてくる一人のボーダーさんがいた。

武田さんが言ったとおりの、白いジャケットに明るいグレーのパンツ。ウェアの色からして、多分、女性だと思う。なんでなのかわからないけど、一際、目を引く。

とにかく、腰から上がほとんど動かない。斜面に対してほぼ垂直を保っている。なのに腰から下大きく左右に動いていて、まるで腰のラインで身体が二つに分かれているみたいだ。

機械みたいに正確なリズム。軽快なターン。雪飛沫もほとんどあがっていない。

とにかく、すごく、カッコイイ。

「あのメチャメチャかつこええ人ですか？」

「うん」

武田さんが、もう確信を持ってるみたいに頷いた。河合さんは呆れたように小さくため息をついた。

「うーん、確かに、永野さん……だねえ」

私たちがそんなことを話している間に、その女性ボーダーさんは見る見る内に私たちの傍まで来て、目の前で最後に雪煙を舞わせて止まった。

女性ボーダーさんが 구글をおでこに上げる。予想通り、やっぱりそれは永野さんで。

「あれ？ どうしたの二人とも？」

永野さんが武田さんと河合さんに向かって言った。

「やっぱり香蓮だった！」

武田さんが嬉しそうに言った。

その直後、別のボーダーさんが雪飛沫を上げながら永野さんのすぐ後ろに止まる。その男性ボーダーさんは、永野さんと同じように 구글を上げた。もちろん、浅倉さんだ。なんだかその眉根がち

よつと寄ってるけど。

浅倉さんは永野さんを見据えると開口一番、言った。

「お前、ほんっとかわいくねえっ！」

「うるさいなあ。たまたま滑れただけじゃない」

浅倉さんの言葉をまったく気にしていない様子で、永野さんは両手を軽く振った。浅倉さんが面白くなさそうにため息をつく。

「ったく、『たまたま』のレベルじゃねえっての。おい、永野。お前、本当に今日が初ボードか？」

「そうだけど」

ええっ？ あの滑りで、初めてなの！？

「ホンマに！？」

私が驚くのとほぼ同時にそう叫んだのは昴さんだった。

23 妹キャラの認定 (4)

突然聞こえてきた関西弁に驚いたのか、その場にいた全員の視線が、自然と昴さんに集まる。でも、昴さんは全然そんなこと気にしてないみたいだ。

「嘘やん！ ホンマに今日初めてなん？」

そう続けた昴さんを、永野さんが訝しげに覗き込む。その後、その目と口が、真ん丸に開かれた。手をぽんと打ち、次に昴さんを指差す。

「ああ！ あなた、ペンションにいた元気な子？」

一瞬の間。

そして昴さんがぷつと噴き出し爆笑し始めた。隣にいた武田さんも一緒になって笑いだす。

「ちよっ、香蓮、元気な子って……」

「あははっ、あはっ、小学生やん！ あははは」

昴さんのその言葉に、浅倉さんも噴き出した。河合さんは控え目に笑う。私もみんなにつられて笑顔になった。

そんな中、永野さんだけが「私、変なこと言った？」と一人困惑した表情で首を傾げていた。

「それにしても、ホンマにお上手ですねえ。初めてやとはとても思えへん。そんじょそこの経験者よりもずっとかっこええわ」

ひとしきり笑った後、昴さんが言う。浅倉さんも同意するように腕を組みながら頷いた。

「教えろって言われても、オレが教えられることなんて全然ねえよ。多分、その辺の上手い奴らの技見てりゃ、永野なら勝手に覚えるだろう。」

ホントお前、女にしておくのもったいねえよな」

「わかるー。テニスしてるときもいつつも思うけど、香蓮って本当にカッコイイよね。もし香蓮が男だったら、私、今の彼と別れて香蓮にアタックしてたと思うもん」

武田さんが言うのと、河合さんが苦笑した。

「それは穏やかじゃないね」

「確かに」

永野さんも笑った。そして、膝を曲げ、えいっと片足を上げて、下ろしている脚を軸にその場で百八十度回転する。

何でもない風にやってみせたけど、私には未だできない技だ。多分、それなりに難しい技だろうっていうのは私でもわかる。みんなも驚いてるもの。だけど永野さんはそんなことには全く気づかなかったみたいで、歯を見せて笑いながら言った。

「昔スケードボードでよく遊んでたんだけど、よく似てるね」

「ああ、それでか」

浅倉さんが合点がいった、とばかりに頷く。そして腕を解くと右腕で永野さんの足下を指した。さっき回転するときに、軸足にした方の脚だ。

「お前たまに後ろ足に体重かけてるだろ？ スノーボードは常に前足に体重かける。後ろ足は基本的に舵取りだけ。技使うときは別だけどな。後ろ足に体重かけると、ボードが反れてスピードが出ちゃうんだ。ま、お前ならそれでも制御できるんだろうけど」

永野さんが途端に真剣な表情になる。自分の左右の足下を見ながら、片足を上げたり下げたりし、次に左右それぞれの脚に体重を移動させながらその感触を確認した。そして何かに納得したように頷き、笑顔をこぼす。

「ああ、なるほどねー。そっかあ。そこはスケードボードじゃなくて、スキーと同じなわけね」

「そうなのか？ オレはスキーやったことないからわかんねえけど」
「うん。スキーもね、前に体重かけるんだ。ありがと、やってみる。」

よし、じゃあ先にリフト行くよ？」

永野さんは楽しくてたまらないみたいだ。ボードを傾けると私たちの間を縫うように抜け、あっと言う間に斜面を滑り降りていく。あれ？ でも、あれじゃあ、ボードの向きが反対じゃないかな。永野さんはレギュラーのはずなのに、グーフィーみたいに右足が前になってる。

私がそう思ったとき、永野さんの体が後ろ足側に沈み、次の瞬間には伸び上がりつつ横に半回転した。そのままレギュラーのポジションになると、一気にリフト乗り場の方へ向かって降りて行く。

私はその永野さんの滑りに目を奪われた。

「うっわ。すご……」

「ねえ、今の見た？」

昴さんと武田さんが同時に声を漏らす。

「うん、すごいね」

河合さんのため息混じりの呟きも聞こえてくる。

「ったく。アイツ、いきなりワン・エイティかよ……」

浅倉さんはそう言うのと、自分も永野さんの後を追って滑り始める。うわ、浅倉さんも上手だ。なんか、滑り方が昴さんに似てる、かも。綺麗なフォームって言うよりも力強い感じがする。そんな浅倉さんの後から、武田さんも滑り始める。河合さんも下る準備を始める。ボードの角度を変えつつ、優しく微笑みながら私の方を見た。

「ゆっくりでいいからね」

そして、河合さんも滑り始めた。

あ、そうか。この中でスラロームできないの、私だけなんだ……。

「ほな、雪奈、オレらも行こか」

昴さんが私の頭にぽんと手を置く。私はそんな昴さんを見上げて頷いた。ボードを斜面に沿わせるようにして、表コノハの形で斜めに角度を変える。

リフトまではあと二百メートルほど。もう傾斜も全然急じゃない。スラローム、ここでもなら、できるかもしれない。

私は前にある左足に体重をさらに乗せる。重心を落とす。右に曲がりたい、そう思いながら、行きたい方向を見据えつつ、つま先側に体重を移動させる。

――あ。

体が、雪の上に大きく弧を描くように回った。

ひよっとして、私、今、ターンできた？

うん、できてる。できてるよ。だって、今、裏コノハのポジションになってるもの。

じゃあ、もう一回。今度は右から左、裏コノハから表コノハに……。

もう一度前足に体重をかける。行きたい方向を見ようとしたとき、ボードを雪に取られた。バランスが崩れる。

あ……っ、転ぶっ！

とっさに腕を前に出す。その途端、全身をどんっという衝撃が走り、顔に冷たいものが当たる。そのまま私の身体は雪の上をずるずると滑り、止まった。

うう……痛い……。久しぶりに大胆に転んじやったなあ。

倒れている私のすぐ横に誰かが来た。いけない、起きなきゃ。こんなところで寝てたらみんなが迷惑しちゃう。

「雪奈、大丈夫か？」

上体を起こすと、そこにいたのは昴さんだった。私の隣で膝をついてしゃがみ込むと、私の身体に付いた雪を払い落としてくれる。

「あ、ありがとうございます……」

私も自分で身体を叩きながらお礼を言った。

「頭打ってへんか？」

「ええ、大丈夫です」

「ほなよかった」 昴さんはニツと笑うと立ち上がった。「すごいやん、雪奈。まさかターンするとは思わへんかった」

私が昴さんの差し出してくれた手を取ると、身体が引き上げられた。

「でも、失敗しちゃいました」

下半身に付いていた雪を払いながら私が言うと、頭の上にまた昂さんの手が置かれる。

「ボード二日目でこれだけできるようになったら十分や」

「でも、永野さんは今日初めてボードするって……」

私が昂さんを上目遣いで見上げながら言うと、昂さんはちょっと笑った。

「あの人は特別や。雪奈があんなになったら、オレ困ってまう」
「ちょっと！ それって、どういう意味ですか？」

「ま、雪奈も今日中にはスラロームできるようになるんじゃないかな。次リフト乗ったら教えたさかい、はよ行こ。みんな待っててくれたはんで」

昂さんの指し示す方に視線を移すと、さっきの四人がリフト乗り場の入り口でこっちを見ているのがわかった。

昂さんが私の背中を押す。私はリフト乗り場に向かって滑り始めた。

24 笑顔の裏側 (1)

二人掛けのリフトは、いつもの通り昴さんと並んで座る。

だけどいつもと違うこともある。私たちの前には、河合さんと浅倉さんの座るリフトと、永野さんと武田さんの座るリフトがいる。本当に仲がいいみたいで、リフトの上でもそれぞれずっとお話しているのが見えた。

私も昴さんとさっきの反省会をする。やっぱり、裏コノハから表コノハへのターンの方が難しいらしい。

「ま、焦らんでも、今日か明日にはできるようになるやろ」

昴さんはそう言うと言分の足元のさらに下を見下ろした。

私もセーフティバー越しにすっかり見慣れた雪景色を眺める。そのとき、ふと、またハーフパイプとジャンプ台に近づいてきたのに気がついた。そっと隣の昴さんを窺うと、予想通り、やっぱりそこをじっと眺めていた。

きつと、やりたいんだろうな。あれ。すつごく、喰い入るみたいに見つめてるもん。

昨日と今日、我慢して私に付き合ってくれてるんだもんね。

そのときふと、ハーフパイプの隣にコースがあるのに気づいた。

あ、あそこ、私たちが今日ずっと滑ってた中級者コースだ。すぐ隣だったんだ。間に木々があるとはいえ、全然気付かなかった。中級者コースと林道で繋がってるみたい。

下から、歓声が上がった。

見ると、ハーフパイプの中を飛んだり空中で回転したりしながら滑ってる人がいた。その人が宙を舞うたびに、歓声が起こってるんだ。

「あいつ、めっちゃめっちゃ上手いなあ」

昴さんが呟いたのが聞こえて来た。

私は、なんだかとても申し訳なくなつて、昴さんから視線を外した。

やがて、リフトの頂上が見えてくる。未だ、一人でリフトを降りるのはちよつぱり自信がないけど、でも随分怖くなくなった……と思う。

そんなことを考えていたら、昴さんがセーフティーバーを上げながら私に尋ねてきた。

「雪奈、そろそろ一人で降りられそうか？」

ちようど、それを考えてたところだったんだけどな。

「えっと……多分」

自信はないけど私はそう言ってしまった。

私は、リフトの上で、左足が前に出やすいように身体が少し斜めになるように座り直した。そんな私を見て、昴さんがにっこりと笑う。

「よっしゃ。じゃあ、降りんでー」

ボードの裏を雪につける。そのままリフトに押されるように前に進む。

大丈夫。できる！ ……はず。きっと。

私は右足をボードの後ろに乗せて、立ち上がった。そのまま真っ直ぐに前に進む。リフトを降りた直後は短い下り坂になっているから、それだけで前に進んだ。

そのまま目の前にそびえる雪の壁に突っ込む前に右足を降ろして止まる。

——できた。私、一人でリフト降りられた！

私は嬉しくなつて昴さんを探す。昴さんは私のいる場所よりも少し後ろで、苦笑していた。

「できたやん、雪奈」

「はいっ！」

私は大きく頷き、昴さんと一緒にスケーティングしながら先に頂上へ着いていた他の四人の下へと向かった。

「お、来た来た」浅倉さんは私たちの方に手を振ると、隣でケータイを翳している河合さんの方を向く。「おい、正紀、写真撮ってる場合じゃねえよ」

「ああ、ごめん。すごく綺麗な景色だったから」

そう言って、河合さんは携帯電話を胸ポケットにしまった。

私たちはコースの隅に寄って、足をボードに固定するために雪の上に座り込んだ。がちがちと金属音が鳴る。

「よつと」

真っ先に立ち上がったのは浅倉さんだった。そのまま上に伸びた上半身を左右に回転させたりしている。身体を温めているみたい。それに続いて、昴さんも立ち上がる。私も、早く履かなきゃ。

「ゆっくりでいいよ」

優しい声が聞こえてきた。間違いなく、河合さんだ。

そう言ってくれるのはとっても嬉しいけど、でもやっぱりみんなに待ってもらっちゃってるって思うと気が引ける。

「あ、ありがとうございます……」

私はお礼だけ言って、ビンディングをできるだけ急いで締める。ようやくできた。うん、ばっちり。

立ち上がってお尻に付いた雪を払い落としていたら、武田さんの声が聞こえてきた。

「ねえねえ、昴君」

「ん？ なんですか？」

顔を上げた私の目に映ったのは、昴さんに話しかけている武田さんの姿だった。

「昴君って、エアードできるの？」

「エアードってボードのですか？ まあ一応は、少しやったらできますけど……」

「ホント？ どんな技できるの？」

「どんな……？ すんません、オレ、技の名前あんま知らんのですわ。オーソドックスなんしかでけへんし。スピンとかジャンプとかって言うんかなあ？ このグレンデ、ハーフパイプとかジャンプ台とかもあるさかいに、そこでそないな技やりますよ」

「そりゃすげえな。そんだけできりゃ十分じゃん」

昴さんの言葉を聞いて、口を挟んだのは浅倉さん。すっごく興味津々っていう表情をしている。

「なんでそないなこと聞かはるんです？」

「うん。いつかね、インディグラブをね、やってみたいなって思ってた」

そう言った武田さんに、昴さんは少し驚いたように目を見開いた。

「マジで？ 武田さんが？ 永野が言うならわかるけど……」

「武田さんて、意外とアクティブなんですねえ。女性って見かけによらんもんやなあ」

昴さんはそう言って、肘を張るようにして頭の後ろに両手を置いた。

それにしても、『エアー』って何だろう？ それに『インディグラブ』って？

多分、って言うかも知ろんスノーボードに関するお話なんだろうけど、さっぱりわからないなあ。

「ねえ、何そのエアーって？」

永野さんが、わいわいと楽しそうに会話する三人の中に入っている。私の代わりに聞いてくれたみたいで、なんか変な感じだ。

「オリンピックのハーフパイプとかで空中ですげえ技するだろ？ それのこと」

浅倉さんが永野さんにそう説明する。

「ああ、あれ？ ウソ、昴君、できるの？ 私もやりたい！」

永野さんが目をきらきらさせてそう言っているのを聞いて、浅倉さんがため息混じりの苦笑を漏らした。でも、当の永野さんはそれに気づいていないみたいだ。

「ねえ昴君、ちょっとだけ教えてもらってもいい？ 本当は河合君に教えてもらうつもりだったんだけど、河合君、夜通し運転してて、今日は無理そうだから」

武田さんが、胸の前で両手を合わせて昴さんをお願いする。ちょっととした仕草なのに、すごく可愛らしい。って年上の女の人に失礼かもしれないんだけど。

そして私は。それを自然にできる武田さんのことを、ちょっと羨ましいなって思った。

「ああ、確かにそんな状態でエア―教えるんは難しいやろなあ」

昴さんはそう言いながら首をちよつと動かす。

あ、私のこと見てるんだ。

昴さんが武田さんを教えるっていうことは、私が一人になっちゃうってことだから。それを気にしてくれてるんだ。

25 笑顔の裏側 (2)

「あ、教えてくれるならオレも参加ー」

「私も！」

次々と上がった浅倉さんと永野さんの声に、昴さんがそちらの方を向く。右腕を上げて、頭を掻いた。

「あー……そないに言われても、オレ教えられるほど上手ないねんけど……」

昴さんが言葉を濁しつつまた私の方をちらりと見た。
やっぱり。

もしかしたら、くらいの勘が確信に変わる。

私がいるせいで、昴さん、『エアー』できないんだ……。

さっきリフトの上でハーフパイプを見ていたときの昴さんが思い出される。あのときの昴さんは、じっと、真剣に、滑ってる人を見つめてた。瞬きすらしないで。

教える、教えないは別にして、きっと昴さんはその『エアー』っていうの、やりたいんだ。だけど、自分から私を誘った手前、きつとそれができないんだ。

かと言って、私に『エアー』ができるはずないし。

未だ一人で滑るのは自信があるわけじゃないけど、だけど、きつと私、昴さんがいなくても大丈夫。滑れる。未だ完璧じゃないけどターンも少しできるようになったし。

うん、決めた。昴さんとは別に滑ろう。

私が決心して、昴さんに声をかけようと口を開く。

「あ、あのっ。昴さん、私のことは気にしないでくださいね？ 私
は一人で大丈夫ですから……」

私が胸の前で小さく手を振りながら言うと、昴さんの表情が陰し

くなる。

「それはあかん。雪奈は未だ一人で滑るんには危ないさかい」
噛み付くようにそう言った昴さんに私は肩を竦める。

「でも……」

それじゃあ、昴さん、本当にボード楽しめないじゃないですか。
すぐ好きで、そのためにマスターのペンションでタダ働きまでして
るって言ってたじゃないですか。

反論しようとしたそのとき、河合さんの、澄んだ声に先を越されて
しまった。

「じゃあ代わりに、僕が雪奈さんと一緒に滑らせてもらうってこと
で、いいかな？」

え……？ か、河合さんっ？

私が驚いて河合さんの方を向く。河合さんは私と昴さんの方に優
しげな微笑みを返してくれていた。

「どのみち僕は、今日はエアートか激しい技をやるのは難しいから
ね。下手にやって捻挫してもいけないし。昴君も、それだったら、
文句ないだろう？」

重ねて言う河合さんを、昴さんはまっすぐに見つめた。立ってい
る位置関係のせいで、昴さんの表情が私からは見えなくなる。

ん？ なんだろう？ 昴さん、何で黙るの？

「――ほな、そうしましょか」

昴さんが言う。

多分、黙ってたのは一瞬だったんだろうけど、私にはたっぷり一
分ほどはあったように感じられた。

「じゃあ、教えてくれるの決定って事で、いい？」

武田さんがぽんと両手を合わせながら言う。

「ええですよ」

昴さんが頷きながら言い、私も笑顔で頷いた。

「やった♪」

武田さんや永野さんの嬉しそうな表情を見て私まで嬉しくなる。

よかった。思いっきりってわけには行かないだろうけど、これで
昴さんもエアーができる。きっと私というよりも楽しめるはずだ
よね。

じゃれ合うという言葉がぴったりな武田さんと永野さんを眺めて
いたら、昴さんがケータイを片手に寄って来た。

「ほな、雪奈、ケータイの番号教えてんか。ペンションに帰るとき
に電話するさかい」

「あっ、ハイ！」

私は手袋を取ると胸ポケットのファスナーを開けて、ケータイを
出す。

そうか。そう言えば私、まだ昴さんとケータイ番号もメアドも交
換してなかったっけ。もう何日も一緒にいるのに。

それとも、何日も一緒にいるから、かなあ？ ケータイ交換して
おいた方がよさそうだなって、思いつきもしなかった。

「あ、キャリア一緒やな。ほな赤外線で交換しよ」

私のケータイを見て、昴さんが言う。

見ただけでよくわかるなあ。

私はそんなことを思いながら、ケータイを操作して赤外線データ
受信のモードにする。

昴さんとお互いに自分のデータをやり取りしていたら、河合さん
や他の人たちも寄って来た。

「あ、じゃあ僕も二人のケータイ番号とメアド聞いておこうかな。

一応、お互いに連絡取れるようにしておきたいし」

そう言いながら、河合さんが取り出したケータイは、昴さんのと
色違いのケータイだった。昴さんが赤で、河合さんが黒。なんだか
二人のイメージ通りだ。

「あ、一緒やん」

「本当だ。なんか縁があるね」

にっこりと笑う河合さん。だけど、昴さんはちょっと複雑な表情
だ。

そのままわいわいと、皆でケータイ番号を交換し合う。

全員の交換が終わると、河合さんはボードを履いたまま私のところにスツと器用に寄って来た。そしてその手を私の両方にぽんと置き、昴さんに声をかける。

「じゃあ、昴君。『妹』さん、お預かりするね」

昴さんは一瞬目を見開き、口を開く。そのまま何かを言いかけて、思い留まったようにいったん口を噤んだ。そして改めて口を開く。

「ホンマに大事にしたってくださいね、河合さん」

「もちろん、そうするよ」

昴さんと河合さんとのその会話に、ちょっとだけがっかりした。なんか完全に『妹』っていう立場が確定しちゃった気がする。

なんか、変な感じ、かも。

昴さんは私と河合さんを流し目で見つつ、武田さん、永野さん、浅倉さんの方を向き直った。

「ほな、行きましょか。せやなあ、ちよお、オーリーからやりたいさかいに、なだらかなトコまでとりあえず移動しますわ」

両手を広げて振りながら、ほら行った行ったと昴さんが三人の生徒(?)を追い立てる。

昴さんたちの姿が、斜面の下の方へと滑り、やがて見えなくなっただ。

「それじゃ、僕たちも行こうか？」

河合さんの声がした方を向いた私は、思わず声が出そうになるのを必死で堪える羽目になった。

だって、目の前に河合さんの顔があったんだものー！

でも、考えてみれば当然だ。河合さんは私の肩に手を置いたままなんだから。その状態で私を覗き込むみたいにして話しかけてきたんだから、そりゃあ、近い場所に顔があって当然なんだけど。

でも、でもね？

なんだかとっても、昂さんよりも心臓に悪い気がします。

26 笑顔の裏側 (3)

私が想像していた以上に、河合さんはすごく優しく、紳士的だった。私は経験がないから、男の人のことってよくわからないけど、こんな人がモテないわけない、と思う。

お話も上手だし、いつも笑顔だし、常に私のことを気にしてくれてるし。ボードの滑り方も教えてくれるし、私が転んだらすぐに寄ってきて助けてくれる。

あ、でもそれはそれは昴さんも一緒か。
だけど、昴さんと河合さんは全然違う。

うーん、何て言えばいいのかなあ？ 纏ってる空気が違うって言えばいいのかなあ？

河合さんは、とっても雰囲気柔らかい。隣にいと、ふんわりした暖かいもので包まれているような、そんな気になる。でも、昴さんは違う。昴さんは太陽みたいな人。元気で明るくて、なんだか底知れないパワーがある。

そう、本当に太陽だ。それに対して、私は月だ。太陽の光を受けてようやく輝くことができる、夜空に浮かぶ月。昴さんのおかげで私は今までとは少し違う自分に出会えた気がするから……。

何本か滑った後、私たちはそれまで乗っていたリフトとは違うリフトに乗ってみることにした。

それまでのコースよりも長い距離を滑ることになるみたい。

「もしかして、上級コースじゃないですね？」

私が確認すると、河合さんは微笑んだ。

「大丈夫、違うよ。ゲレンデマップには、中級者コースって書いてあったから」

——あのう、私、ボードを始めてまだ二日目なんですけど……。って言いたかったのに、私に向けられる河合さんの笑顔がなんか落ち着かなくて、結局言えなかった。

ああ、流されやすいなあ、私。こんなことじゃあ、何も変われないよ。

でも、弱音を吐かないって決めたし、初めてのことででも挑戦するって決めたから。

私は河合さんとペアリフトに並んで座った。

足が地面から離れて、身体が浮き上がる。

いつもの通り、私は左脚に力を入れて、ぶら下がっていたボードを右脚に引っ掛ける。昨日、昴さんに教えてもらったことだ。

もう、癖になってるみたい。

リフトのケーブルに沿って上を見上げる。終わりが見えないや。

当たり前かあ。コースが長いと、リフトも長いよね、普通。

隣に座る河合さんがごそごと動いていることに気付いて、私はそちらを見た。

「手、出してくれる？」

河合さんが微笑みながら言った。

ワケもわからないまま私が手を出すと、河合さんは私の手を取って包み込むようにする。そして掌に何かを握らせてきた。

うう、手袋越しでよかった……。

そんなことを思いながら、私は河合さんの手が離れた自分の手を開く。そこには飴玉が一つのっかっていた。

包み紙の両端が捻るようになって包まれているタイプの飴玉だ。

「あ、ありがとうございます……」

私が言うと、河合さんは微笑んだ。

「美味しいよ。結構お気に入りなんだ、これ」

そう言った河合さんの頬が片方膨らんでいる。きっと河合さんも

食べてるんだ。

私はありがたくいただくことにして、包み紙の両端を引っ張った。くるくるっと飴玉が回転して包み紙が解ける。落とさないように気をつけながら、それを頬張った。

うん、美味しい。いちごミルクの味だ。

河合さんが甘いもの大丈夫って、ちょっと意外、かも。

河合さんに改めてお礼を言おうと思ったら、河合さんはケータイを手にしていた。手袋を外して、熱心に何か操作している。

私が見ているのに気付くと、照れたような笑顔を見せた。

「あ、ごめんね」

そう言って、ケータイを閉じると、胸のポケットにしまう。手袋をはめ直している河合さんに私は尋ねた。

「メールですか？」

「うん。紗織にね」

サオリ？

私は河合さんの口から出てきた名前を反芻する。

サオリ……？ 武田さんの名前は『真由子』だし、永野さんの名前は『香蓮』だったはずだから……。

「――彼女さん、ですか？」

私はズバリ聞いてみた。

河合さんがにっこりと微笑む。

「うん、そうなんだ」 照れもせず、隠そうともせず、河合さんは答えた。「ここの景色、すごく綺麗だから見せてあげたくてね。さっき上で撮った写真を送ったんだ」

その笑顔があまりにも幸せそうで、見ている私までなんだか暖かい気持ちになる。

「仲がいいんですね」

「うん、そうだね」

そう、さらりと言ってしまう河合さんを、私は、やっぱり素敵だ

なっと思ってた。

そう思った途端、なんだか心の奥に歯がゆいものを感じる。
なんだろう、この感じ。

ショックとかじゃなくて、嫉妬でもなくて。

さっき昴さんに『妹』って言われたときの方がショックだった気がするし。

ええっと……、これは、純粋な、羨望……？

私にも、そんな風に言える人ができたらいいなっていう。そして、その人にもそんな風に言ってもらえるようになりたいなっていう。そんな感じ。

「ところでさ、雪奈さん」

河合さんの声に、身体がびくりと震えた。

ヤダ、私。随分、物思いに耽っちゃってたみたい……。変な顔してないといいんだけど。

少し不安に思いつつも、とりあえず返事をする。

「はい？」

「昴君とは、本当になんでもないの？」

予想もしていなかった質問に、私は息が止まった。

その拍子に、口の中にあった飴玉が喉に詰まる。

「！ ケホッ！ ゴホッ！」

横隔膜が激しく反応し、私は咽た。

飴玉はなんとか口の中に戻ってきたものの、咳がなかなか止まらない。

「大丈夫？」

河合さんが背中を摩ってくれる。

大きな手で優しく何度も摩られているうちに、ようやく落ち着いてきた。

「ごめんね、まさかそんなに驚かれるとは思わなくて」

「驚きますよ……」

「そう？」

「昴さんとは、本当になんでもないんです。何日か前に、あのペンションのアルバイトで、初めて知り合ったんです。私がいろいろと頼りないから、何かと気にかけてくださってるんです」

私はそう答えて、小さくため息をついた。

自分で言って、自分で勝手に自己嫌悪。

本当に、その通りなんだもの。私、昴さんに気を使ってもらってばかりだ。

「じゃあ、本当になんでもないんだ」

河合さんが言った。

「ええ」

私は頷いて、前を向いた。

だから、気付かなかった。

河合さんが、意味ありげな微笑みで私の方を眺めていることに。

27 星空の鑑賞会 (1)

あれからもうしばらく河合さんと滑った後、昴さんから電話があった。

河合さんと滑っているとなんだかほっこりしちゃって、時間が経つの忘れてたから、電話が来たときは吃驚した。え、もうそんな時間？ って。

ゲレンデ下のロッジところで昴さんや他の方々と待ち合わせて、私と昴さんだけ、ペンションへと戻った。

「なんや、ご機嫌やな」

ボードを担いで二人でペンションに向かって歩いている途中、昴さんが私に言った。

「そうですか？」

「ああ。なんか、イキナリ歌いだしそんな感じやで」

「ああ、それはきつと、スラロームがちよつと滑れるようになったからです」

「え、ホンマ？」

「ええ。河合さんが教えてくださって。なだらかなところなら、なんとか」

「ふうん……。そおなんか。がんばったやん、雪奈」

昴さんは優しく微笑みながら、また私の頭をぽんぽんと撫でてくれた。

ペンションに着いたらすぐにマスターや浩美さんのお仕事を手伝う。ある意味、一日の中で一番大切なお仕事、食事の仕度だ。

一応時間には余裕を持って戻ってきたつもりだったけど、お客様の人数が増えたせい、か、すごく忙しかった。

作り終えた頃には、お客様が食堂に食べにいらっしゃる。休むまもなく今度は給仕。

そして、皆様のお食事が終わってから、ようやく私たちもお食事。その後、食器を洗って、厨房をお掃除して、ようやくペンションでの一日のお仕事が終わる。

と言うわけで、今はもうそういったお仕事も終わった、夜の自由時間。

今夜は、昴さんと一緒にご近所の『森田さん』のお家にお邪魔して星空鑑賞会をすることになっている。近所だから歩いていくのかなんて思ってたけど、車で行くらしい。昴さんが運転してくれるって。

昴さんと部屋に戻りがてら、集合時間を確かめる。十分後にエントランス集合ってことで落ち着いた。

「ああ、そうや。エアコンが効き始める前に着くさかいに、暖かい格好しときや」

自室に入ろうとしたとき、顔だけをドアから出した状態で昴さんが言った。

私は自分の部屋に入って鏡の前に立つ。コートに腕を通すと、ボタンをきつちりと締めた。マフラーを髪の毛ごと首に巻きつけ、解けないように前で結び、最後に手袋をはめる。

よし、ばっちり。これで寒くない、はず。

さっきマフラーを巻いてるとき、隣の部屋のドアが動く音がした。昴さんは先に行っちゃってるはずだ。車を玄関に回しておくって言ってたから。

約束の時間まではあと五分ほどある。

だけど私はなんだか落ち着かなくて、自分の部屋を出た。

やっぱり、早すぎ、だよね。

エントランスには着いたけど、誰もいない。それに、館内は暖房が効いてはいるけど、それでもエントランスはちょっぴり寒い。うう、どうしよう。

視線を走らせた先に、ラウンジの扉がある。

そうだ、昴さんが来るまでここで待てよう。

私はラウンジに入ると、心地のいいソファに座った。

そういえば、初めてこのペンションに来た日、ここでマスターと面接(?)したなあ。

まだあれから数日しか経ってないのに、随分前なことのよう気がする。それだけ、ここに馴染んだってことかなあ。

そんなことを考えていたら、賑やかな声や笑い声と共にラウンジのドアが開いた。

「――だから、あそこはもうちょっとさあ」

「えー。いいじゃない、別に。できたんだし」

「香蓮すごい上手だったよね」

「そうなんだ。それは僕も見えたかったな」

「ホント、お前、女にしとくのもったいねえよな」

「うるさいなー」

聞き知った声。見知った顔。

もちろんそれは、河合さんたち四人で。

私が気付くのと同時に、河合さんも私に気が付いた。

「あれ？ 雪奈さん？」

「あ、こんばんは……」

私はソファに座ったまま会釈した。

武田さんがくすくすと笑う。

「そんな改まらなくっても。さっきまで一緒にいたじゃない」
四人がラウンジに入ってくる。

浅倉さんの手に、小さな箱が見えた。一瞬タバコかなって思ったけど、多分違う。館内は禁煙だもの。

「このラウンジ、使わせてもらってもいいのかな？」

河合さんが私に聞いてきた。

数日前までいたお客様にも同じことを聞かれたっけ。確かそのとき、マスターはいいよって言ってたはず。

今他に誰もいないし、ここなら客室とも少し離れてるから他のお客様の迷惑にもならないし。

「ええ、大丈夫です」

「よかった。みんなでトランプやろうと思って。きつとうるさくしちゃうだろうから、僕たちの部屋だと隣の部屋の人に迷惑をかけちゃいそうでね」

なんとなく『うるさくしちゃう』の想像がついて、私は苦笑した。それにしても。

屋内にいるのに厚着の私。ただでさえちょっと変なのに、普通の服を着てる皆さんに囲まれるから余計に変です……。

「どこか行くの？」

私の服装を見て、永野さんが言う。

「ええ」

「一人で？」

「んなわけねえだろ」

永野さんの言葉に浅倉さんが突っ込んだ。

「あ、昴さんを待っているんです。車を取ってきてくれることになつて」

私が答えると、武田さんがにんまりと笑う。

「もしかして、デート？」

「ちっ、違います！」

私は慌てて否定する。

もお、河合さんも武田さんも、なんでそういうこと言うのかなあ？
違うのに。本当に、そんなわけないのに。

私はちよつと拗ねた気分で、昂さんと何処に出かけるか告げた。

「マスターのお知り合いの方が、星空鑑賞会を開くからおいでって
言ってくださって、それで……」

途端に武田さんが目を輝かせた。

「うわあ、なんか素敵！ いいな、私も行きたい！」

「だめだよ、武田さん。先方様に迷惑かけちゃうから」

「……だよね」

河合さんに優しくたしなめられて、えへへと武田さんが苦笑いする。

やっぱり、武田さんってなんか可愛いなあ。

いつもにこにこしてて、だけど表情はくるくる変わって。男の人が放っておかない気がする。

私も、あんな風になれたら、そうしたら――

28 星空の鑑賞会 (2)

そのとき、勢いよくラウンジのドアが開いた。

「いやー、まさかフロントガラス凍るとは思わへんかった。油断したわー」

「まったく、だから影に置いておけて朝言ったじゃないか」
入ってきたのは、もちろん昴さん。それと、その後ろにはマスタ
ーまでいる。

「雪奈、おまたせー！ って、あれ？」

昴さんがラウンジの中に私を見つけて声をかけてくれる。

「昴さん」

私は思わずソファから立ち上がった。

昴さんは私と、その周りにいる河合さんたちを見てキョトンとし、
次に目を細めて笑った。

「なんや、えらい賑やかやなあ」

そんなことを言いながら、昴さんとマスターが私たちの方まで歩
いてくる。

「いいなー、星見に行くんですって？」

武田さんが昴さんに言うと、昴さんが答える。

「ええ、そうです。大介兄ちゃんと仲良うしてるご近所さんが、ご
好意で毎年見せてくれはるんですわ」

「毎年？」

武田さんの質問に昴さんは頷き、マスターに「な？」と視線を投
げかけた。マスターもにこにこしながら頷く。そして口を開いた。

「そうだ。みなさんも行かれますか？」

武田さんの目が輝いた。

「えっ、いいんですか？」

「森田さんなら大丈夫。大歓迎だよ。あの人、人をもてなすのが大好きな人だから」

マスターはそう言って笑った。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

河合さんが言い、軽くお辞儀する。他の三人もそれに習って頭を下げた。

「いやいや、それは森田さんにやって。俺は森田さんに『お願いします』って電話するだけだから」

なんだかマスターの方が恐縮しちゃってる。

でも、今日のゲレンデに引き続いて、この素敵な人たちと一緒に過ごせるって思うと、私は嬉しくなった。

「ほな、車ん中、寒いさかい、ジャケットかコート持ってきてください」

昴さんが言い、河合さんたちは急いで自分たちの部屋に戻って行った。

その間に、マスターが森田さんに電話する。マスターが電話しながら笑ってる。マスターの言うとおりで、森田さんは人が増えても全然気にしないみたい。

やっぱり、いい人の周りにはいい人が集まるんだろうな。

私と昴さんは先に車に向かうことにした。

「行ってらっしゃい、楽しんでおいで」

受話器の口を手で押さえながらそう言って見送ってくれたマスターに手を振って、私たちは外に出た。

雪は降ってないけど、やっぱり外はすごく寒い。って言うか、冷たい。

息を吐いたら、その白さが綺麗に見えた。

その霧のような靄が、なんか、きらきら輝く。

——ん？ 輝く？ なんてだろう？

私は、立ち止まってその光源の方を見た。

「うわあ……」

ペンションのエントランスのすぐ脇。

そこにあっただのは、白銀の、クリスマスツリーだった。

もともとペンションの敷地にある木だ。葉っぱはないけど、枝や幹に雪が積もって、真っ白になっている。その木に、温かみのある黄色の小さなライトが蒔きつけられていて、天辺から地面までは円錐を形作るみたいに垂れ下がっていた。

とっても幻想的なクリスマスツリーだ。

いつも、この木の隣を通ってるのに、全然気付かなかった……。

「きれい……」

そう呟いた私の声が聞こえたのか、前を歩いていた昴さんが振り返ったのが、目の隅っこで見えた。

「ん？ ああ、これか？」

しゃくしゃくという雪を踏み締める音で、昴さんが私の方に近づいてきているのがわかる。そのまま、すぐ隣に立った。

私は昴さんを見た。昴さんの方が背が高いから、当然見上げなきゃいけないんだけど。

その昴さんの顔が、ライトに照らされていた。

「お庭に、こんな素敵なクリスマスツリーがあったんですね」

「今朝、大介兄ちゃんで作ったんやで。綺麗やろ」

「ええ、とっても」

私は頷いて、またツリーに視線を戻した。

そう言えば、朝ごはん食べた後、なんか外で作業するって言うたような気がする。

これ、作ってたんだ。

「いつもやったら、オレがこっち来てすぐ作るんやけど、今年はいろいろとあったさかいになあ。作んの遅うなってるん」

クリスマスツリーを飾るライトが、ランダムに点滅を繰り返す。そのまましばらく、私と昴さんは、二人並んでツリーを見つめていた。

やがて、ペンションの出入り口の扉が開いて賑やかな声が聞こえてくる。

「ああ、やっとみんな来はった」

昴さんが言い、ペンションの方を見る。河合さんたち四人が、身を寄せ合いつつもわいわい言いながら、私と昴さんのいる方へと歩いてきた。

「ごめんね。我が俤言った上にお待たせしちゃって」

河合さんが私たちに向かって言う。

「ええですよ。気にせんといってください」

昴さんが答えるのが、背中越しに聞こえてくる。

武田さんが、私たちの身体の向きに気付いて、ツリーを見上げた。

「ああ、ツリー見てたのかあ」

「このツリー綺麗だね。今日ゲレンデから帰って来たときに、私たちも見えてたんだ」

永野さんも言う。

みなさん知ってたんだ。気付かなかったの、私だけかあ。

「私、こんなところにツリーがあるなんて全然気付きました」
私が言うと、昴さんが苦笑する。

「雪奈はツリーが光うてる時間に外に出えへんのやし、それもしゃーないと思うねんけど」

確かにペンションの扉とかそこに続く道からは数メートル離れるから、それはそうかもしれないんだけど。それでも、普通は気付くよねえ？

……私、典子ちゃんたちが言うように、自分で思っている以上に天然ボケさんなのかしら？

そんなことを考えていたから、きつと、納得いかないって顔をしていたんだと思う。昴さんが、あやすみたいに私の頭の上に手を置

いた。

「ほな、そろそろ行きましょか。森田さん、きつと、待っててくれたはるし」

あ、そうだ。一応、約束の時間があるんだったつけ。

私たちは昴さんが門の辺りに回しておいてくれた車に向かって歩き出した。

29 星空の鑑賞会 (3)

私たちが乗り込んだのは白いワゴン。私がここに初めて来たときに昴さんと乗った、あの車だ。

この車は、普段、電車でいらっしゃるお客様を駅まで送迎したり、食材の買出しに行くのに使われている。もともととても大きな車だから、昴さんと私、それと河合さん、浅倉さん、永野さん、武田さんが乗っても、まだまだ広さとしては余裕だった。

もちろん、昴さんが運転席。私は助手席だ。後ろのシートを覗くと、例によって女性が真ん中の列、後ろの列には男性二人が座っている。

「みなさん、シートベルト締めはった？　ほんなら、車出しまっせー」

昴さんはバックミラーで後ろの席を確認すると、ギアをドライブに入れた。

* * *

森田さんのお家は、車で十分とかからないところにあった。

って言っても、雪の上を危なくないようにゆっくりと進んでの十分だから、雪のない時期なら数分で着いちゃうと思う。そんな距離。昴さんはもう何度も来ているみたいで、森田さんが空けておいてくれた家のガレージに切り替えし一回だけで駐車を終えた。

みんなで車を降りて、ガレージから家の入り口まで移動する。インターフォンを鳴らしてしばらく待っていると、「はい」と反応

が返ってきた。

「中野ですー。遅くなってもーて、えらいすんません」

あ、そういえば、昴さんって『ナカノ』って苗字だったっけ。もうすっかり、名前で呼ぶのに慣れ切っちゃってるなあ。

そんなことを考えている内に、森田さんの家の玄関扉が開く。中から出てきたのは、中年の、優しそうなおじ様だった。多分、マスターの一回りくらい上だと思う。

「おお、昴君。待ってたよ」

昴さんを見てそう言った後、森田さんは私たちの方を向いた。

「君たちのことも中野さんから聞いているよ。あまり広くない家だけど、どうぞ。外は寒いから、早く中に入って入って」

森田さんに追い立てられるようにして、私たちはとりあえず家の中に上がらせていただいた。

通されたリビングで、私たちは改めて森田さんにご挨拶する。

奥からは奥様も出てきてくれた。これまたおっとりした雰囲気のお様だ。

「あの、誘っていただいて、ありがとうございました」

「突然、ご無理言って僕たちまでついて来てしまつて、すみません」

「いや、いいんだよ。ただの趣味でやってることだからね。それに、息子からは全然相手にされないんだ。昴君や、他の興味があるって言うってくれる子たちが来てくれて、本当に嬉しいよ」

森田さんは、ちょっと出ているお腹を楽しそうに揺すった。

森田さんのお家のリビングは、多分二十畳くらい。白い壁にフロアリング、その上にムートンの絨毯が敷いてあつてとっても暖かい。壁際にはテレビとオーディオセット。それに、写真がたくさん飾られていた。

「ちょっと待っててね。今、暖かい飲み物出すから。コーヒーがいいかしら？ それとも紅茶？ ココアも緑茶もあるわよ」

奥様は明るい声でそう言ってキッチンの方へと歩いて行く。

「あ、気にせんといてくれてええよ、お婆ちゃん。お構いなくー」
昴さんが声をかける。

そのとき、だだだだっと言う音が近づいてきた。明らかに階段を駆け下りてくる音。その音の主は、最後にどんっ！と一際大きな音を鳴らすと、リビングのドアをボタンと開けた。

「昴！」

大きな声と共にリビングに突進して来たのは、私や昴さんよりもちよっただけ若そうな男の子……。

多分、背は昴さんと同じくらいか、少しだけ低い。ちよっと長めの茶色い髪と、冬なのに日焼けしたままの肌の、すごく活発そうなイマドキの男の子だ。

「おう、晴人^{はると}やん。久しぶりやなあ」

昴さんが破顔した。

晴人と呼ばれた男の子が昴さんに近づく。そして、二人で笑い合いながら、腕と腕をぶつけてじゃれ合った。

「夏以来だろ？」

「ほな、半年振りかあ」

そんな二人を見ながら、私はなんとなく、後ずさりしちゃう。怖い、わけじゃないんだけど。まだまだ、初対面の男の人には、すぐに慣れられないんだなあ、私。

そういえば、河合さんにはすぐ慣れたのに、ね。今日、いっぱいおしゃべりもしたし。

不思議だ。

浅倉さんとは、一対一での会話なんて絶対にできないのに。そんな風に遠巻きに二人を見ていたら、晴人さんと目が合った。

晴人さんの目が、真ん丸になった。

そして目は私を捉えたまま、昴さんの胸倉を掴んでガクガク揺らす。

「なあ、おい、昴。あの子、誰？」

「ち、ちよお、晴人。やめえや」

その声が届いたのか、晴人さんが手を離して昴さんを解放する。それでもずっと私の方を見たままだ。

え？ え、え？ 私、なんか変？

ようやく自由になった昴さんは、ほっとしたようにため息をつく
と、晴人さんの凝視する方——つまり、私と、その後ろの河合さん
たちを見た。

「ああ、手前の子がペンションにバイト来てくれてる子で、後ろの
四人はペンションのお客さん。森田さんがええよって言うてくれた
さかい、つれて来てん」

晴人さんは昴さんが言い終わる前に歩き始めた。

私を見たまま。

まっすぐに。

私の方へ。

え？ 何？ 私……何かした？ してない、よね？

後ろへ後ずさりたくても、後ろには河合さんたちがいるし……。

困ってうろたえている間に、晴人さんは私の真正面まで来た。

そして、晴人さんは、うろたえる私の両手を取って、私を真っ直
ぐに見つめて、言った。

「やっべえ。お姉さん、すっげー可愛い。超俺好み。ストライクゾ
ーン、ど真ん中！ ねえねえ、俺と友達になってくれる？ 名前聞
いてもいい？ 今、彼氏いる？ 俺と付き合わない？ ケータイ教
えて？」

え……っと……。

はい？

え？ え？ え？

状況が、よく、飲みこめないんです、けど。

「こら！」

すばあん！

「いでっ！」

『こら』は森田さんの台詞、『すばあん』は森田さんが晴人さんの頭を軽く叩いた音。『いでっ』はもちろん晴人さん。

晴人さんは私の手を離し、叩かれたところを摩っている。

「まったくお前は……」

森田さんはため息をつくど、晴人さんの腕を掴んだ。

「すみませんね、こいつ、本当にバカで」

森田さんが、晴人さんの腕を引っ張って私から引き剥がす。そしてそのまま晴人さんをヘッドロックしながら私に向かって言った。晴人さんは苦しいらしく、手をばたばたとさせ始める。

「あ、いえ……」

私は慌てて手を胸の前で小さく振った。

そんな私の隣に、昴さんがため息をつきながら戻ってくる。

「雪奈、大丈夫か？」

小声で聞いてきてくれた昴さんに、私は苦笑しつつも頷いた。

確かにびっくりした。けど、多分、平気。うん。

気持ちを落ち着かせてから森田さんに視線を戻す。その腕の中で、晴人さんが相変わらず手をばたつかせていた。

「ちよっ、親父っ、オトーサマッ、苦し…、マジ苦しいって！」

晴人さんの声に、森田さんは「おっと」と言いながら腕を放した。晴人さんが深呼吸する。

森田さんがこほんと咳払いした。

「えー。みっともない恥ずかしいヤツですが、うちの息子です」

「森田晴人。大学二年です」

森田さんが紹介すると、晴人さんはふざけた態度から一変して、ぴしっと礼をした。

その急変っぷりにもびっくりしたけど、年齢にはもっと驚いてしまった。

晴人さんって私と同じ年齢なんだ。もっと下かと思った。高校生とか、それくらい。なんか、ちよっと、いや、とっても、ヤンチャそうだし。

それにしても、なんだか森田さん親子って、昴さんとマスターの関係に似てる、かも。いい親子だけど、同時にお友達でもある、みたいな素敵な関係。

私は微笑ましく思いながら、森田さん親子を眺めた。

昴さんが代表して、簡単に私たちを紹介する。昴さんが手で私たちを示すのに合わせて、私たちは会釈した。

「こちらは河合さんと浅倉さん。それと、永野さんと武田さん。四人はペンションのお客さんやねん」

最後に、昴さんはいつものように、私の頭をぽんぽんと抑えるように触れながら言った。

「で、この子は雪奈。浩美さんがアレでペンションの人手が足りひんさかい、アルバイトとして来てもらてんねん」
につこりと笑いながら晴人さんの方を見る。

晴人さんはすっごく嬉しそうな笑顔を浮かべて、私たちの方を見返した。

その表情が、私には、なんだか恵美ちゃん家のワンコみたいに見えた。前に、お家に遊びに行ったときに会ったワンコ。「お散歩行くか」って恵美ちゃんが言ったときの、あのとっても嬉しそうな「本当？　ねえねえ、早く行こうよお」ってじゃれてくる、あの表情にそっくりだったから。

それを思い出して、私は知らず微笑んだ。

「つまり、昴のカノジョってわけじゃないんだよね？」

「なんやねん、晴人、イキナリ……」

晴人さんの問いに、昴さんが訝しげに言うのが聞こえてきた。

「雪奈ちゃん」

昴さんの言葉を遮るように、晴人さんに名前を呼ばれて我に返る。気がつくのと、私はまた晴人さんに腕を取られていた。

「え？」

「展望室、三階なんだ。先に行こうぜ」

「えっ、あ、あの……」

私が返事をする前に、晴人さんは私の腕に引っ張る。それに引き摺られるように私の脚が動いた。

歩きながら、みんなのいる後ろを振り返る。

苦笑しながら私たちを見送る森田さんと河合さんたちに混じって、とっても、とってもとっても珍しく、仏頂面をする昴さんがいた。

晴人さんに腕を掴まれたまま、とりあえず二階に上がらせていた
だく。そこにあつたのは、廊下といくつかの扉。さらに上に続く階
段は、どこにもない。

どうやって上るんだろう？

そう思っていたら、晴人さんが廊下をずいずいと進み、一番隅っ
こにある扉を開けた。

狭い上に、真っ暗……。

晴人さんが扉の脇にある電気のスイッチを入れると、上に続く階
段が見えるようになった。

あ、ここが、展望室への入り口なんだ。

私が納得するまもなく、そのまま、晴人さんは当たり前のように
私を引っ張りながら上っていく。

階段を上り切ったところで、晴人さんはようやく私の腕を離れた。
そして、振り返りながら言った。

「はい、着いた」

「うわあ……」

ため息のような声が漏れ、私はその部屋を見回す。

晴人さんに案内された『展望室』は、私が想像していたものとは
まったく違っていた。

廊下も扉も何もなく、もうそこは、部屋の中だった。十畳くらい
の部屋だ。

展望室とは言うものの、造り自体は屋根裏部屋って言った方が近い。床は絨毯が隙間なく敷かれているし、空調もちゃんと設えられている。クッションやブランケットが部屋の隅に綺麗に並べられ、小さめの丸いカフェテーブルが部屋の中央に置かれていた。

ただ、普通の部屋とは違う点も多い。

まず、一番目に付くのは部屋の形。八角形だ。四角い部屋の角を削ぎ落としたような形をしている。

それに壁と天井。壁って言える部分は、床から五十センチ分くらいしかない。そこから上は、八角錐の天井だ。東西南北の方位をわざと外した部分だけが（斜めにはなってるけど）普通の天井で、残りは全部ガラス張り。壁や天井のガラスじゃない部分は、ログハウスみたいに板の目がそのままになっていた。

床暖房も完備されているみたいで、足の裏が暖かい。天井までの高さはあまりないけど、その分、保温がしっかりされる感じがする。私は部屋を見回しながら、その場で一周してみた。

「すごい、ですね」

「だろ？」

晴人さんはどこか自慢気だ。

森田さんは、息子さんからは相手にされてないって言ってたけど……それは黙っておいた方がいい、よね。

私が晴人さんの言動に苦笑していると、階段の方から賑やかな声が聞こえてきた。わざわざ確かめなくても、昴さんやみんながこの展望室に上ってきたんだとわかる。

そして私の予測どおり、森田さんを先頭に、昴さんや河合さん、武田さん、永野さん、浅倉さんが部屋に入ってきた。

「天井が低いから、さすがにこの人数だと窮屈だね」

そう言いながらも、森田さんは嬉しそうににこにこ笑いながら、私たちにブランケットやクッションを配る。

私たちはそれを受け取って、それぞれ適当な場所に散った。

31 星空の鑑賞会 (5)

私は晴人さんに渡されたブランケットを手に、一人部屋の壁際に座る。

床が暖かい。腰を降ろしてようやくそのことに気が付いた。

絨毯を撫でながら、私が呟く。

「あったかい……」

それが聞こえたみたい、森田さんがにこしながら昴さんにクッションを渡して言った。

「君たちが来る前に床暖房をつけておいたから。そろそろ効いてくる頃だと思うよ」

それを聞いて、みんなが口々に森田さんにお礼を言う。

本当に、いい人だな。

そんなことを思っていたら、階段から女性の声が聞こえてきた。

「ちょっといいかしら？ 飲み物を持ってきたのだけど」

森田さんの奥さんだ。階段を上ってきた奥さんは、大きなお盆にたくさんのマグを載せている。とっても重そう。

「ありがとうございます」

それを見た武田さんが素早く立ち上がって奥さんの方へと寄っていく。

私も立ち上がってブランケットを足元に置いた。

「晴人、母さんを手伝え」

森田さんに言われた晴人さんが、「はい」と返事しながら奥さんの下へと寄り、奥さんからお盆を受け取った。身軽になった奥さんがほっとしたように微笑む。

飲み物を持った晴人さんのところへ向かう途中、クッションを抱えた昴さんとすれ違った。

「雪奈、オレのんも頼むわー」

「あ、ハイ。何にします？」

「ココア」

「わかりました」

意外。昴さんって、甘いもの、大丈夫なんだ。

私もココアにしようかな。

こんな素敵な部屋で、暖かくて美味しいココアを飲みながら、星空を観るなんて、なんだかすごく贅沢してる感じがする。

そんなことを考えながら両手でお盆を持つ晴人さんの前に立つと、晴人さんがにこにここと上機嫌で声をかけてきてくれた。

「雪奈ちゃん、どれにする？」

「あ、えっと、ココアにしようかな、って……」

「じゃあ、雪奈ちゃんから見て右にあるマグだよ」

私はお盆の上からココアのマグを二つ受け取ると、次の人のためにとりあえず立っている場所をずらした。

昴さん、どこかな。

部屋の中を見回すと、人がいっぱいにもかかわらず、すぐに見つかった。さっき私がブランケットを置いた場所の、すぐ隣にいる。もうすっかりくつろいだ様子で、クッションを背に床に座っていた。

ほこほこと湯気の出るマグを両手に、その場所へと戻る。そして床に膝を着くと、片方のマグをすっかり昴さんに差し出した。

「ありがとう、雪奈」

「熱いですから、気をつけてくださいね？」

私がマグの取っ手を持ちちゃってるから、昴さんが手にするところには熱いはず。

「ん」

昴さんは右手を伸ばし、慎重な顔つきでマグを受け取った。片手が空になったところで、私は自分の分のココアを床の隅の方に置くと、昴さんの右隣に腰を下ろす。そして、ブランケットを膝

に被せ、またマグを手を取った。

「……言うてくれたら、オレが持ってたのに」

「え？」

昴さんが何か呟いた気がして、私は聞き返した。

「なんでもない。気にせんというて」

昴さんが苦笑する。

なんだか腑に落ちない。

だけど、そんなもやっとした気分は、聞こえてきた別の声に掻き消された。

「雪奈ちゃん、隣、いい？」

声のした方を見上げると、笑顔の晴人さんが立っていた。飲み物を配り終えたんだ。私の右隣を指差している。

「ええ」

私が答えると、晴人さんは一瞬だけ昴さんの方に視線を走らせながら、例の嬉しさを前面に押し出した子犬のような表情で、私の隣に腰を下ろした。

「――さて、そろそろ電気消すよ？」

今度は森田さんの声が聞こえてくる。いつの間にか、森田さんは電気スイッチの脇に立っていて、部屋の中の様子を確認していた。

私と昴さんと晴人さん、河合さんに武田さんに、永野さんに浅倉さん、そして奥さん。みんながめいめいの場所に落ち着いたことを確認してから、森田さんが部屋の照明を消す。

当たり前だけど、急に、真っ暗になった。

さっきまで明るかったから、目が慣れなくて。

何度か瞬きしているうちに、だんだんと馴染んでくる。

朧気に、闇の中をうごめくみんなの姿が影のように見えてきた。

左肩をとんとんと叩かれ、耳元に昴さんのささやき声が聞こえて

くる。

「雪奈、上、見てみ？
上？」

言われて見上げた私の口から、ため息が漏れた。

「うわぁ……」

ガラスでできたとんがり屋根の向こうに、文字通りの、満天の星空が広がっていた。

数え切れないくらいに、すぐたくさんの星々がきらめいている。こんなにかくさんの星、見たことがない……。

本当に、見惚れる。

「きれい……」

「だろ？」

晴人さんが、また自慢げに言った。

他の人たちも空の様子に気付いたみたいで、部屋の中が少しざわつき始める。

私が星空に見入っていると、昴さんが隣で少し動いた。

その拍子に私の肩に昴さんの身体がとんと当たる。反射的に、昴さんの方に顔を向けた。

いつの間にか、この暗さにも随分慣れてきていたから、昴さんの表情がうつすらと見える。

「あ、すまん」

昴さんは私の方を見て謝ると、また身体を動かしてぶつからない程度の位置に落ち着いた。

私はまた、空を仰ぎ見る。すると、天井のガラスに、赤い光の点が映った。

「みなさん、これ、見えます？」

森田さんの声に合わせるように、赤い点がガラスに円を描くように動く。

レーザーポインターだ。大学の授業で、先生がときどき使ってるのと同じだ。

「ええ」

「見えますー」

「はい」

口々にみなぎ肯定の言葉を発する。

「じゃあ、今見えてる星の説明をするね。知っていると、また違う楽しみ方もできると思うから」

森田さんはそう言い、ポインタを動かし始めた。

32 星空の鑑賞会 (6)

森田さんの声に呼応して、ポインタが、私たちのよく知ってる星座を囲むように動いた。

次いで、森田さんの声が聞こえてくる。

「あれはすぐわかるよね。オリオン座。ベルトとそれを囲むように四つの星がある。右手に棍棒、左手に毛皮を持っているから、本当はもう少し大きいけどね。」

それと、その左下がおおいぬ座。その左上のこれがこいぬ座。この二匹の犬は、オリオンの猟犬って言われているんだ。

オリオンの右肩のベテルギウスと、おおいぬ座のシリウス、それとこいぬ座のプロキオンを結ぶ三角形が冬の大三角だね」

説明と共に、ポインタが的確に動く。

私はその動きを見ながら、星と星を繋ぐ線を頭の中で描いた。それと一緒に、昔読んだ星座の本を思い出していた。

こんな風に、星を見上げるのって久しぶりだ。最後に見たの、いつだったかなあ。

森田さんは本当に星が好きみたいで、星座にも星の名前にもそれらにまつわる話にも詳しくかった。

「オリオン座のベテルギウスはね、近い将来に超新星爆発を起こすって言われてるんだよ」

森田さんの言葉に、そこそこで「えっ？」という声上がる。

「そうなんスか？」

浅倉さんが尋ねる。河合さんも興味深げに言う。

「そういえば、そんな話、聞いたことあるなあ」

「星自体がここ十五年で十五パーセントも収縮しているっていう観測結果が出ているし、形も変わってきているらしくてね。早ければ二年以内に爆発するだろうって予測している学者もいるんだよ」

そうなんだ。へえ……。

「爆発したら、どうなるんです？」

昂さんが言った。

そうだ。そう言えばそうだ。どうなるんだろう？ 気になる。

森田さんは、ふふふっと笑いながら答えた。

「さあて、どうなるんだろうねえ？ それは僕も知りたいところだね。ちよつと調べたら、いろんな説があったんだよ。爆発して数週間間は夜も明るくなるとか、昼間は太陽が二つあるように見えるとか……」

「へえ」

「この件は、世界中の学者が注目してることは確かだよ。肉眼で確認できるところでの大規模な超新星爆発なんて、生きているうちにお目にかかれる方が奇跡なくらいだからね。僕も楽しみにしているんだ」

森田さんはとっても楽しそうだ。

生きている間に超新星爆発が観測できるかもしれないっていうのは、きつとすごいことなんだと思う。だけど。

うーん、私としては、オリオン座がオリオン座じゃなくなっちゃうのは、ちよつと寂しいかな……。

「親父、星の話してるときは本当に楽しそうだよなあ」

私の右隣から、晴人さんのぼやきが聞こえてきた。

その言い方がなんだかおかしくて、私は声を出さないように気をつけつつ微笑んだ。

晴人さんの声は昂さんにも聞こえたみたいで、昂さんもくすりと笑う。

それと同時に、私が体重を預けるようにして床に付いていた左腕に、トンつと何かが触れた。

多分、昴さんの肩、だと思っただけ。

さっきと同じですぐに離れていくだろうと思った私は、そのままにする。

でも。

……あれ？ 離れない？

気付いてないのかな。

どうしよう、なんだか、落ち着かないんです、けど。

そんな私をよそに、森田さんの説明はなおも途切れることなく続く。

「オリオンの左膝の星はリゲル。そして左手の先にある明るい星がアルデバラン。おうし座の一部だよ。おうし座の隅にぼっと見えるのがプレヤデス星団だね」

「オレの星や」

隣で、昴さんが呟いた。

「え？」

思わず、昴さんの方を向く。

昴さんは、首だけをこちらに向けていた。微笑んでいるのがわかる。

それくらい近くに、つまり私が思っていた以上に近くに昴さんの顔があったのに驚いて、私の身体が強張った。

でも、昴さんは私のそんな状態には気付かなかったみたいだ。

「プレヤデス星団の和名、『すばる』やろ？」

そう言うのと、また星空を仰いだ。

ちよっと、ほっとする。

はあ、ビックリした。心臓に悪い……。

暗がりの中だけど、昴さんの表情がはっきり見えたもの。相当、近かったんだよね？

今さらだけど、頬に熱を感じてくる。

うー。部屋が暗くてよかった。明るかったら、またからかわれち

やうもの。

それにしても、そうだ。そういえば、そうだ。

プレヤデス星団って、すばるだ。

昴さんの名前、もしかして、プレヤデス星団から取ったのかな。

だけど、『オレの星』って。ちよつと言いすぎ、かも……。

昴さんの横顔をちらりと見て、私もまた、視線を夜空へ向けた。

なおも丁寧に説明を続けてくれる森田さんに向けてか、河合さんの声がする。

「大三角の上の二つある明るい星は何ですか？」

「あれはふたご座だよ。それぞれ、カストルとポルクスって言うんだ」

また赤いポインターが動き、二つの星の位置を教えてくれる。

「俺、ふたご座なんだよねー」

右隣から晴人さんの声が聞こえてきた。

「晴人って、何月生まれなん？」

今度は、私を挟んで左側からの声。この関西弁はもちろん昴さんだ。

「六月」

晴人さんの答えに、私は目を丸くする。

星座が見える時期と、誕生星座って、全然関連性がないんだ。ふうん。

「へー。星座が見える月ってわけじゃないのね」

同じことを思ったらしい武田さんの声が聞こえてくる。

森田さんが少し笑って言った。

「誕生星座っていうのは、元々はその人が生まれた時期に『太陽が存在している位置の星座』なんだよ」

「あ、そうなんですか」

「まあ、地球の公転が正確に三百六十五日ってわけじゃないから、

それもだんだんずれてきてしまっているだろうけどね。

ああ、ちょうどふたご座の星も紹介できたし、冬のダイヤモンドを教えておこうか」

森田さんはそう言いながら、またポインタを動かした。

「冬のダイヤモンド？」

「初めて聞きます」

「大三角ほど有名じゃないからねえ。でも、覚えてしまえば見つかるのは簡単だよ。」

おおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオン、ふたご座のポルクスとカストル、ぎょしゃ座のカペラ、おうし座のアルデバラン、オリオン座のリゲル。この七つの星を線で結ぶとダイヤモンドの形になるだろう？」

「あ、ホントだ！」

武田さんが嬉しそうに言った。

そんな風にして、楽しい時間はあっという間に過ぎていく。

その間ずっと、昴さんの肩は、優しく暖かく私に触れたままだった。

33 寝坊の目覚まし (1)

ピピピピ！　ピピピピ！　ピピピピ……

ケータイにセットしていた目覚ましアラームが、今朝もまた鳴り始める。朝が来たんだ。

でも。

うー、眠いよー。もうちょっと寝てたい……。

確実に睡眠不足だ……。

止める人がいないからアラームは相変わらず鳴り続けている。

仕方がなく、私は腕を伸ばしてアラームを止めた。

ふう、ようやく静かになった。

もうちょっと眠ってたいけど、起きなきゃ。遊びに来てるわけじゃない、お仕事しに来てるんだもん。働かなきゃ。

寝返りを打って両手で目を擦る。

昨夜、森田さんのお宅から帰ってきたのは、もう日付を越えてからだだった。その後お風呂に入ってお布団に入ったところまではいいんだけど、それからが大変だった。

なんだかよくわからないんだけど、なかなか寝付けなくて。

すごく綺麗な星空を見たせいで神経が高ぶっちゃったのかな。でも、本当にすごかったんだもん。降って来そうって思うくらい。

ケータイで時間を確認するのを我慢しつつ、何度も何度も寝返りを打って……、気がついたら目覚ましがなっていた。

多分、少しは眠れた、と思う。うん、眠れたはず。そう思い込もう。

私はようやく身体を起こし、お布団から這い出した。

昨日の朝はあんなにひどかった筋肉痛も、少し和らいでる。少しだけだね。

雪の上で身体を使うのが、ちょっとは上手になったのかもしれない。そうだったらいいな。もうちょっと滑らかにスラロームが滑れるようになればいいなって思うから。

昨日の朝の反省を活かして、今日はちゃんとパーカーを着てから洗面所へと向かった。隣の部屋から音がしないところを見ると、昴さんはもう起きているみたいだ。

身支度をして厨房に行くと、もう調理を始めてるマスターと浩美さんがいた。

「おはようございます」

私が声をかけると、二人が私の方を見てにっこりと微笑んでくれた。

「おはよう、雪奈ちゃん」

「おはよう。昨夜眠れた？」

「それが、あんまり……」

私は苦笑いしながらシンクに立って、サラダ用の野菜を水洗いし始めた。冷たい水に一気に目が覚める。

「やっぱりね。森田さんのお家から帰ってきたとき目がキラキラしてたから、あーこれはなかなか寝付けないだろうなって思ってたのだから、起きて来てくれて吃驚しちゃった」

浩美さんはそう言って笑った。

えっと、私、そんな風に思われたのかな？ 確かにここに来てからずっと、すごく楽しませていただいてるけど、一応、アルバイトしに来てるって自覚はあるんだけどな。

「本当にえらいよ、雪奈ちゃんは。昴なんてまだ起きてないもんないえ、昴さん、まだ起きてなかったの？」

隣からまったく音がしなかったから、とっくに起きたんだと思ってた。

確かにいつもならこの時間は厨房で朝食の仕度を手伝ってるけど、いないのは、別のお仕事をしてるからかなあって。

「まったく……。アイツの分の朝食作るの止めるか。働かざる者食うべからずって言うしな」

マスターのぼやきに噴き出しそうになりながらも、手はしつかりと動かし続けた。

冷たいのを我慢して、水の張ったボウルに手を突っ込みながら野菜を洗う。真っ赤になった手でザルに上げて水を切って、食べやすい大きさに切ったらサラダボウルに移す。

そういえば、いつの間にか、朝食のサラダ作りは私のお仕事になってる気がする。

『任せてもらってる』っていう気がして、なんだかちょっと嬉しい。マスターお手製のドレッシングをかけたら、サラダは出来上がりだ。

サラダを作り終えても、昴さんは起きてこなかった。

もしかしたら、身体の具合でも悪くしてるのかな……。まさか、

ね。昨日まではあんなに元気だったもんね。

それでも不安を拭いきれない私に、マスターが苦笑いながら言った。

「雪奈ちゃん、本当に悪いんだけど、昴を起こしてきてくれないかな」

「え？ ええ、いいですけど……」

もうちよつとしたらお客様への給仕を始めなきゃいけないんだけど、いいのかな。

そうは思いながらも、手を拭いて厨房の出口へと向かう。

「悪いね。昴が起きたらすぐ戻ってきてね。あ、なかなか起きないようだったら蹴っ飛ばしてくれていいから」

火のついたコンロの前で、マスターが脚で蹴る真似をする。浩美さんはその隣でくすくす笑っていた。

相変わらず手厳しいなあ。

私は苦笑しながら頷いて、昴さんの部屋へと向かった。

私の使ってる部屋のお隣が、昴さんが寝泊りしている部屋だ。

寝泊りと言うのは本当にそのままで、寝るとき以外、昴さんはペンションのお仕事を手伝っているか雪山にいるかのどちらかしかないって言えるくらいに、あんまり部屋を利用していない。

部屋の前に立つと、私は扉をノックした。

「昴さん、起きてください。朝ですよ？」

予想はしていたけど、中から返事はない。

私はもう一度ノックした。やっぱり返事どころか人の動く気配すらない。

うーん……やっぱり直接起こさなきゃだめかなあ。もちろん蹴り飛ばしたりはしないけど。でも、起きてもらわなきゃ困るし……。

「昴さん」

ずーっとノックしてるのにやっぱり何も反応がない。

ちょっと虚しくなってきた、かも。

「開けちゃいますよー」

私はノブを回して、昴さんの部屋のドアを開けた。

34 寝坊の目覚まし (2)

昴さんの部屋の中はまだ暗かった。とにかくカーテンを開けよう。
「えっと、失礼します……」

小さな声でそう言いながら部屋のに踏み込み、昴さんを踏まないように忍び足で回り込んで窓へとそっと近づく。

その途中で、昴さんを起こしに來たのに何故か音が鳴らないように気をつけている自分に気が付いて、なんだか笑ってしまった。

カーテンをサッと勢いよく開けると、光が部屋に射し込んだ。

「うん……？ な…んや？」

部屋の中央に敷かれた布団の中から、昴さんの寝呆けた掠れ声が聞こえてきた。

私は振り返って、お布団の脇にしゃがみ込んだ。

眉間に皺を寄せる昴さんが、なんだか少し可愛く思えてしまう。

「昴さん、朝です。起きてください」

胸の辺りと思われる付近を叩きながら起こしてみる。

昴さんが薄く目を開けて私を認め、また目を閉じた。

「うー……。何やの……？」

「昴さん、朝です。朝食作るの手伝ってください」

「えー？ まだ朝ちゃうやろ……。もうちよつと……メツチャ眠い……」

「ちよつと、しっかりしてくださいよっ！」

昴さんは頭からお布団を被ってしまった。

もしかして、本当に蹴っ飛ばさないとダメ、かも？

「もーっ！ マスターも浩美さんも、もうとっくに起きてるんですからっ！」

私が布団を揺すりながら大声で言うと、昴さんは布団から顔を出

して私をもう一度見た。

「ん……あれ？　——雪奈？」

「そうです、雪奈ですっ」

息巻く私に対して、昴さんが両手で目を擦って寝起きのぼんやりとした顔ながらにっこりと微笑んだ。

はぁ。ようやく起きてくれたみたい。

「おはようございます」

「おはようさん。なんや、雪奈、オレを襲いに来たんか？」

——ッ！

昴さんの言葉に私は真っ赤になる。

ななな、なんてこと言うんですかつ！

昴さんってばっつ！

もー怒ったっ！

昴さんが私をからかっているのがなんか悔しくて、私は立ち上がると布団を両手で掴んで上へと引っ張った。

「違いますよっ！　マスターに言われてお越しに来たんですっ！　起きないなら、お布団剥いじゃいますっ！」

「わっ、アカン！　ちょお待ち！　わかった、起きるって、起きるさかい！」

何故か途端にものすごく慌て始めた昴さんは、上体を跳ね起こすと必死の形相で私が引っ張る掛け布団を自分の方へと引き戻した。

さすがに私の力なんかじゃ男の人には勝てないから、結局昴さんはコタツに入るみたいな感じでお布団の中に残ってしまう。

仕方なく、私は布団から手を離れた。

一応起きてくれたみたいだし、まさか今から二度寝はしない——よね、多分。

ルームウェアらしいトレーナー姿の昴さんは、珍しく頬が赤くなっている。おまけに私の方を見ようとしない。

なんでだろう？

私が不思議に思っ昴さんを見ていると、昴さんが言いにくそう

に頬を指で掻きながら口を開いた。

「あんな、雪奈。着替えるさかい、先行つといってくれると嬉しいんやけど……」

「……あつ、すみません」

私は口に手を当てて、慌てて昴さんを跳び越えたと厨房へと走った。

「雪奈ちゃん、昴君、ちゃんと起きた？」

厨房に戻ると、浩美さんが私に訊ねてきた。

「え？ ええ、なんとか……」

息を整えつつ答える私を見て、マスターが面白そうに笑う。

「へえ、あの寝覚めの悪いアイツがもう起きたって？」

「そりゃ、大介さんが起こすよりも雪奈ちゃんみたいに可愛い子が起こしに行った方が、昴君も目が覚めるわよ」

「そりゃそうか。じゃあこれから雪奈ちゃんがいる間は、昴を起こす役は雪奈ちゃんに任せるかなあ」

ええっ？ あの大変なのを、またやるの？

あの、えっと、できれば遠慮したいな……なんて思っていることは言えず、私は笑って誤魔化すことにした。

マスターも浩美さんも、そんな私の気持ちをわかっているのかいないのか、顔を見合わせて笑ってるし。

そう言えば、男の子の部屋に入るのって初めてだ。思ってたよりも綺麗だったな。荷物も全然なかったし。まああの部屋は昴さんが普段から使ってる部屋ってわけじゃないんだけど。

ん？ よくよく考えてみたら、男の子の部屋に一人で入るのってもしかしてちよっとキケンだった？

典子ちゃんが言ってた気がする。男はみんな狼なんだから気をつけ過ぎるくらいに気をつけろって。誰彼構わず笑顔振り撒いたり、ちよっと仲良くなったからって部屋に呼んだり行ったりしちゃダメ

だって。雪奈は特に気をつけなさいって。

最後の一言だけは余分だよってそのときは典子ちゃんに言ったけど、私、何の警戒もなく昴さんのお部屋に行っちゃってた……。

うー、やっぱり私、典子ちゃんが言うように、いろいろと自覚が足りないのかなあ？

うーん……。

ううん、そんなことない、はず。うん。そう、そうよ！ だいたい、今朝のはマスターに頼まれたから行ったんだもん。

そうよ。だいたい、マスターもキケンだって思うなら私にそんなこと頼まないはずだし。

それに、相手は昴さんだし。昴さんはとっても優しいもの。

だから、大丈夫。うん。

「何を一人で百面相してるん？」

「すっ、昴さん！」

私が自分を納得させるため一人うんうん頷いていたら、突然昴さんに声をかけられた。

吃驚して、文字通り飛び上がってしまう。

ううう、やっぱり昴さんって、心臓に悪い……。

「おはようさん」

厨房に入ってきた昴さんは、もういつも通りの昴さんだった。

「遅いぞ、昴」

マスターがちよつと厳しく言うと、昴さんはマスターと浩美さんの二人の前まで行って頭を下げて謝った。

それを見た私はちよつと驚く。

そうか。この二人って、叔父と甥であると同時に、（タダ働きとは言え）雇い主と労務者でもあるんだ……。

「ん。じゃあ手伝え」

マスターが言うのと昴さんがすぐに動き始める。

その昴さんにマスターが付け加えた。

「あ、次やったら、また雪奈ちゃんに起こしに行ってもらうからな」

ええっ？ 決定事項なの？

私の頬が引き攣ってしまう。

昴さんは私の方を見ると、両手を顔の前で合わせ声を出さずに「堪忍な」と口を動かしてウィンクした。

35 初心者なりの自覚 (1)

ペンションのお仕事を終えた後、私と昴さんはまたゲレンデへと向かった。

ボードも三日目ともなると随分慣れたもので、今日は昴さんの助けなく全部自分一人で準備できた。うん、なんだかちょっと満足。ペンションからゲレンデまでボードを持ったままでも、随分早く歩けるようになったし。

今日は河合さんたちとは別行動。

ゲレンデで何度か見かけたけど、どっちかがリフトの上だったり、コースが違ってたりとタイミングが合わないままだったんだよね。

昨日は本当に偶然だったんだなって思っちゃう。

昨日がとっても楽しかったから、一緒に滑れなかったのはちょっと残念だけど、でも、河合さんたちはあの四人の仲間で楽しみに来てるんだもんね。

それに、昴さんと二人だけっていうのも変に気を遣わなくてよくて、碎けた楽しさがあるし。

と言うワケで、今日は昨日河合さんに教えてもらってちょっと滑れるようになったスラロームの猛特訓を昴さんに受けました。

「あーホラ、雪奈、顔上げえって。目はオレの方や、オレの方」

昴さんが裏コノハで滑りながら器用に私を先導してくれる。

言われた通りに昴さんの方を見ようとすると顔をちよっと上げなきゃいけないんだけど、まだスラロームに慣れてないから私の視線はついつい真下にあるボードの先の雪を見ちゃう。

今日昴さんに注意されてようやくわかったんだけど、足元を見な

いで滑るのってなんか怖いですっ！

昴さんは昴さんで、そんな私を見て楽しんでいるのか、ずっと笑ってるし。

「ほら、雪奈、こっちやって」

昴さんがまた私を呼んだ。

その弾んだ声がなんだかすごく恨めしくて、私は唇を尖らせながらちよっと睨むみたいにして昴さんの方を見た。

昴さんが声に出して笑う。

「そんなカワエエ顔しても許さへんよ」
うー……。

なんか、悔しい、かも。

私はきゅっと唇を結び直すと、昴さんを睨むように見つめたまま滑るスピードを上げた。

昴さんの表情から一瞬笑みが消え、すぐに楽しむような挑戦的な表情に変わった。

もう少しで追いつけそうだったのに、昴さんも速度を上げたせいでまた追いつけなくなる。

昴さんは裏コノハのままなのに。

そうやって追いかけてっこ(?)をしながらしばらくコースを下って、なだらかな開けた場所に差し掛かったところで昴さんがボードを止めた。

私もその場所まで一気に滑り降りる。

気がついたら、今までに出したことがないくらいのスピードになっていた。

あ、ちよつとヤバイ、かも？

私は膝に力を入れて重心を落としてブレーキをかけた。ターンして雪煙を舞わせながら昴さんの目の前に止まる。

——つもりだったんだけど。

「あっ」

失速し切れていなかったらしく私はバランスを崩した。

そのまま、目の前にいる昴さんに体当たりするみたいにして、私は前のめりに倒れそうになる。

冷たさと痛みを覚悟して、私は咄嗟に目を瞑った。

昴さん、巻き添えごめんなさいっ！

「おっと」

どんっという音がして、身体が止まった。

……あれ？ 転ばなかった？

不思議に思いながらそっと目を開けると、目の前にあったのは、昴さんの腕。私が完全に身体を預けちゃってるのは昴さんの胸だ。

昴さんが、私の身体を抱き止めてくれていた。

ああっ、ごめんなさい昴さん。

私は慌てて身体を起こそうとした。

だけど、ぎゅっと抱きしめるみたいのに、昴さんの腕が私の背中に回されている。すごく優しいのにとっても力強くて、腕も自由に動かせない。

うう、どうしよう。

え、ちよっと待って。

なんか、これって、完全に、だ、だだ、抱きしめられてる……状態、だよな？

うそ——っ！ な、なんか、急にドキドキしてきたんですけどっ！

私と昴さんの今の状態を傍目から見たらって想像したら、きっとすっごく顔が赤くなるんだから、想像しちゃだめよ、雪奈。

とっくに手遅れだけど、私は自分に言い聞かせた。そしてその体勢のままやっとの思いで言葉を紡いだ。

「あ、あの、昴さん。動けない、です……」

「ああ。そりゃ堪忍。大丈夫やった？」

昴さんが私の肩を持って身体を起こしてくれる。

「ええ。ありがとうございます」

「どうってことないで。ちゅうか、役得やな」

昴さんは笑っていたけど、私はますます赤くなるしかない。

そんな私に追い討ちをかけるように、昴さんが言った。

「せやけどな、雪奈。今朝といい今といい、オレを襲いたいっっちゃう気持ちはわかったけど、できれば場所と時間を選んでくれへん？」
なっ……？

も、もうっ、昴さんってば！

周囲の雪が溶けそうなくらい真っ赤になった私の顔を見てけたけたと笑う昴さんを放って、私は一人またリフトの列に向かって斜面を滑り始めた。

同じリフトに乗りながら、昴さんは上機嫌で私の頭をぽんぽんと優しく撫でた。

「ま、たまにはああいうこともあるけど、雪奈、随分上達したやん」
「でも、やっぱり顔上げるのって怖いです。ボードが雪に取られちゃいそうで」

「遠くから先に見とくねん。あの辺でカーブしよ、とか、あそこでターンしよとか」

「難しいです……」

「せやから、オレが先に滑ってるんやんか。そしたら雪奈はオレのこと見つめてたらええだけやろ？」

見つめるって……そんな言い方されると、どうしたらいいのかわかんないじゃないですか。

私が答えられずにいると、昴さんは肩を竦めて頬を指で搔いた。

「今だけやぞ、タダでこんなにオレのこといくらでも見つめられるんは……」

えっ？ 何ですかそれ？

「普段はお金取るってコトですか？」

昴さんに私が聞いてみると、昴さんは悪戯っぽくニヤツと笑った。
うう、またからかわれたのかしら、私。

昴さんから視線を外すと、ちょうど昨日見たハーフパイプが視界

に入った。

昂さんもそれに気付いたらしく、そっちの方へと顔を向ける。

今日は今乗っているリフトで最後にする予定。そろそろペンションに戻って夕方のお仕事をしなくちゃいけない時間。結構ギリギリになっちゃったから、終わったら大急ぎで戻って、マスターと浩美さんのお手伝いをしなくっちゃ。お客様の夕食の準備が間に合わなくなっちゃう。

今日最後の一本かあ……。

うん。よし、決めたっ。

私はやっぱり真剣な表情でハーフパイプを眺める昂さんの横顔を見ながら、にっこりと微笑んだ。

36 初心者なりの自覚 (2)

「昴さん、あっち、行きませんか？」

中級者コースを中腹まで滑り降りたとき、私は言ってみた。

私たちは、コースの隅でちょっと休憩している。私は膝を着いて、昴さんはお尻を着けて。隣同士で。

私が指差す先には、さっき見た、ハーフパイプとジャンプ台のあるところへ行ける林道がある。

「ええけど……」昴さんが顔を曇らせ、言葉を濁した。「あっち行っても、ハーフパイプとジャンプ台があるだけやし、雪奈は面白おもろいよ？」

『雪奈は』って、私だけに限定した言い方に、やっぱり、昴さんはあっちで滑りたいんだって確信した。

「そんなことないです」私は言った。「昴さんが滑るの、見てみたいです」

昴さんは一瞬驚いた顔をして、すぐにクスリと笑った。

「雪奈がそないに言うなら行こか」

「はい」

私は嬉しくなって、笑顔で頷いた。昴さんはまたにこにこしながら私の頭をぽふぽふと叩く。

「せやけどな、オレが滑るん見たら、雪奈、きっとオレに惚れてまうで？」

「え？　なんでですか？」

「なんで？　——オレの滑りが、めっちゃめっちゃカッコええさかいに決まってるやん」

あまりに自信満々に言い切る昴さんに、私は嘖き出した。

「あははは、ちょっ、あはは、昴さん、お腹痛い……」

「あ、笑うたな？　ぜーったいに惚れさせたる！　覚悟しときや！」

昴さんはそう言うのと立ち上がった。そして、さっき私が指差した林道の方へと板を向ける。私もそれに習って、昴さんの後に続いた。

ハーフパイプとジャンプ台の前に着いた。結構たくさんの人が、それぞれのスタート位置に列を作っている。

斜面の上から見ると、リフトから見るとよりもずっと怖いんですけど。

ねえ、昴さん、本当にここを滑るの？

「あー、思ったより混んどるなあ。しゃーない。時間ないし、ジャンプ台だけにしとこ」

昴さんはゴーグルを上げて、私の方を振り返った。

「雪奈は先に下行って待っててんか。ホレ、あっちの脇に迂回コースあるやろ？　ジャンプ台は人の回転が速いさかい、すぐやわ。見逃したらあかんで？」

昴さんが示したのは、ハーフパイプの脇にある通路。さっき通って来た林道と同じくらいの幅だから、私でも楽に滑れる。

「はい」

私は頷いて、先にジャンプ台の着地点の脇へと向かった。

邪魔にならないように隅に寄って、斜面の上の方に身体を向けてから新雪に膝を着く。ゴーグルをしたままじゃ見づらかったから、おでこの上に上げた。

雲ひとつない、高く青い空。

私の下に、斜面に沿って広がる白い大地。

本当に、綺麗。

私は、自分の少し後方にある小高く白い丘を見上げた。

太陽の光がまぶしくて、私は少し、目を細くした。やっぱり、ゴーグルしようかな。

「ねえ、お姉さん、一人？」

しばらく待っていると、目の前に人が来た。

誰かの見学だろうと思った私は、その人の方を確認もせず丘の上を見つめる。

昴さん、未だ来ないな……。

「ねえ、お姉さん。聞こえてる？」

——え？ 私に言ってるの？

ようやく、その目の前の人を見た。あ。『人』だと思ってたけど『人たち』だ。私と同じ歳くらいの男の人が二人。ボーダーさんらしい。私に目線を合わせるように、ボードを着けたまましゃがみこんで私を見ていた。

「え？」

「あ、ようやくこっち見た。ねえ、君、一人？」

え？ えっと、どうしよう……。

「一人なんだったらさ、オレたちと一緒に滑らない？」

「あ、あの……」

「ん？」

私、昴さんを、待ってるんです。

そう言いたいのに、上手く言葉にならなくて。

ちよっとは人見知りなところが治ったのかなって思ってたけど、思い過ぎだったみたい。

答えなきや。ちゃんと、断らなきや。

「行かない？」

男の人の一人がそう言いながら私の方に手を差し出した。

近づいてきた手に、思わずびくんってなる。

そうになった自分にも驚いたし、相手の男の人も驚いた顔をした。そのとき。

「あれ？ 雪奈ちゃん？」

予想外の場所から名前を呼ばれて、私はその声のした方を見た。

ちょうどハーフパイプを滑り降りてきたボーダーさんだ。私たちのいる方にスケーティングで近づきながら、ゴーグルを外した。

「あ……」

晴人さん！

晴人さんは昨夜とまったく同じ人懐っこい笑顔で、私の隣まで来ると、同じように膝を付いた。

「俺の滑り、見てくれたの？」

あ、えっとそう言うわけじゃ……。

嬉しそうにそう言った晴人さんは、私の目の前にいる二人のことなんてまったく見えてないみたいだ。

晴人さんは私が答える前にさらに質問を重ねた。

「って言うか、昂は？　一緒じゃないの？」

「あ、それなら……」

私が晴人さんに説明しようとしたそのとき、どよめきが聞こえて来た。

咄嗟にその方向へ視線を向ける。ジャンプ台の方だ。

真っ白い丘の上から、何かが勢いよく飛び出した。
人だ。

グレーと赤のウェアが見える。

私は息を吞んだ。

わかる。そう、あれは、昂さんだ。

青い空に、空高く舞い上がった昂さんの姿だけが映える。

昂さんと一緒に飛び散った雪が、太陽の光を反射してきらきらと輝く。

昂さんが宙で踊る。

空中で回転し、身体を反らせ、舞い降りてくる。

——その背中に、私は、翼を見た気がした。

目を、奪われる。

心まで、奪われる。

ああ、ごめんなさい、昴さん。私、さっきは大笑いしちゃったけど。

でも私、きつと。

昴さんのこと。

好きに、なっちゃったんだ。

37 初心者なりの自覚 (3)

雪の上にふわりと着地した瞬間、昴さんの翼が消えた。同時に我に返る。

いけない、私、完全に見惚れてた……。

昴さんはそのまま私の方へ真っ直ぐに向かって来た。そして、また、直前で身体をくねらせてブレーキをかける。ふわりと粉雪が舞い上がった。

「お待たせ、雪奈。どうや、ちゃんと見とったか？」そう言って、昴さんはゴーグルを上げた。「ん？　なんやなんや？　雪奈、友達できたんか？」

昴さんが私と晴人さん、そしてその脇に座る男の人たちを目に留めて言った。

そこで私もようやく、さっきこの男の人たちに声をかけられたってことを思い出した。

「あ、あの……」

私が上手く説明できずにいると、男の人たちの方が口を出してくれた。

「あ、俺たちはこの子が一人でなんか寂しそうだったから、声かけただけッス」

「ああ、そーやったんや」

「まあ、知り合いもツレさんも来たみたいだし、俺たちはお行きますわ」

「お姉さん、じゃあね」

男の人たちはそう言うと、私に手を振りながら滑り去って行った。

残された私と昴さん、晴人さんの間に、妙な間が流れた。

その沈黙を破ったのは、普段より幾分か低い昴さんの声。

「晴人も来てたんやな」

「ああ、ツレとな。あっちでハーフパイプやってる。滑り終わったところで、偶然、雪奈ちゃんを見つけたからさ」

そう言いながら、晴人さんは立ち上がった。

昴さんは誰かがジグザクに滑ってるハーフパイプの方を眺めた。

「ああ、そうなん」

「昴もやって行かねえ？」

晴人さんが誘ってくれたけど、昴さんは残念そうに笑いながら首を横に振った。

「面白おもろそうやけど、そろそろペンションに戻らなあかんねん」

「あ、そっか。そろそろ夕食準備か」

「そやねん」

「雪奈ちゃんも……だよね？」

「ええ」

晴人さんってば、なんでそんな当たり前のこと聞くんだろう？

そのとき、晴人さんを呼ぶ声が聞こえてきた。あ、向こうの方に腕を振ってるボーダーさんがいる。あの人が晴人さんのツレさんかな？

「じゃ、俺行くわ。雪奈ちゃん、またね」

晴人さんは滑り去ろうとして、止まった。

「あー……」晴人さんが、首だけ振り返る。「昴、さっきの、すごい技だったな」

「おおきに。かなり気合入れてん」

昴さんがにっこり笑う。晴人さんも少し笑い、去って行った。

晴人さんがいなくなると、昴さんは大きくため息をつき、私と向かい合わせになると膝を着いた。

「なあ、雪奈。聞いてもええか？」

「なんですか？」

——とは言ったものの、「惚れた？」って聞かれたらどうしよう？
ハイ、惚れました。なんて言えないし……。

私がそんなことを考えていると、昴さんが続けた。

「あんな？ 雪奈、今までに彼氏いたことある？」

「えっ？」

ちよっとっ！ なんですか、その質問？！ 何が聞きたいんですか？

ええ、確かに私は今まで彼氏いたことないですよ。

でも、たった今『好きだ』って自覚しちゃった人に、そんなこと聞かれちゃうのって、ちよっとヒドくないですか？ ——って、昴さんに言えないんだけど。

「あー、もおええわ」昴さんが言った。「今の表情でだいたい答えわかったし」

「!？」

もしかして、顔に出た？

うろたえる私を余所に、昴さんは立ち上がり、ゴーグルをかけた。
「ほな雪奈、オレらもそろそろ行こか。急がな、大介兄ちゃんにまた怒られそうや。寝坊した上に遅刻はマズイやろ」

「え？ あ、ええ……」

昴さんが手を差し出してくれる。私もゴーグルを着けると、それを借りて立ち上がった。

「雪奈が先な。こっから一番下までノンストップで行くで！」

「は、ハイ！」

昴さんに促されて、私は滑り始めた。ジャンプ台からゲレンデの一番下までは、緩やかで平坦な斜面が続いている。私がスラロームで滑っても転ばずに済んだ。

下に着くと、すぐにボードを外す。ブーツを緩めて歩きやすくした後、昴さんに教えてもらった通りに、私は設置してあるエアスプレーで板に着いた雪を払った。その後、たくさん転んだせいで身体

に着いた雪をばさばさと払う。
あらかた落ちたところで、板を担いで、ペンションへと歩き始めた。

あれから、昴さんがちつとも話さない。会話はエアスプレーを手渡してくれたときの「はい」っていう一言だけ。前を歩く広い背中が、怒ってるようにも見えた。

私、何かしたかな？

ちよつと考えて、すぐに気持ちが悪えた。

——だめだ。思い当たる節があり過ぎる……。

私は小さくため息をついた。

とにかく、謝ろう。今のままじゃ、なんか気まずいもの。

「あ、あの。昴さん」

昴さんが振り返った。向かい合う。

「ん？ 雪奈、どうかしたん？ あ、歩くん早すぎたんか？」

「いえ、そうじゃなくて。あの、ごめんなさい……」

「は？」

……間。

「はあ？ ちよお待ち。雪奈、何に謝っとんのん？」

「えつと……いろいろ？」

正直に言うと、理由の可能性があり過ぎてよくわかんないけど、なんか謝っておいた方がいい気がする。

昴さんが眉間に皺を寄せた。

「雪奈、謝る理由もわからんのに、謝ったらアカンよ」

昴さんの言葉に、私は俯いた。

「でも、昴さん、怒ってませんか？」

「なんで？」

「なんとなく、そんな気がする」

私の頭に、昴さんの手が置かれた。また、ぽんぽんって、私をあやすように叩く。

「そんなことないで。どっちか言うたら、オレ自身に怒っとる感じがやな」

私は顔を上げた。昴さんが、苦笑している。

「雪奈に免疫がないっっちゃうんは、初めっからわかつとったことやもんな。忘れてたオレが悪いねん」

免疫……？　って何だろう？

そう言えば、大学で恵美ちゃんにも同じようなこと言われた気がする。

よくはわからないけど、多分私には、何か足りないってことなんでしょうな。

「ま、要らん心配せんとき。雪奈は何も悪いことしてへん。せやろ？」

私はきゅっと唇を結んだ。

違うの。そうじゃなくて。私は……昴さんに嫌われたくないんです。

表情が晴れない私を見て、昴さんは心配そうな顔をした。

ほら、また。私、昴さんに迷惑かけてる。心配させたりして。

昴さんはボードの端を雪の上に着け、自分に立てかけた。そして心配そうな表情のまま、私の方へと両腕を伸ばし——私の両頬を指でぶにつて摘んだ。

「——ぷっ！　あはははは、雪奈、めっちゃ変な顔〜！」

「っ!？」

私が驚いて後ずさると、昴さんの指は簡単に外れた。

「あははは。おおきに。ええモン見せてもろたわ」

昴さんはそう言うのと、再びボードを担ぎ上げた。

「ちよっ……昴さん！」

「怒る元気があるんやったら大丈夫やな。さ、行くでー」

昴さんはやりと笑い、またペンションの方へと歩き始めた。

38 大人のパジャマパーティー (1)

お風呂上りの乾かした髪を丁寧にブラッシングしながら、私は姿見に映る自分の姿を確認した。

まだちょっと髪が落ち着かないけど、仕方ないよね。そんなことを考えながら、私はヘアブラシを化粧ポーチの中に片付けた。

夕食の後片付けを終えた直後の、夜の自由時間。

いつもより随分早いお風呂も、下着を着けた上から着ているパジャマも、なんだかとても落ち着かない。だけど、今から過ごす時間のことを考えると、絶対楽しくなるだろうなっていう予感からちよつとドキドキもする。

今から何をするかというところ——話は夕食の時間まで遡る。

夕食と言っても、私や昴さんのじゃなくてお客様方の夕食なんだけど。

私が夕食の給仕をしていたとき、河合さんたちのテーブルの前で呼び止められた。

「あ、雪奈ちゃん」

「はい」

振り返ると、永野さんが窺うように私の方を向いていた。私はてっきり、お箸を落としたとか飲み物が欲しいとかそんな用だと思っただけで、続いた永野さんの言葉はまったく予想してなかったものだった。

「あのね、今夜、私たちでパジャマ・パーティーをしようって言ってるんだけど、雪奈ちゃんも参加しない？」

「え？」

パジャマ・パーティー？

意味がわからずにうろたえる私を見かねたのか、河合さんが優しく微笑みながら言う。

「ただの飲み会だよ。せっかくこうやって泊まりに来てるんだから、いつもとちよっと趣向を変えて、パジャマでやろうかって話になったんだ」

ああ、そういうことかあ。

「昴君も一緒に、どう？」

「えっと、あの……」

せっかくみなさんでいらしてるのに、部外者が入ったりしていいのかな。

そりゃ、河合さんたちと過ごす時間ってとっても楽しいけれど。

それに昴さんの予定もあるし……（いや、昴さんと一緒に過ごせるのはもちろん嬉しいんだけど）。

私がそんな内容のことを言うと、武田さんが悪戯っぽく笑った。

「雪奈ちゃんに参加するって言ったら、夜遊びする妹さんが心配だろうから昴君も来ると思うな」

武田さんはきつと悪気なんてまったくないんだろうけど、えっと、あの、す、好き……だなんて思っちゃった人が自分のことを『妹』としか思っていないって言われたような気がして、胸の奥の方がちくりと痛んだ。

昴さんと相談しますって答えてその場を去った私は、昴さんを探した。

自分の気持ちを自覚しちゃった後も、今までどおり上手く話せるかなってすっごく緊張してたけど、昴さんは（もちろん）今までと同じように接してくれたし、私も自然体で話せたから実は安心してたりする。

昴さんにお誘いを受けたことを告げると、昴さんは指で頬を掻いた。

「へえ、パジャマ・パーティーなあ……。雪奈は参加するん？」

「え？ ええ、そうしようかなって…思ってますけど……」

ちよつと誓約した『初めてのことも挑戦する』っていうのとは違うかもしれないけど、向こうから誘ってくださったわけだし、チャンスがあるなら経験してみたいから。

「ほんなら、オレも一緒に行こかな。心配やし」

——心配、かあ。武田さんの言った通り、私はやっぱり『妹』なのかな。

無然とする私に、昴さんはさらに追い討ちをかけるように言った。

「あーそや。参加するなら、ちゃんとパーカーくらい着いや？」

「いっ、言われなくてもそれくらいわかってますっ！」

昨日の朝のことだってわかった私のふくれっ面を見て、昴さんはお腹を抱えて笑ってくれたのでした……。

そんなわけで、身支度を終えてラウンジに行くと、武田さんと永野さんが出迎えてくれた。

「あ、来た来た」

武田さんが嬉しそうに手招きしてくれる。

ラウンジに敷かれた絨毯の上に二人とも座っている。その前に、トランプの箱が置いてあった。

でも、どう見ても人数が足りない。昴さんも河合さんも浅倉さんもないかった。

おかしいなあ。私がドライアーを使っていたときに、昴さんが先に行くからって声をかけてくれたんだけど。

「あの、昴さん、先にいらしてませんでした？」

私が聞くと、武田さんが意味ありげににんまりと笑った。その表情に気付かなかったらしい永野さんが、隣から答えてくれる。

「ああ、あの三人なら、お酒買いに行ったわよ」

「え？」

あ、そういえば河合さん「飲み会」って言ってたっけ。
私、未成年なんだけど……。

「何カリクエストがあるなら、早めに連絡した方がいいよ」
私の表情に気付いたらしい永野さんが言ってくれる。

そうだ。そういえば、私、昴さんにケータイ番号教えてもらってたんだっけ。

私は二人に招かれるまま絨毯に座り、ケータイを操作した。
電話帳から昴さんの名前を検索して発信のボタンを押す。

ルルルルル、ルルルルル、ルルルルル……

『——はい』

何度かのコールの後、電話の向こうから聞こえてきたのは、昴さんの声じゃなかった。この声は……。

「え？ 河合さん？」

おかしいな、ちゃんと昴さんにかけてたはずなのに。私、電話かける相手間違えたのかな。

『ああ、ごめんね。昴君に運転してもらってるものだから。代わりに僕が取ったんだ。どうしたの？』

あ、そうか。運転してたら、ケータイに出られないもんね。

「あ、あの。もう帰りです？」

『うん。あと十分くらいかな』

あ、遅かったみたい……。仕方ないよね。自分で紅茶とかコーヒー作ってそれをいただこう。

「そうですか。ならいいんです。気をつけて帰ってきてくださいね」
私が電話を切ろうとすると、ケータイの向こうから河合さんの声が聞こえてきた。

『——あ、雪奈さん、ちょっと待って。昴君が……』
昴さんが？

ケータイから河合さんと昴さんのくぐもった声が聞こえてきた。

河合さんが電話の口を押さえて昴さんと何か話してるみたいだ。しばらくして、河合さんがまた電話に出た。

『えっとね、昴君が、雪奈さんの分は桃のジュースと葡萄のジュースでよかったかって聞いてるんだけど』

昴さん、私がまだ誕生日を迎えてないって知ってるんだ。

マスターか浩美さんから聞いたのかも。

何だかとっても暖かい気持ちになって、私は笑顔で頷いた。

好きになると、その人がどんな些細なことでも自分のことを知ってくれてるってわかるだけで、こんなにも嬉しくなるんだ。

学校で秋江ちゃんがよく「あのね、彼がね」って嬉しそうに話してくれてた理由がわかった気がする。

39 大人のパジャマパーティー (2)

戻ってきた昴さんたちがパジャマに着替えてから、パジャマ・パーティーが始まった。

武田さんは紺色の地に白い水玉模様のパジャマ、永野さんのは上が薄いグレーと白のボーダーで下はグレー一色だ。河合さんはチェック柄だし、浅倉さんは黒、昴さんはグレーのスウェット、そして私は薄い桃色のパジャマだ。

パジャマって意外といろんなデザインがあるんだ。

みんなで円になって飲み物や食べ物を広げる。今すぐ飲まない分は、厨房の冷蔵庫の隅っこをお借りして冷やしておいた。

食べ物を入れるお皿と飲み物を入れるコップも、一緒に厨房のものをお借りすることにした。マスターにはあらかじめ断りを入れてあるし、もちろん後でちゃんと洗っておくつもりだ。

「おい、永野」

不意に浅倉さんの声がした。私の隣に居た永野さんが顔を上げ、飛んできた何かを咄嗟に顔の前でキャッチする。何かと思ったら、ポテトチップスの袋だった。

「ちよっと、浅倉！ 危ないじゃない。ジュース零れたらどうするのよ？」

永野さんが怒ったように言っただけで浅倉さんは笑っている。その手にはもう半分ほどになったビールのコップがあった。

この二人、本当にお似合いのカップルに見えるんだけどな。でも、お付き合いしているわけじゃないみたいだし……なんでだろう？ それにしても、浅倉さんって笑うと子供みたいだ。昴さんとい

勝負かも。

私がぼおっとそんなことを考えていたら、武田さんに「これお願い」とトランプを託された。

飲みながらトランプ大会をするらしい。何のゲームするんだろう？ 私、『七並べ』とか『ババ抜き』くらいしかルールを知らないんだけど、大丈夫かな。

「ここ、ええか？」

昴さんが私の返答を待たずに永野さんと反対側の私の隣に座る。そして腕を伸ばすと私の手からトランプをさっと奪った。

「あ……」

一瞬だけ手が触れて、どきっとする。昴さんは気付かなかった……よね？

確認するように昴さんを窺ってみたけど、やっぱり気付いてないみたい。大きな手で、すぐく手際よくトランプを切っている。きつと、私がやるともたまたしちゃうってわかったんだろうな。

昴さんの手付きを感心して見てたら、河合さんに声を掛けられた。

「雪奈さん、『大富豪』ってゲーム知ってる？」

「え？ いえ……。聞いたことはあるんですけど」

「そうかぁ。どうしようかな。口で教えるよりも実際にやりながらの方がわかりやすいよね」

「あー。ほんなら、雪奈が慣れるまでオレとペアでやりましょか？」

困り顔に見えない表情で困ったと言う河合さんに、切り終わったカードを整えながら昴さんが言った。

「それはいい考えだ。それなら雪奈さんも楽しめるしね。雪奈さん、それでいい？」

「えっ？ あ、はい……」

条件反射みたいに答えちゃったけど……。昴さんとペアかぁ。嬉しいような、恥ずかしいような。変に意識しなきゃ大丈夫、だよ、きつと。

昴さんが切り終えたカードをみんなに配っていく。永野さんと武

田さんはカードが手元に飛んでくる度に手に取って眺めているし、浅倉さんと河合さんはビールを片手に何か話していた。

全部配り終わると、昴さんが私を手招きする。

「雪奈がカード持ってたんか」

昴さんはそう言って私にカードを持たせると私の後ろに座り、肩越しにカードを覗き込んでくる。そして私を包むように腕を回してカードの見方とかルールとかを教えてくれた……んだけど、そんな状態で私の頭が正常に働くはずもなく。

「——って感じやねん。わかった？」

ごめんなさい昴さん。全然わかりませんでした。

と言うか、全っ然集中して聞けませんでした……。

だって、身体が、顔が、近いんですってば！ 後ろからぎゅってされてるような、されてないような？ されてませんけどっ！

こんな状態で、私、ゲームできるかしら？ 心配、かも。

——と言う予感の通り、結局私はほとんどゲームに勝てませんでした。

だって、みんな上手すぎるんだもん！ 特に河合さん。あの癒し系の優しい笑顔自体がまんまポーカーフェイスになってるってことに気付いたときは衝撃を受けました。

浅倉さんは表情に出る方だけど手の内を隠すのが上手だし、昴さんは相変わらず掴みどころがないし、武田さんは永野さんとキャッキャしながらも意外と勝負師だし、永野さんは堅実に勝てる勝負しからないし。

ゲームに慣れてないって言ったら負け惜しみになるけど、一番最後に上がった回数は私がダントツ。だけど、すごく楽しかった。『大富豪』を十ゲームくらいプレイして、『セブン・ブリッジ』や『ブラック・ジャック』をやって……数時間は遊んだかなあ。

さすがにずっとやっていると疲れてきちゃうから、今はおしゃべりと飲みで専念中です。

意外にも一番酒豪に見える永野さんがジュースを飲んでる。体質的にアルコールが合わないんだって。人は見かけによらないのね。私はまだアルコール飲めないから、昴さんが買ってきてくれた桃のジュースを飲みながらみんなのお話を聞いている。ボードやお仕事、それにゲームをしてちよつと疲れてるせいかな、少し眠くなってきたかも……。

「雪奈ちゃんは？」

突然話を振られて、私は瞬きした。

え？ えつと、何の話でしたっけ……？

「あ、聞いてなかったな？」 うろたえる私を見て永野さんが笑う。

「ここで住み込みで働くの、誰も反対しなかったの？」

「え？ あ、はい……」

私は反対したんですけど、強引に応募させられました——とは言えないよね、やっぱり。それに、今はここで働くことになって本当に良かったと思ってるんだもの。

「へえ。でも、彼氏とかは？ クリスマスやお正月、一緒に過ごしたいって言ってこなかったの？」

「あ、私、彼氏とかいなくて……」

私が答えると、永野さんと武田さんが驚いたように目を見開いた。

「可愛いのに、もったいない」

「そういえば、浅倉君って彼女いないんじゃないかった？」

武田さんの言葉に、浅倉さんが困惑の表情を浮かべる。

「オレ？ まあいないけど……」

「じゃあ、立候補したら？」

「あ、それいいかもね」

えっ？ ええええええええっ？

ちちちちよつと！ 武田さんっ、何言ってるんですかっ！ 永野さんもそんな簡単に同意しないでくださいよっ！ 河合さんも笑ってないで、何かフォローするとか！

私が慌てて止めようとしたとき、凜とした声が私の隣から聞こえた。

「あかん！」

思わずその声の主を見る。昴さんだ。少し酔っ払ってるのかな、ちよつと顔が赤い気がする。大丈夫かな。

だけど私の心配は、次に続いた昴さんの言葉のせいで完全に掻き消えた。

「オレが立候補するんやから」

——はい？ 昴さん、今、何て？

「だから、浅倉さんは永野さんにしとき！」

「え？ なんで私？」

今度は永野さんが狼狽の声を上げる。狼狽って言うよりも、その発言の意図がまったく理解できませんって表情だけど。

「お二人、お似合いなんやもん」

昴さんの発言に声を上げて笑う河合さんを浅倉さんが睨む。永野さんは「どういうこと？」って武田さんに聞いてるみたいだし。昴さんもそんな二人を見てしてやったりって顔で笑ってる。

そうだよ、別に、さっきの発言に深い意味はないよね。

なんだかホツとするのと同時に、一気に眠気に襲われる。

なんでこんなに眠いんだろう？ えつと……ああ、そうか。そういえば昨夜、あんまり眠れなかったんだっけ。どうりで眠いはずだ。うん。でも、もうちよつと、起きてなきや。寝るのは、布団に、入ってから……

笑い声が充満する賑やかなラウンジで、私はついに瞼を閉じた――

40 〽閑話〽 昴の事情 (1) (前書き)

今回から数話に渡り、昴視点の閑話となります。

40 閑話 昴の事情 (1)

ペンション『ソフトライム』のラウンジは、真夜中だというのに明るい。パジャマ・パーティーは酣を越え、今はまったりとした時間が流れている。

その部屋の中で、昴は笑顔を浮かべて目の前の楽しげな四人を眺めていた。

客として来た社会人の男女四人のグループ。こうやって旅行に来れるほど、性別を超えて仲良くできるというのは純粹に羨ましく、自分も今後そのような同僚に恵まれればいいのと思う。

——とん

突然自分の肩にかかった重さに驚き、昴は隣を見た。

そして、目に入った光景にどきりとする。

そこには、安心しきったように目を閉じる雪奈の顔があったから。雪奈が、座ったまま昴にもたれかかってきていた。どうやら眠ってしまったらしい。

そういえば今朝、浩美さんが「雪奈ちゃん、昨夜はなかなか眠れなかったみたい」って言ってたやんか。氣い使^こてあげなあかんのに。アホやん、オレ。

昴がなんとかしようとしたとき、今このタイミングで一番聞きたくなかった声が聞こえてきた。

「あれ？ 雪奈さん、寝ちゃったの？」

振り向かなくてもわかる。河合の声だ。

「そうみたいなんですわ」

「いろいろと疲れてるんだろうね、きっと」

河合が慈しむような表情で雪奈を見た。途端に、昴の胸のうちにざわざわとしたモノが沸き起こる。

そんなん、言われんでもわこうてる。雪奈が頑張ってるのを一番近くで見てるんは、オレやさかい。

そう胸の内で主張するものの、口や態度には出さないように努めた。

雪奈が河合に惹かれているのは、昴も知っている。

この四人が宿泊客として来たときの雪奈の表情を見たときに、すぐに勘付いた。河合も雪奈のことを好ましく思っているようで、何かと雪奈の世話を焼いているのを目にする。

そのたびに昴は、それを快く思っていない自分を自覚するのだ。

「しゃーない。明日もあるさかい、オレたちはそろそろ上がらせてもらいますわ」

昴はそう言うと、雪奈の肩を抱いて身体を起こして優しく揺すってみた。寝ている雪奈をこのまま運ぶのは昴にとってたいした問題でもないのだが、このメンバーが見ている前でそれをするのが少し躊躇われたのだ。

しかし雪奈は僅かに開いた口から小さな声を漏らすのみで起きる心配がない。

「――起きねえな」

他のメンバーも雪奈が寝てしまったことに気付いたらしく、いつの間にか皆が昴と雪奈に注目していた。

「いいじゃない、もう寝ちゃってるんだし、わざわざ起こさなくてもそのまま連れて行っちゃえば」

いや、ホンマに永野さんの言わはる通りなんやけど……。

昴とて、そうしてもいいならとくにそうしている。何より、この寝顔が皆にさらされていると言う事実が、なんとなく気に喰わない。

嘆息しつつ雪奈を見下ろしていると、真由子の適当な提案が聞こえてきた。

「立候補したんでしょー？ 彼氏候補。だったらお姫様抱っこくらいやってみせなきゃねえ」

そういえば、さっき酔った勢いでそんなことを言ってしまった気もする。すぐに別の話題に移ったから誰も覚えていないと踏んでいたのだが、いやはや、女性の色恋沙汰に関する記憶力は恐ろしい。

顔を上げると、真由子の悪戯っぽい笑顔と河合の挑発的な表情が目に入った。

「僕がやろうか？」

「ええです。オレが運びますさかい」

河合の申し出を昂は間髪を容れずに断ると、自分に身体を預ける雪奈の脇と膝裏に腕を入れて持ち上げた。

腕にかかる重みが想像よりも随分と軽くて驚いたが、それを表情に出さずに立ち上がると昂は皆に「ほな、お先です」と就寝の挨拶をした。

「ドア開けるね」

河合が素早く動いてラウンジの扉を開ける。

昂が雪奈を抱き上げたままラウンジから出ると、何故か河合も一緒にラウンジを出て後手に扉を閉めた。ペンションの建屋とは別棟にある自分たちの部屋に向かって歩き始める昂の後について来る。

「雪奈さん、可愛い子だね」

薄明かりの中、雪奈の寝顔に微笑を向けながら小声で言う河合に、昂は眉間に皺を寄せた。

「しっかりしているようで『妹』みたいに放っておけないところがあるし」

河合が何を言いたいのかわからず、昂は眉間の皺をますます深くする。河合はそんな昂に構わず独りごちるように続けた。

「でも昂君にとって、雪奈さんはあくまでも『妹みたいなもの』であって……」

「なんですの？ 宣戦布告ですか？ それやったら……」

業を煮やして河合を睨み付けた昴の表情が、その直後に呆けたもの変わった。その視線の先では、河合が右手で口を左手で腹を押さえ、くつくつと声を殺して笑っている。本当に可笑しくて堪らないとも言っている。

「やっぱりね。なんか勘違いされてるみたいだけど、僕、カノジョいるから」

河合はそんな昴に手に持っていた携帯電話の待ち受け画面を見せた。

それを見た昴は絶句して危うく雪奈を落としそうになってしまい、慌ててもう一度腕に力を籠めて雪奈を抱き直す。

そこには、河合とその彼女と思しき女性のツーショット写真が映っていた。後ろから河合が彼女を抱き締め、こめかみの辺りにキスしている。彼女はそれを擦ったような表情で受け入れていた。

「ラブラブですやん」

「雪奈さんにもそんなこと言われたよ。」

ああ、僕には妹がいてね。ちょうど雪奈さんや昴君と同じくらいの年齢なんだ。それで放っておけないって言うのかなあ……。とにかく僕はそんな感じだから。昨夜のあの子、晴人君だっけ、彼は本気みたいだけどね。まあ頑張ってる」

河合は携帯電話をしまいながらそう言うと、ほんと昴の背中を叩きラウンジへと戻って行く。

残された昴はしばらく河合の言葉の意味を咀嚼するのに時間を取られていたが、つまり雪奈も河合にカノジョがいると知っているということや、昨日と今日の河合の言動すべてが自分をからかっていたためだとわかると、赤面して大きく息を吐いた。

「――あかん、あんな人、絶対勝てへん……」

そして雪奈をもう一度抱き直すとまた歩き出した。

「あ、お帰り河合君」

河合はラウンジに戻るなり、真由子に声をかけられた。

「何話してたのよ？」

そう問いかける真由子の目が好奇心で輝いているのがわかり、河合はいつもの微笑を顔に湛えた。

「んー……激励、かな？」

「ふーん……」

「え？ 何？ 何の話？」

意味ありげな笑みを浮かべる真由子に反し、香蓮は心底ワケのわかっていない表情で二人を見比べている。真由子はそんな香蓮に抱きついた。

「なんでもないよー。それより、四人になっちゃったけどどうする？ もう一回トランプやろうか。今度はポーカーとか」

きやつきやしながらトランプを手にする真由子とウィスキーのグラスを持って絨毯に座る河合を見ながら、浅倉は「こいつら、性格が悪すぎる……」と引き攣った表情で呟いた。

41 〔閑話〕 昴の事情 (2)

腕の中の心地よい重みを感じながら目的の部屋の前まで来ると、昴は自由の利きにくい手を器用に動かして扉を開けた。そして小奇麗に片付けられた部屋の様子を見て、嘆息する。

「なんや、布団敷いてへんやんか……」

さすがに雪奈を抱き上げたままでは布団を敷くことはできない。かと言ってこのまま気持ちよさそうに眠る雪奈を床に寝かせるのはさすがに憚られた。

昴は入ったばかりの部屋を出て隣の自分の部屋へと入った。戻るとき分には布団を敷く余力が残っていないかもしれないと思い、パジャマ・パーティーの前に先に敷いておいたのだ。

足先で掛け布団を器用に捲ると、躊躇しつつも雪奈をそっと布団の上に横たえる。パーカーを脱がし、布団を首下までかけて、雪奈の部屋へ布団を敷きに戻るために立ち上がろうとした。しかし何故か下に引っ張られてしまい、何事かと視線を下に向ける。雪奈が昴のパジャマの裾を掴んだまま丸くなっていた。

昴は小さく息を漏らし、握り締める雪奈の手をそっと上から握った。そしてなんとか外そうと試みる。

「ん……」

雪奈の口から漏れた声に心臓が大きく鳴る。できるだけその無防備な寝顔を視界に入れないように意識しつつ、昴は雪奈にそっと囁いた。

「雪奈、手、放してくれへん？」

「…さ…ん……」

雪奈が何か言ったのが聞こえてきて、耳を澄ます。

「すば…る…さん……」

その声をはっきりと聞き取った昴は、顔を真っ赤にしてその場にしゃがみこみ頭を抱えた。

「あかんわ、雪奈。そりゃないで……」

昴にとっての雪奈の第一印象は、可愛らしいけど大人しい子、だった。駅で遠くから雪奈を見て、他に同世代の乗客がいなかったからすぐに目的の子だとわかったものの、あまりの消極的そうな雰囲気は何故ペンションの住み込みアルバイトに応募してきたのかと首を傾げたくなった。

大きなトランクを辛うじて持っている両腕と危なっかしい足取り、そして自分を見て一瞬怯えたような瞳。まるで小鹿のように見えて、保護欲を掻き立てられた。

ペンションの仕事は何気に重労働だ。朝は早いし、それなりに体力も要る。客に対する気遣いも必要だ。

初めは心配していたものの、雪奈は物覚えが早く気の利く女性だった。包丁を持たせて危なっかしいということもなく、掃除を任せればちゃんと埃を払い棚の上を拭いてから掃除機をかける。置物がずれていたら直すし、彼女がベッドメイクを行った部屋はシーツに皺一つない。

いつの間にか、雪奈を目で追っている自分がいた。

雪山のよさを知って欲しくて、なんとかボードに誘い出したときも驚かされっぱなしだった。まず、自分の力でいきなり雪の上で立った。あっという間にコノハの基礎をマスターしたことに驚き、楽しそうに雪の上を滑る姿に嬉しさがこみ上げた。

親しくし始めてようやく、雪奈はどうも男性自体に慣れていないようだとわかった。平たく言うと、今までに昴が会ったどんな女性よりも初心だった。試しに必要以上に近づいてみると、まるで林檎のように頬を染め、大きな瞳にうっすらと涙すら浮かべておどおどと昴を見つめる。

そういえば届いた履歴書を大介に見せてもらったときに、女子大に在学中と書かれていた。それまでがどうだったのかは想像しかできないが、きっと雪奈の場合、クラスの男の子とも話すこともなく地味に過ごしてきたのだろう。

慣れない環境で、慣れない仕事の中、文句一つ言わずに雪奈は頑張っている。

言葉は少ないがくるくる変わる表情が堪らなくて、もっと別の表情が見たいと渴望すら覚えた。

——どうやら、雪奈に惹かれているらしい。

なんとなくそう思い始めてはいたものの、まだ出会って間もないのにとその気持ちを否定し続けていたのだが……決定打となったのは、昨夜の出来事だった。

「雪奈ちゃん、展望室、三階なんだ。先に行こうぜ」

そう言いながら雪奈の手を取ってあっという間に目の前からいなくなった晴人の姿を見たとき、その日の朝に着いた宿泊客の河合が雪奈と親しげに話しているのを見たときよりも、もっとどす黒い何かが腹の中でのた打ち回り始めたのを感じた。

そして直後、その気持ちにさらに墨でも注ぐかのように、そっと自分の隣にやってきた河合が昴の肩に手を置いて小声で言ったのだ。

「またもやライバル出現、だね」

「——なんですのん、突然」

「ま、僕はライバルの多い方が、燃えるけどね」

河合は意味ありげに微笑み、晴人と雪奈を追って部屋を出ようとしている森田さんたちの方へと向かった。

雷が落ちたような衝撃に、呆然とする昴を残して。

今から考えると、そのときの河合の言動は、昴の気持ちをわかった上でからかっていたということになるのだが……。

とにかく、二人きりの部屋で、布団の中にいる自分が惹かれている女性に、自分の名を呼ばれながら服を引っ張られるというこのシチュエーションは、今の昴にとってイロイロとまずい状況以外のなにものでもなかった。

抱えていた頭から手を離し、もう一度雪奈の手からパジャマを抜こうと試みる。そのとき、気持ちよさそうな雪奈の寝顔が目に入った。手を止め、指で頬をそつと撫でると薄っすらと微笑んだ気がした。

ふっくらとした唇を少し開いた小さな口元がやけに扇情的に目に映る。

その誘惑に勝てず、昴はいつの間にか瞼を閉じていた。

——そうよ。もともとわかってたわ。

あなたは初めから、私には興味なかったのよ。

あなたにとってはスノーボードが一番なの——

頭の中で響いた声に、昴はハッとして目を開けた。

引き寄せられるように自分の唇を雪奈のそれに近づけようとしていた自分に気付き、慌てて身体を離して壁際に寄る。先ほどまであんなに頑なに自分のパジャマを掴んでいた雪奈の手が、簡単に外れて布団の上に落ちた。

「……あかん、めっちゃ危なかった……」

心臓がものすごく大きな音をたてながら暴れ回っている。その音に雪奈が起きるんじゃないかと思ってしまうくらいだ。

昴は自分の胸を押さえつつ立ち上がって部屋を去ると、雪奈の部屋に入り布団を敷き始めた。

黙々と布団を敷きながら先ほどの声を反芻する。

それは、もう一年近く前に別れた前の彼女の言葉だった。

昴の元カノジョは、同じ大学の女性だった。同じ学科というわけではなくサークルの後輩だったのだが、春の終わりに告白されて付き合い始めた。

夏の間は上手くいっていた。二人でデートもしたし、グループで遊びに行ったりもした。しかし今から思えば、ボードのシーズンに入る頃にはもう既にぎくしゃくし始めていたように思う。

冬にしかできないスポーツを楽しみたかった昴と、雪山に魅力を感じない彼女。毎週末ボードに出かけていた昴が何度か一緒に行こうと誘っても、彼女がそれに応じることは一度もなかった。ボードはやったことがなくて足を引っ張るから、と彼女は言っていたが、自分が教えるからと言っても彼女は頑なに首を縦に振らなかった。

何度かそれが続けていた昴は彼女とボードに行くことを諦め、ボード仲間の友人たちと楽しい時間を過ごすことにした。

そして冬休みにペンションに長期滞在すると告げたときに、彼女に言われたのだ。

「私とスノーボード、どっちが大切なの？」

あまりに次元の違うものを並べられ、昴は驚きのあまり絶句した。何も言わない昴に向かって彼女は続けた。連絡するのはいつも自分からだったから、昴の方から連絡をくれるのをずっと待っていたのだと。

そういえば。ボードのシーズンに入ってから、自分は何度彼女と会っただろうか。何度電話をしただろうか。何度メールを送ったのだろうか。

思い出せないくらい、彼女に対して何もしていなかったということなのだろうか。

自分自身に衝撃を受ける昴に彼女は泣きながら先ほどの言葉をいい、そして去って行ったのだった。

不思議なくらい失恋したという思いはなかった。その点では彼女の言うとおりであったのだろう。

しかし、恋愛することや『カノジョ』という存在を持つことへの躊躇いを昴に植えつけるには十分な出来事だった。

敷き終わった布団に雪奈を移し、昴は立ち上がった。

扉に手をかけ、名残惜しそうにもう一度雪奈を見つめると、昴は音をたてないようにそっと部屋から出た。

自分の布団に入っても、眠気はなかなか訪れてくれなかった。

自分の腕に残る雪奈の柔らかい感触、そしてつい先ほどまで雪奈が寝ていた温もりが残る布団、枕に残るシャンプーの香り、瞼の裏に残る雪奈の安らかな寝顔——そのいずれもが昴を悩ませた。

昴は何度も寝返りを打っていたが、やがて頭から布団を被った。

「ホンマにアホや、オレ……。雪奈に『惚れさせたる』とか言うておいて、オレが惚れ切ってるやん」

真っ暗な闇の中、昴は一人溜め息をついた。

ゲレンデにてできるだけ雪奈の後ろを滑っていたのは、まだボードに慣れていない雪奈に何かあったときにすぐに助けに行けるからだ。雪奈にジャンプしているところが見たいと請われてジャンプ台の列に並んでいるときも、昴は離れた位置からずっと雪奈のことを見守っていた。

ジャンプ台の下でちょこんと座る雪奈をじっと見つめる目に映ったのは、雪奈に話しかけようとしている見知らぬ二人組みの男の姿だった。男の一人が雪奈に手を伸ばそうとして、嫌がったらしい雪奈が身を引いているのが見えた。

なんや、アイツら!?

頭にカッと血が昇り慌てて列から抜けて雪奈の元へ滑り降りようとしたとき、もう一人男が加わった。急激に頭が冷える。

——あれは……晴人か？

既に馴染みとなっていて晴人とは何度か一緒にボードをしたことがあるから、滑り方の癖やウェア、背格好ですぐにわかった。

晴人が側にいるなら、あの二人組みの男が雪奈に何かすることはないだろう。

だが。

雪奈が他の男と一緒にいるというだけで快く思わない自分に呆れてしまう。これが嫉妬というものだろうか。前のカノジョに対しては誰かというと一切そんなこと思いつかなかったのに。

晴人、やっぱり雪奈に惚れたんやろか……。雪奈はどないに思ってるんやろ？

やっぱりすぐに雪奈のところへ行こう、そう思い列を外れようとしたとき、ジャンプ台の自分の番が回って来た。

それやったら……！

『惚れさせる』んは本気混じりの冗談にしても、晴人に牽制するわ！

昴は勢いよくジャンプ台に向けて斜面を下り始めた――。

その後の態度から見て、晴人は昴の雪奈に対する恋心に気が付いただろう。晴人がその程度で諦めるようなタイプではないにしても、自己主張しておくことでライバルに対する牽制にはなる。

でも、たとえ周りを追い払っても、肝心の雪奈が自分をどう思っているかは別の話なのだ。

自分に向けてくれる表情や仕草から、少なからず好意は持ってもらえてると思うのだけど。

それに以前と同じ失敗をまた繰り返してしまうとも限らない。

かといって、スノーボードは今や昴という人間の一部のようなもので、ボードを辞めるという選択肢はあり得なかった。

昂にとってスノーボードはとても大切な趣味で、恋愛とはまったく別の次元にある。

もし雪奈が自分を選んでくれたなら、そしてボードの季節になったら、そのとき雪奈にも前のカノジョと同じことを言われてしまうのではないか。もしそうになったら、立ち直れなくなりそうだった。

ああ、あかん。悪い方向にしか考えが行かへん。ちゅうか、早^はよ寝な。また雪奈に起こされたらかなん。

昂はまた寝返りを打ち、身体を丸くした。

今朝目覚めて、雪奈の気遣いながらの笑顔がすぐ近くにあったとき、まだ夢を見ているのだと思った。そう思い込んでいた割りに、変なことを口走ったりメチャクチャな行動を取らなかった自分を拍手喝采で褒めてあげたいと自分でも思う。

布団を剥ぎ取られそうになったときはさすがに慌てたが。

雪奈は恐らく、男の朝の事情など知らないだろう。否、それに象徴される男のこんな後ろめたい感情など知って欲しくない。

雪奈に向ける自分の笑顔の下にこんな強い独占欲や嫉妬心を隠していることも、できれば知られたくない。名前の通り雪のように真っ白な心のまま、あの笑顔を自分に向けて欲しい。

「あかん、ホンマ、重症や……」

42 〈閑話〉 昴の事情 (3) (後書き)

閑話『昴の事情』は今回で終了です。
次回より、再び雪奈視点へと戻ります。

43 冬空の日（1）

「えっ……また昴さん寝坊してるんですか？」

朝、いつものようにケータイの目覚ましで起きて、身支度をしてから厨房に行き朝の挨拶をした後、マスターから聞いた言葉に私は聞き返した。

私の前には、呆れた顔のマスターと苦笑気味な表情で厨房に立つ浩美さんがいる。

「そうなんだよ。本当に悪いんだけど、今日も起こしてきてもらえる？」

私は引き攣った頬をなんとか笑顔に変えると頷いた。

昨夜はパジャマ・パーティーだった……はず。

うん、あれは夢じゃない。とっても楽しかったもの。

だけど、楽しかったのは覚えてるんだけど、途中から記憶がないのがちょっぴり不安。お酒を飲んだわけじゃないから、途中で眠っちゃっただけだとは思うんだけど。

一昨日の夜、上手く寝付けなかったせいで、睡眠不足だったんだろうな。

トランプゲームの後、みんなでおしゃべりが始まって……急にすっごく眠くなってきちゃったんだけど、みんながとても楽しそうで水を差したくなくて言い出せなかったところまでは覚えてる。

ただ、なんでなのかよくわからないんだけど、朝起きたら何故か自分の部屋の布団の中にいた。

私、布団を敷かずにならうんじに行っちゃったはずなのに……。

多分、私以外の誰かが敷いてくれたんだと思う。多分、と言うか、絶対に昴さんだと思うんだけど。きっと私を部屋まで運んでくれた

のも昴さんだ。

あのままラウンジで寝ちゃってたら、確実に風邪引いてただろうな。それに、運ぶの重かったんじゃないかな。私、普段運動しないからすぐ太っちゃうし。

昴さんを起こしたら、まずお礼を言わなきゃ……。

私は昴さんの部屋の前に着くと、今朝もまた扉をノックしてみた。

「昴さん、おはようございます。起きてます？」

私の声が、母屋の廊下に空しく響いた。

しばらく待ってみるけど、予想通りまったく反応がない。

やっぱりまだ寝てるんだよね……。

昨夜、遅かったのかな？ 私を運んでくれた後、飲み直してたかもしれないよね。何時頃までみんな飲んでたんだろう？

今日も昨日みたいにすぐ起きてくれるといいんだけどな。昨日のマスターの感じだと、昴さんがすんなり起きるのって珍しいみたいだから。

「あの、昴さん。入りますよー？」

一応断りを入れてから扉を開けて部屋の中に入った。

思ったとおり、昴さんはぐっすり眠ってるみたい。

まず部屋の中を明るくしなきゃ。

昨日と同じ要領で、カーテンを勢いよくバツと開けると、外の光が部屋の中に差し込んだ。残念ながら今日はあまり天気がよくないから昨日ほど明るくはないけど、でもこれだけ明るかったら十分寝てる人には眩しいと思う。

——昴さんは、まったく反応しないけど。

私は布団の脇にしゃがむと、布団の上から昴さんを叩きながら声をかけた。

「昴さん、起きてください！ 二日も続けて寝坊しちゃダメですっ！」

ダメだ。何度か叩いてみたけど、まったく反応ナシ。

相当深く眠ってるみたい。

「昴さんってば！」

今度は揺すってみる。振れ幅が小さいと気付いてもらえないかもしれないから、ちょっと大きめに。

これならさすがにわかるかな？

「うー……」

あ、反応した、かも。起きてくれたのかな？

このチャンスは逃しちゃいけない！ 私は大きな声で昴さんに呼びかけた。

「昴さん？ 聞こえてます？ 起きてください！」

「うーん……」

「ちよつとつ、昴さ——きやつ！？」

何が起こったのか、よくわからなかった。

急に何かに引っ張られて、気がついたら今はなんか……薄暗い？ 私、起きてるよね？ 目開いてるよね？

それに、なんだかとても温いし、ふんわりしてるし、私、倒れてるような？

え？ ちよつと待って、ここって布団の中？ なんで？ 起きなきゃ。

よつと……ん？ あれ？ 動けない？ なんか、締め付けられる？

ちよつ、ど、どうなってるの——！！？

「う……ん……」

私焦ってここから抜け出そうともがいていたら、ものすごく近い場所から低い声が聞こえてきた。

あれ？ この声、聞き覚えがある。昴さんと同じ声だ。

それに気が付いて身体の動きを止めると、私を締め付ける力が少し強くなった。

うう。ちょっとだけ、きつい、かも？

ここから出たくて思わず上を見上げると、そこに顔があった。昂さんの。

そしてようやく、今自分の置かれている状況がわかった。

どうも起こそうとする私を昂さんがうるさがって、音源（つまり私）ごと布団の中に引きずり込んだ…みた…い…？

——え？ えええええええええええ！？

ちよっ、まっ、え？ ええ————っ！？

こっ、これは明らかに、マズイ、よね？

自覚してしまったせいで、心臓が狂ったようにバクバク鳴り始めた。身体も異常に熱を帯びて頬が熱い。

とっ、とにかく離れなきゃ！

身を振ってなんとか昂さんの腕から逃れようともがく。

それなのに、私を抑え込むように昂さんの腕の力がさらに強くなる。

肺を潰された私の口から、ふっと息が漏れた。

「す、昂さん、苦し……」

堪えきれなくて訴えてみたけど、その声は掠れていて自分でも情けないくらい全然音にならなかった。

ど、どうしよう？

「ん……」

昂さんが小さく声を出したのと同時に、腕の力が少しだけ緩んだ。あっ、ちよっただけど腕が動かせる。

私は必死になって昂さんの胸をぐいぐいと押した。

「昂さんっ、お願い、起きてっ！」

何度も呼びかけているうちに、掠れていた声がだんだんしっかし出て来るようになってきた。

そのおかげもあってか、焦っていた気持ちが落ち着いてくる。

うん、昴さんは寝てるんだし、そんな危険はない、なはず。変なことも起こらない、はず。状況を考えると、死ぬほど恥ずかしいけどっ！

「——もうっ！」

「うっ……」

昴さんは好きな人とこんな状況になっちゃってる私の考えなんてまったく知りもしないんだけど、それで当たり前なんだけど、あまりに反応がないからちよつとムカツと来て拳で叩いてみたとき、昴さんが呻いた。

44 冬空の日 (2)

よ、よかった！ もう少しで起きてくれるかも？

私は「ごめんなさいっ」と心の中で謝りつつ、もう一回だけ結構強い力で昴さんの胸を叩いてみた。

「昴さんってばっ!!」

「ぐっ…っ痛。う…：…な、なんや…：…？」

あっ、やっと起きてくれたかな？

「あの、昴さん」

私が呼びかけると、もぞもぞ動いていた昴さんの動きが止まった。と言うよりも、固まった。

布団の中から、こっちを向いていない昴さんの顔をじっと見つめていると、昴さんがまさに『恐る恐る』という言葉がぴったりなゆっくりした動きで私の方を覗き見る。

「えっと…：…あの、おはようございます」

挨拶した私の視線を捕らえた昴さんの目が真ん丸に見開かれた直後、昴さんは私を突き放して布団から飛び出すと、壁にガンツと後頭部を打ち付けるまで後退った。

だ、大丈夫かな？ 今、かなり大きな音がしたけど…：…。

ようやく開放された私が、布団から這い出して服の皺を払いながら昴さんの方に手を伸ばそうとすると、昴さんは片手で頭を押さえ、もう片手で私を制しながらしどろもどろになって口を開いた。

「ゆ、雪奈？ え？ なっ、なんで？ こんなトコいるん!？」
「なんでって…：…。」

「マスターに頼まれて、昴さんを起こしに来たんですけど…：…」

「いや、そうじゃのーて！ なんで布団の中にいたん？」

「それは、昴さんに引っ張られて…：…」

記憶が曖昧だけど、それで合ってるよね？ うーん。曖昧と言うか、あつという間でよくわからなかったって感じだけど。

まあ、昴さんも完全に寝てみたいだし、覚えてなくて当たり前だと思うんだけど……。

どう説明したらわかってもらえるかと考えていたら、昴さんの眩きが聞こえてきた。

「うわ、サイアクや……」

え？ 最悪って……どういう意味？

昴さんの顔を窺うと、心なしか血の気の失せてる気がする。

泳いでいた目が私を捉えると、昴さんは言った。

「オレ、雪奈に何もしてへんよね？」

「何も？」

って何だろう？

引っ張られたっていうのは昴さんの言う『何も』の内に入るのかな。

私が答えられずにいると、昴さんは落ち着きなく手や視線を動かしながら続けた。

「え？ あ、せやから……ホラ、な？ アレや、アレ」

昴さんは最後に「わかるやろ？」と付け足すと、私の視線から逃れるように顔を背けつつもしきりにこちらを気にする素振りをする。

何か、言葉に出しにくいこと？ だよね。

もしかして……。

冷静さをまったく欠いた昴さんを見ているうちに、ようやく昴さんの言う『アレ』の内容がなんとなく想像できてくる。みんなに鈍いって言われる私だけど、一応、保健の授業はちゃんと真面目に受けてたから。

つまり。えっと、男女の……ごによごによ……のことだよね？

——って言うか、朝っぱらから何考えてるんですか！？

昴さんの不潔ッ！！

「おっ、教えませんっ！」

私はがぼつと立ち上がると、昴さんに背を向けて部屋を出て行くとした。

だけど手首を掴まれて振り返る。昴さんが膝をついたまま私を捕まえていた。

「ち、ちよお待ち、雪奈。ホンマ教えて」

すぐるようにそう言った昴さんを見た瞬間、私の胸の辺りがずんと重くなった。身体が一瞬でぼつと熱くなって、次いで急激に冷えていく。

そんなに、イヤ、なのかな。

私と『何か』あるなんて、考えられないってことかな。

昴さんにとっての私は、アルバイトの同僚さんっていうだけで、それ以上の感情はないってことなんだね。

私はふつと笑った。

「……そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。何もされてませんから。そりゃ、まあ、驚きましたけど、でも、大丈夫です」

「ほんま、ごめんな。オレ、完全に寝ぼけててん」

「だから、大丈夫ですってば」

「ほな、許してくれるん？」

「許すって……」

そういう問題なのかな？　って思ったけど、昴さんはものすごく真剣だ。

「雪奈がそう言ってくれな、安心でけへん」

「じゃあ、『許してあげます』」

「ほんまに？」

「ええ、本当です」

私は頷くと、まだ掴まれていた手をそつと解いて昴さんから一歩離れた。

「じゃあ、先に行ってますから、早く厨房の方に来てくださいね」

私はそう言い残すと、逃げるように昴さんの部屋を出た。

厨房へと廊下を歩いていたら、大きな溜め息が出た。

わかつてはいたし、期待もしてなかったけど、やっぱり昴さんにとってはおくまで私は『妹』なんだって思い知らされた気がして。

初恋は実らないって言うけど、もう失恋してるようなもの、かも。ただ好きっただけで、恋にもなってなかった気がするけど。

視界が僅かに滲んだのに気が付いて、慌ててぺちぺちと自分の両頬を叩く。

ダメよ、雪奈。笑顔でいるって自分で決めたんでしょ？

ペンションに来る前に自分自身に誓約立てたじゃない。これくらいでへこんでどうするの。

「大丈夫」

自分を勇気付けようと言い聞かせるように呟く。

「がんばれるよね」

うん、と一つ頷く。

そうよ、アルバイトと自分の気持ちは関係ないもの。そんなことでお仕事に影響が出ないようにしなきゃ。

そうだ、お客様の朝ご飯作るの手伝わなきゃ。

昨日よりも昴さんを起こすのに時間かかったから、きっとマスターも浩美さんも大忙しになってるはずだ。浩美さんは身体も大事にしなきゃいけないのに。

急いで戻らなきゃ。

私は足音を立てないように気を付けつつ、厨房へと向かう足を小走りへと変えた。

45 冬空の日 (3)

昴さんが厨房へとやって来たのは、もうほとんど朝食の準備が終わる頃だった。マスターがそんな昴さんを厳しく叱り、昴さんは悄^し気^{よげ}た様子で大人しくそれを聞いていた。

どうも、二日連続での寝坊は初めてだったみたい。

そのせいなのかわからないけど、昴さんはその後もずっと元気がない気がする。

今はもうもうすぐ各部屋の掃除とかベッドメイクが終わる頃だっというのに、口数が少ない。その上、なんか遠い目をしていたり小さく溜め息をついていたり。いつもならこのくらいの時間帯になると、もうすぐゲレンデに行けるって浮き足立ってるのに。

大丈夫かな……。

玄関の掃除をしているとき、エントランスを通った昴さんに思い切って声をかけてみた。

「昴さん」

昴さんが立ち止まってなんだか覇気のない表情で振り返る。

本当に、どうしちゃったんだろう？

昴さんが私の方に寄って来てくれた。

私は掃除のために玄関の下に、昴さんは一段高いエントランスにいるから、もともとの背丈差もあってかなり見上げる形になる。

「あの、今日もこの後ゲレンデ行きますよね？ 一緒に行きませんか？」

昴さんは一瞬だけ驚いた顔をしたけど、すぐにいつも私に見せてくれていたニツという笑顔になった。

「もちろん、行くつもりやで。雪奈から誘ってくれたん、初めてや

な」

え：つと、あれ？　そうだったかな？

あんまり意識してなかったけど、そう言われると確かにそう、かも。

思い出せなくて私が首をかしげていると、一瞬だけ昴さんの腕が上がりかけた――ように見えた。でも、結局ポケットの中に手を入れただけ。

いつもみたいに、頭をぼんぼんってされるのかと思ったけど、違ったみたい。それにしても不自然な動きだったような気がするけど、きつと気のせいね。

「ほな、オレも仕事さっさと終わらすわ。大介兄ちゃんのトコにいるさかい、そっち終わったら呼んでんか」

「ええ、わかりました」

「あ、そや。今日はお天道さん^{てんと}出てへんさかいいつもよりもずっとずっと寒い^{あつた}で。暖かい格好しときや」

昴さんはそう言う^うと、腕を上げてひらひらと振りながら「ほな後で」とペンションの奥の方へと行ってしまった。

ボードには行くつもり満々だったみたいだし、やっぱりいつもと変わらない昴さんのようにも思えるなあ。

元気がないって思ったのは、私の思い過ごしかなあ。そうだといんだけどな。

＊ ＊ ＊

それにしても、今日は本っ当に寒い。

初めてここに来た日はかなり寒いって思ったけど、いつの間にかすっかり慣れてたのに。雪国って暖房設備がしっかりしてるから、むしろ屋内にいる分には下宿してるマンションにいるときよりも快

適なんだもの。

だけどゲレンデに出てみたら、今日は今までと全然違うの。

昴さんに寒いよって言われてたから、今日はいつもよりも一枚厚着してるし、ウェアの隙間から冷気が入ってこないようにネックウオーマーも捲いてるんだけど、それでも顔に当たる空気が冷たい。太陽が出てないって言っても薄曇りっただけで雪が降ってるわけでもないのに。こんなに違うもの？

「そんだけお天道さんてんとがスゴイっちゅーこっちや」

二人リフトに乗って山頂を目指しているとき、昴さんが当たり前だとばかりに言った。

昴さんが頭上へとかざす手の先に、薄い雲に隠れた太陽が白く丸く浮いている。

「地球からめっちゃ遠おて、あんな小ちっこうしか見えへんのに、あの光で地球の半分が明るく暖あつたこうなるんやさかいなあ。今かて曇ってんのに、電気要らんほど明るいやろ？」

「ええ、そうですね」

確かにその通りだっと思えたから頷いたけど、私にはそう言ってる昴さんが、太陽みたいに明るく輝いて見えるんだけどな。

昴さんが私の世界を明るく照らしてくれてるおかげで、今まで見えてなかった楽しいことや嬉しいことがいっぱい見えてきてるんだけどな。

恥ずかしいから、そんなこと言えないけど。

ぼおっと昴さんを見ていたら、私の視線に気が付いたのか昴さんが私の方を見る。その表情をちょっと困ったように歪ませた直後、昴さんは私のウェアのフードに手を伸ばすと私の頭に被せてきた。

「ふわっ！？　ちょ、何するんですか！」

突然前が見えなくなった私は、慌てて被せられたばかりのフードを跳ね上げると、けらけらと笑っている昴さんを軽く睨んでみせた。

「変な目えでオレの方見てる雪奈が悪いねん」

「変って、普通に昴さんのこと見ただけじゃないですか」

「ちゃうねん。ほれ、今の目えは変ちゃうもん」

「それは睨んでるからですっ！　睨んでるよりも変な目ってどんな目ですか？」

「何っちゅうんやろ……。うーん、ちょっかい出したなるような目？」

「何ですかそれ！」

本当にもうっ！

頬を膨らませると昴さんはますます笑う。

昴さんが、いつものように私を宥めるかのように頭をぽんぽんと撫でる。

ずるい。それされると、不思議と怒っていらなくなっちゃう。ずっと思ってたことだけど、やっぱり昴さんってば私をからかって楽しんでるよね？

よく考えてみたら、いつつも同じパターンなんだもの。

だけどちよっとホッとしてる自分もいる。今朝、なんだかちよつと気まずくなっちゃった空気がなくなってるように感じたから。

「雪奈、もうちよつとで上に着くさかいセーフティー・バー上げるで」

昴さんの言葉に驚いて周りを見渡す。

あれ？　いつの間に頂上まで来てたんだろう？

昴さんという時間経つのが早いなあ。こんなじゃ私、あつという間におばあちゃんになっちゃいそう。

「リフト降りたら右のコースな」

バーを上げてくれた昴さんがそう言ってにっと笑う。私は頷くとリフトの上で身体を少し斜めにして降りやすい体勢をとる。

ボードの裏で雪山の感触を確認してから立ち上がると、そのまま右ヘカーブしながらスケーティングでコースの隅に寄った。

昴さんと隣に並んで座り、板を脚に固定する。

締まり具合をみながらビンディングをいじっていたら、急に目の前が真っ暗になった。

46 冬空の日 (4)

「えっ？」

何？ 何？？

パニックになりかけたとき、目の辺りを何かが柔らかく押さえているのに気が付いて、ようやく誰かに手で目隠しされたんだってわかった。

それにしても、誰？ 昴さんはすぐ隣にいたはずだし。

「だーれだ？」

ちやうど背後から可愛らしい女性の声が聞こえてくる。

この声は……

「武田さん、ですか？」

私が答えると視界を覆っていた手が離れて行き、眩しい光が目差し込む。

「惜しいっ！」

という声で私が振り向くと、そこにいたのはにこにこ笑っている永野さんだった。その後ろから武田さんもひょこんと顔を出している。

「あ、それはずるいです」

目隠ししてたのは永野さんなのに、声を出したのは武田さんとか、ずるいっ。

私が抗議の目を向けると、永野さんが相変わらず笑いながら昴さんみたいに私の頭をぽんぽんと撫でた。

「そんな不貞腐れないの。可愛い顔が台無しよ？」

「そうそう」

二人にそう言われると、なんだか自分が怒るのが間違ってるかもって思えちゃうから変な気分だ。

「こないに人多いの、よお見つけはりましたね」

ボードを装着し終えた昴さんが後ろを振り返りながら言う。

確かに山頂のロッジ前だし、リフトの終点だし、人がたくさんいる中でちょうど私たちを見つけてすごい確率かも。

「ああ、本当にたまたまよ？ そのロッジで早めのお昼食べて出てきたら、ちょうど昴君と雪奈ちゃんがリフトから降りて来るのが見えたから『これはチャンスでしょっ！』って思ってた」

永野さん。チャンスって、私へのイタズラのことですか。

ついしょっぱい顔をしちゃう私とは対照的に、昴さんは楽しそうに笑った。

「そりゃ確かにチャンスやわ」

昴さんまでっ！

私の溜め息なんてお構いなしで、昴さんは永野さんや武田さんの会話を続けている。

「それはそうと、他のお二人はどないはったんです？」

「あ、それならあそこ」

武田さんが指差す方向にはもちろん、河合さんと浅倉さんがいる。コースの入り口でもうすっかり準備が整ってるみたいだ。イタズラが成功して喜んでる女性二人を、呆れの混じった笑顔で眺めていた。

「ねえ、せっかく会えたんだし、今日も一緒に滑らない？」

突然の武田さんの申し出にちよっと驚いた。

一緒に滑れたらきつと今日みたいな曇りの日でもとっても楽しくなるだろうけど、みなさんは明日の朝にチェックアウトされるはずなのに。友人水入らずって言うか、仲間内だけで滑りたいか思わないのかな。

そつと隣の昴さんを見上げて様子を窺ってみると、ちょうど昴さんも私の方を見てたみたいでバッチリと目が合う。

ただどすぐに昴さんは「えっと……」と言いながら武田さんたちの方に視線を戻した。

「オレらは別に、前みたいに早めに上がらせてもらわなあかんって

以外は全然構いませんけど……でも、ええんですか？ 会社休んでまでここに来はったんやし、みなさんだけで滑りたいんとちゃいます？」

氣遣うように昴さんが言ったけど、言われた永野さんはあっけらかんと答えた。

「いのよ。私たちはいつも一緒にいるんだし。ねえ、真由子？」

「そうそう。それに、せっかく仲良くなったんだし、みんなで滑った方が楽しいじゃない」

武田さんも頷く。

結局、武田さんと永野さんの勢いに負けて、私たちは今日も一緒に滑らせていただくことにした。

初めて武田さんたちに会ったのって確か一昨日だったと思うんだけど、もうずっと前からの知り合いみたい。

みなさんとっても優しく話しやすいし、私の人見知りも全然出^{でもないけど}てないし。

知り合って間もない人と一緒にいるときは、いつもだったら緊張して声も出せないのにな。

なんでだろう？

多分、二日前とは違って私もスラロームできるようになってるから、みなさんのペースを乱してるんかなっていう引け目をほとんど意識せずに済んでるっていうのもあると思うんだけど、それ以上に私が昴さんに影響されてるからっていうこともあると思う。

太陽みたいな昴さんの光を受けて、私もお月様みたいに明るくなれてるのかな。

だから、空はだんだんとどんより曇ってきたけど、それに反比例するみたいにすごく楽しく滑った。

「みんなだいてんか！ 危ないで！」

斜面の途中、昴さんの声に振り向いてみたら、ボードの上にしゃ

がんだままの昴さんが喜色満面の表情で私たちの間をすり抜けて低く飛ぶ弾丸みたいに斜面を滑り降りて行った。

え？ 何あの滑り方！？

「目線が低いとスピードって速く感じるんだよね」

いつもの微笑を浮かべた河合さんが、昴さんの後姿を眺めながらのんびりと言う。

「へえ、楽しそう」

「オレもやろ」

すぐに浅倉さんや永野さんが昴さんの真似をしたフォームになると、その後を追うようにして滑り降りて行く。

私はただ啞然とその様子を見ていた。

何て言うか……二人とも、子供？ 本当に社会人さん？

「まったくもー、本当に二人ともやんちゃなんだから。香蓮も黙って座ってれば美人なんだから、もうちょっとおしとやかにしてればいいのに」

武田さんが呆れたように言った。

でも武田さんも河合さんも顔は笑ってるから、楽しんでるんだってわかった。

なんとなくだけど、あの二人はいつもこんな調子なのかなって想像できるし。

スラロームで三人の後を追って滑り始めた武田さんに続いて、私もボードを傾ける。あの滑り方は真似できないけど（どうやって止まるのかわからないし）、こうやって滑ってるだけで十分楽しい。

楽しんでいる人と一緒にいると、それだけで気分が上向いて楽しくなるものだよね。

大学でもそうだもの。典子ちゃんや恵美ちゃんと一緒にいると、それだけで楽しいし、自然と笑顔になれる。

私も、自分と一緒に過ごしてくれる人にそう思ってもらえるようになりたいな。

こうやって、昂さんや河合さんたちと滑ってるのがとっても楽しくて。

だから私は、この後にあんなことが起こるだなんて夢にも思っ
てなかったの――

47 冬空の日 (5)

「くしゅん！」

リフトの上、昴さんと隣同士で座りながら話していると、くしゃみが出た。

「雪奈、寒いんか？」

「寒くはないんですけど……。ちよつと身体が冷えちゃった、かな」
そう答えて初めて、周りの空気が随分冷えてきてることに気が付いた。だから、リフトに乗ってる間に身体が冷えちゃうんだ、きつと。

でも、おかしいなあ。いつもはこんな風にならないんだけど。やっぱり太陽が出てないせいかな。

そういえば、今日って何本滑ったんだっけ？ みんなで滑ってた時間経つのなんてあつという間だからあんまり覚えてないんだけど、もう随分長いこと滑ってる気がする。

今、何時なんだろう？

そう思ってケータイで時間を確認したら、もう夕方の時刻だった。って、え？ もうそんな時間？ そろそろペンションに戻って夕食の準備しないと。

「昴さん、そろそろ時間です」

そう言いながら、昴さんにケータイの待ち受け画面に映る時計を見せると、昴さんは「お？」と小さく声を漏らした。

「もおそんな時間なんか」

「ええ。そろそろ帰らないとですね」

「そやな。これ以上遅刻できひんさかいなあ……。ほんなら、このリフトが最後やな。上に着いたら、先上がらせてもらうって言わなな」

昂さんは一瞬驚いた顔を見せたものの、すぐに帰ると決めてにっこり微笑んだ。

ペアリフトは、永野さんと武田さんを先頭に、次に河合さんと浅倉さんが乗っている。私たちのリフトは一番最後だった。

だから私たちがリフトを降りる頃には、河合さんたちはもう板を履くために隅の方に寄っていた。でも誰も雪の上に座ったりせずに、輪になって立ってる。四人で何か相談してるのかな。

リフトを降りた私たちが河合さんたちの方に近付いていくと、それに気付いた浅倉さんが隣に立っていた河合さんを肘で小突いた。他の人たちがその意味を察してか私たちの方を振り向く。

四人が一斉にこっちを見たから、私はなんか焦ってしまった。

「お待たせですー」

昂さんはそんな視線なんてもものともせずにスケーティングで進んでいく。

あっ、待ってっ。置いて行かないでくださいよっ！

ますます焦りながら、私も昂さんの後続いた。

「あのね、そろそろちょっと休憩入れようかと思って」河合さんが言った。「お昼食べた後、ずーっと滑り通しだから。昂君と雪奈さんはどうする？」

「あ、ホンマですか。一緒に休みたいところやけど、そろそろペンションに戻らなあかん時間なんですわ」

「あ、そうか」

「せやから、オレと雪奈はこのままペンションまで帰りますわ」

昂さんが小さく頭を下げたのに続いて、私も真似っこする。

「りょうかい」

「じゃあ、僕はロッジに行こうか」

「そうだな」

「二人とも今夜も美味しい夕食をお願いねー」

「はい」

「それじゃ、また後で」

四人が山頂のロッジの方へとスケータィングで去っていく。殿しんがりの武田さんが途中で私たちの方を振り返って、いたずらっぽくウィンクしながら手を振り、少し離れてしまった三人を追いかけていった。

「ほな、行こか」

「はい」

私たちはその場に座り込むと板を足に固定し始めた。

山頂から一番下まではコース上の距離で三千メートルくらいあるらしい。

いつもは一気に頂上まで登ってから中腹まで降りて、そこからまた頂上へのリフトに乗って、を繰り返してるからそこまで長い距離を滑ることはないんだよね。

だけど、このラスト一本だけは一番下まで降りるから、その三千メートル分を滑り降りなきゃいけないのね。高低差はきっとそこま
でないんだろけど、距離があるからそれなりに時間はかかるワケで。そして、ラスト一本というときだから、実はもう体力を結構消耗した後なワケで。

だから、途中何回も休み休み進まないといけなかったりする。

きつと昴さん一人ならノンストップで行けるんだろなあ。私といるからこまめに休憩を取ってくれてるだけで、一人なら半分くらい
の時間で……ううん、滑るスピードも速くなるだろうから、もつと短い時間でペンションまで戻れるはずだもの。

はあ、やっぱりダメだな、私。昴さんに迷惑ばかりかけちゃってる。

滑りながら、ちょっとだけ自己嫌悪に陥る。

そんな私の気持ちを敏感に感じ取ったみたいに、ついに雪がハラハラと舞い始めた。風も強くなってきた気がする。

コースをしばらく下ったところで、昴さんが私をさっと追い越して少し下のコースの隅で止まった。ちょっと休もうって言ってるん

だ。私もその後が続く。

「降って来おったなあ」

昴さんがゴーグルを上げて空を仰いだ。私もそれに倣って見上げる。いつの間にか空は雲が落ちてきそうなくらいに、どんよりとしていた。

降ってきた雪が目に入りそうになって思わずびくりと動くと、昴さんが隣で笑う。

もうっ！ ちょっとびくりしただけじゃないですか。

私は昴さんを軽く睨んでみたけど、昴さんはいつもみたい私の頭をぽんぽんと撫でた。

「堪忍。今の驚いたリスみたいで可愛かったさかい」

リス！？ 『妹』はまだ人間だったのに、今度は動物？

ちよつとシヨック、かも。

「ま、それよりも、こりゃ雪がひどおなる前に下に着かなな」

そう言って私の方を向いてニツと笑った昴さんに、私は何か違和感を覚えた。

なんだろう？

——あ、わかった。隈だ。昴さん、目の下にうつすらと隈ができてるんだ。ずっとゴーグルしてたから気付かなかった。

昨夜、そんなに遅くまで飲んだのかな。今朝も寝坊してたけど……。

「行けそうか？」

私は昴さんの寝不足が心配だったけど、ゴーグルを着ける昴さんを見たら頷くしかない。

「雪が降ってるときは視界が悪うなるさかい、ゆっくりでええよ」

もう一度頷いて進み始めた私は、それから十分も経たない間にその言葉の意味を身を持って実感することになった。

48 冬空の日 (6)

ううう、どうしよう。

本当に前がよく見えないよ……。

さつき昂さんが『視界が悪くなる』って言ってたけど、本当にそうだ。ちよつと風と雪が強くなるだけで、こんなになるなんて思ってもみなかった。

自然ってやっぱすごい。

——って、そんな感心してる場合じゃないんだけど。

あれからいくばくも行かないうちに、急激に風が強くなって雪の勢いも増してきた。

今の視界はざっくり言って十五メートルくらい、かな。

ゴーグルをしないととても前を向いていられないんだけど、そうするとただでさえ暗めの視界がさらに暗くなる。視界が暗いと、コースとコース脇に盛られた雪との区別がつきにくくなるから、どう進めばいいのかわからなくなる。

人の流れがあるから、どう進めばいいのかは一応わかるんだけど。でも、ただでさえよく見えないっていうのに障害は他にもあって、降り積もる雪が邪魔して上手く滑れないの。新雪っていうワケじゃないんだけど、それに近い感じの雪って言うのかな。

私の脇をスイスイ追い越していくボーダーさんや、ストックを使って上手に前に進んでるスキーヤーさんが、正直羨ましい。

私を抜いていく人たちの背中が、雲とも雪ともつかない灰色の霧の向こうにすうっと消えていく。

その度にこの雪山にたった一人になっちゃうんじゃないかって言う不安が一瞬だけ頭を過ぎるんだけど、すぐ後ろにいる昂さんがと

きどき「雪奈、ゆっくりでええよ」とか「大丈夫か？ 無理せんときゃ」とか声をかけてくれるから安心できる。でも、一人だったら絶対に耐えられないと思う。

ああ、ペンションの暖かいラウンジが恋しいなあ……。
帰り着いたら、一番にホットココア飲もう。

それにしても、不思議なくらいにどっちを向いても向かい風。
だぶだぶしたデザインのウェアを着て前に進もうとしてるんだから、空気抵抗も発生するし、当たり前と言えば当たり前だけど、その風の力がいつもよりも段違いに強い気がする。

そんなことを考えていたら、ターンのときにバランスを崩した。
「ふわっ!？」

うー……ええい!

両腕を広げて体を捻らせて、なんとか転ばずに持ち堪えながらカーブを曲がり切る。

「雪奈、大丈夫か？」

すぐに後ろから昴さんの声が聞こえてきた。

私はスピードを落としながら後ろをちょっと振り返って手を振ってみせる。

「はい、大丈夫ですー!」

とは言ったものの、膝に力が入りにくくなってる気がする。気付かないうちに、かなり疲れてきてるみたい。

確かに、ここ数日はペンションのお客様も多くて、個人的なイベントもたくさんあって、楽しいけど忙しい日々だったもんね。今更ながら、知らず知らずの内にここ数日の間で溜まっていた疲労を実感する。

さっき休んでからしばらく滑ってるし、そろそろちょっと休憩した方がいい、かも。

私は辺りを見回した。

いつの間にか、見えるところから人がいなくなってる。

少なくとも河合さんたちはまだ上にいるだろうし、他にも降りてくる人たちはいるはずなのに。ちょうど人の波の狭間なんだろうな。それでも、いつ人が降りて来るかわからないだし、休憩するならコースの真ん中じゃなくて隅っこに寄らなきゃね。

私はちょうど視界に入ったまだ若そうな木の方へとボードの先を向けた。

木に近づくにつれて、雪がふかふかになってくるのがわかる。

晴れてたら、倒れこみたいくらいにふかふかだ。ばふっ！　って、気持ち良いんだろうなあ……。

「雪奈あかん、そっちは——」

突然昴さんの声が聞こえてきて、私は振り返ろうとした。

でも完全に振り返る前に、柔らかな雪に埋もれた私の足元が沈み始める。

——え？

イケナイって思ったときはもう遅かった。

ちょうど振り返りきった私の眼に、私の方へ飛び込んでくる昴さんの姿が目に入る。

伸ばされた手が私を掴むのとほぼ同時に、私の身体は崩落した雪の中へと飲み込まれた。

「きゃああああああ！！」

何がなんだかわからない。

冷たいとか、寒いとか、何も感じない。

わかるのは、ただ一つ。

落下してるってことだけ。

そして、ぼすっ！　という柔らかい音と共に墜落した。

……。

何が、起こったの、かな。

目を開くと、雪に塗れている分厚い手袋に覆われた自分の手が見えた。

指を動かしてみる。あ、動いた。

よかった。生きてる……。

特に痛いところもないし、怪我もない、かな。

ほっとしながら上体を起こすと、自分の上に降り積もっていた雪が両脇に滑り落ちていった。下半身はまだ雪の中に埋まっちゃってる。それでもまったく重さを感じないから、動かそうと思えば動かせるはず。

どのくらいの高さから落ちたんだろう？

多分、あつという間の出来事だったんだと思うんだけど、私にはものすごく長い時間に感じられたせいで、距離感って言うか高低差の感覚がまったくわからない。

そう、それに、昴さんは？

そう思ったとき、座り込んだ状態だった私の真下の地面（雪面？）が蠢いた。

え？ まだ落ちるの！？

はっとして下を見る。

だけど、その視界に入ったのは、思っても見なかった光景だった。

「ふう、なんとか助かったみたいやな」

倒れた状態の昴さんが、私の下で半分雪に埋もれている。私は、昴さんのお腹の上辺りに座っていた。

「堪忍、雪奈。オレも一緒に落ちててもーた」

昴さんはそう言うのと、私に向かって苦笑いした。

49 冬空の日（7）

「すっ、昴さん、大丈夫ですかっ!？」

私は慌てて昴さんの上から身体をずらすと、雪の上に膝をついて昴さんを覗き見る。

昴さんが私を庇ってくれたんだ。

だから、落ちても痛くなかったんだ。

「あ、あの、すみませんっ! ……ありがとう、ございます」

上半身を起こした昴さんに向かって慌てて頭を下げる。昴さんは声を出して笑いながら私の頭をぽんぽんって撫でた。

「ええって。お礼も謝罪も要らんよ」

「でも……」

「こんくらい、どうってことない。もっとひどい転び方何度もしてるさかいな」

顔を上げた私に昴さんは優しく笑いかけてくれ、そしてふるふると頭を振った。

身体や頭に着いていた雪がはらはらと落ちる。帽子の上に、新しい雪が、ふわりふわりと舞い落ちる。

そこでようやく、私は雪の降る量が少し落ち着いていることに気が付いた。風もあるけど、さっきほどひどくは感じない。

「あー……見事に雪塗れまみやなあ。雪だるまになった気分やわ」

頭を振るだけじゃ落としきれなかった雪を手で払いながら、昴さんが言った。

そうだ、私も払わなきゃ。雪が付いたまま放っておくと身体が冷えちゃう。

私も昴さん同じように雪を身体から払い落としながら、周りを見回した。

どうもここは、ちょっとした谷の底みたい。春になると小川がで
きるようなところなのかもしれない。

一面真っ白な中、ところどころ木の幹の一部が積もった雪の間か
ら覗いている。

すぐ脇にも木があった。さっき私が寄ろうとした木だ。実はかな
り大きな木で、私には上の方しか見えていなかったんだってわかっ
た。

その木を下から辿るようにして自分たちが落ちてきたはずの上の
方を仰ぎ見る。

真下に落ちたように感じたけど、実際には傾斜の急な坂を転げ落
ちたっただけだったんだ。

落ちてきたところまでは、五メートルあるかないくらいかな？
転げ落ちたあとを辿った頂上の雪がこそげ落ちてる箇所まで、思
ってたよりも高さはなかった。

だけど、這い登れるかって言ったら、答えは考えなくても「無理」
だと思う。

まず、斜面が急すぎるし、歩こうにも斜面に積もった雪が深くて
歩けないと思うし。

だからって、いつまでもここにいるわけに行かないよね。

ペンションに戻らなくちゃ。

この谷底に沿って進めば麓に着くまでのどこかでコースと合流で
きると思うんだけど……。

とにかくまず立ち上がろうと膝に力を入れて――前につんのめる。
そうだ、忘れてた！ ボード履いたままだったんだ。

「わっ!？」

手をついたから顔面から転ぶことはなかったものの、新雪に思っ
たよりも深く手が沈んで鼻の頭が雪に着いてしまった。

「雪奈、大丈夫か？」

昴さんの本当に心配そうな声が聞こえてきて、慌てて起き上がった。

照れ笑いしながら昴さんの方を見ると、なんだか焦ったてるみたいな硬い表情をしてる。

「へ、平気です。ちよつと吃驚したけど」

私は、これ以上昴さんを心配させないようにそう言った。

それにしても、雪がこんなに深いなんて思わなかった。それに、やわらかい。コースの雪とは随分違うみたい。

多分そのせいだと思うんだけど、足に固定されたボードのせいですごく動きにくい。とにかく、外しちゃおう。

身体を反転させて雪の上に座ると、脚を持ち上げてボードを埋もれた雪から引き上げる。そして膝を曲げてビンディングを引き寄せると、両手で一気に緩めて足を抜き取った。勝手に滑って行っちゃったり、また雪の中に埋もれちゃったりしないように、ボードを縦に持って立ち上がる。

板を雪に刺すように衝いて固定してから、昴さんの方を振り替えると――昴さんはまださっきと同じ硬い表情のままだ。まだ半分雪に埋もれた状態の脚を眺めている。

昴さん、ちよつと変、かも。さっき上半身を起こしてから全然動かない。ボードを外そうともしないし、立ち上がりもしない。私がさっきから無遠慮に見詰めてるのに、それにすら気が付いてないみたいだし。

昴さんっていつも笑ってばかりでそんな表情を見せるのは初めてだったから、私にはなんだか知らない人みたいに思えた。

なんか、変だ。

「――昴さん？」

私が声をかけると、昴さんはハッとしたように私の方を見、いつもの笑顔を見せた。

「昴さんこそ、大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、ホッとしてぼおっとしてたわ。オレもボード取るか

な」

そう言っただけ、昂さんは手を後ろについて膝を曲げ――顔をしかめた。口の端から小さな声が漏れる。

「昂さん？」

昂さんは何も言わない。動かない。

私は咄嗟に昂さんの足下にしゃがみ込むと、その上にかかっている雪を払い始めた。

昂さんが動かないのは、今のせいで脚を怪我をしたんだって、直感的にわかったから。動かないんじゃない、動けないんだ。

「ほんまゴメン……」

昂さんの声の調子で、直感が確信に変わる。

「どこか具合が悪いんですよね？　なんですぐに言ってくれないんですか！」

「今の今まで、ホンマに大丈夫やと思っててん……」

急に重くなった気持ちを払い除けるみたいに、私は半ば怒りながら、雪に埋もれた昂さんの脚を掘り起こす。

平気な顔して怪我のことを言ってくれなかった昂さんに対してよりも、すぐにその考えに思い至らなかった自分に対して、無性に腹が立った。

ちよつと考えたらわかりそうなものののに。

両足が固定された状態で私を庇うようにして転げ落ちたんだもの、いくら雪の上だとはいえ怪我してない方がおかしいじゃない。

両脚とボードを掘り起こすと、まずビンディングに手をかけて昂さんの脚を動かさないように注意しながら足を板から外す。

「ふう」

ようやく昂さんの両脚が自由になる。

振り返ると、昂さんが右脚を曲げて左脚を伸ばしたまま立ち上がろうとしているのが見えたから、私は慌ててそれを止めた。

「ちよつ、昂さん！　動いちゃダメですってば！」

「せやけど、いつまでもこんなトコにいれへんやろ？　帰らなかん

さかい」

「そうですけど、闇雲に動いてもダメです。ちょっと落ち着いて考えなきゃ。その脚でこの雪の中を歩くのは無謀ですってば。ね？」
私はなんとか立ち上がった昴さんの肩を支え、とりあえず近くの木の幹に背を凭せ掛けて座らせた。

でも。

さっき昴さんには偉そうなこと言ったものの……どうしよう？
どうしたらいいんだろう？

50 冬空の日 (8)

昴さんは両脚を投げ出すようにして座っている脚を曲げて木の根元に座っている。

さっき立ち上がりそうとしていたときに左脚を庇うようにしてたのを思い出して、私は聞いてみた。

「左脚ですか？」

「そやねん。多分、ただの捻挫やとは思うんやけど。骨折まではしてへんはずやさかい、まったく歩けへんこともないで」

そう昴さんは明るく言っただけど、万が一ってこともある。変に動かしちゃって取り返しの付かないことになったら嫌だもの。昴さんが歩かなくても済む方法を考えなくちゃ。

えっと……そうだ。とにかくまず、マスターに連絡しよう。

昴さんが怪我したってことを伝えなくちゃいけないし、今動けないって言ったらどうしたらいいか教えてくれるはずだ。それに、もしわかるようならグレンデの救急隊の連絡先を教えてもらいたいし。思いついたら即実行。迷ってる暇はない。

胸のポケットからケータイを取り出す。電池は十分あるし電波も一応二本立ってるから、問題なくかかるはず。マスターのケータイを聞いておけばよかったって後悔しながら、ペンションの固定電話をダイヤルした。

何回かのコール音の後、女性の声が聞こえてくる。浩美さんだ！

「お電話ありがとうございます。ペンションソフトライムです」

「もしもし？ 浩美さんですか？」

「え？ ……あ、雪奈ちゃん？ どうしたの？」

「あの、今グレンデで、昴さんが大変で……」

ああ、上手く伝えられない。なんでこう、私って話すのが下手な

んだろう？

昴さんが私を庇って怪我しちゃったんです。その上、私のせいでコースから外れちゃって動けないんです。

そう伝えたいだけなのに、頭の中がぐちゃぐちゃになる。

ダメだよ、雪奈。落ち着いて。そうしないとちゃんと伝わらない。

「す——く——が？ 何か——たの？」

え？ 浩美さんの声がなんか遠い……？

確認しようと思って耳元から離れたケータイを見る。

今の今まで光っていたケータイの液晶画面が、私の目の前で、真っ黒になった。

電源ボタンを押してみても反応がない。

——嘘、電池切れ？ なんで？

まだ充電あったよね？ ちゃんと確認したよ？

パニックになる私の耳に、昴さんの声が届いた。

「雪奈、どないしたん？」

「ケータイが……」

「ひょっとして、電池切れか？」

涙をこらえて、私は昴さんの方を向いて頷いた。

「オレもや」

昴さんの手には、やはり液晶画面が真っ暗になったケータイが握られている。

「なんで……？ 充電、ちゃんとしたのに」

いつもなら、夜中に充電したら次の日の寝る時間になってもまだ余裕で電池残ってるはずなのに。

「今日、寒いさかいなあ。気温が低いと、導電率が悪うなんねん。せやから、充電は残っててもケータイの中で電気が回らんようになって、電源が落ちたりするんやな」

そう教えてくれながら、昴さんが私を手招きする。側によると、私の手を取った。

「ホンマ、堪忍な。こんなことになってしもて……」

謝る昴さんに首を振る。

違います。昴さんは悪くないです。もとはと言えば、私が落ちそうになっちゃったことが原因じゃないですか。昴さんはそれを庇ってくれただけじゃないですか。なのに、何で昴さんが謝るんですか。目の前が滲む。溢れそうになった熱い涙が、吹き付けた風に一気に冷やされた。おかげで我に返った私は、また雪が降り始めているのを見た。

少し収まっていた風も、また強くなっている気がする。

落ち込んでる場合じゃない。がんばらなきゃ。

こんなところで泣いても、何も変わらない。むしろ昴さんを困らせるだけだ。

冷静に。考えるのよ、雪奈。

——そうだ、まず、今わかってることをまとめよう。

私たちがコースを外れたこと。天気が悪いこと。だから滑っている人が私たちを見つけてくれる確率は低いこと。そして、昴さんが動けないこと。

一瞬だけ、私一人で麓まで歩いて助けを呼びに行こうかとも思っただけど、この天気じゃ迷うかもしれないと思って提案するのをやめた。

どちらにしても、私たちが帰らなかったらマスターが動くはずだ。最後の一本を滑る直前まで河合さんたちと一緒にいたんだし、頂上から下に降りる最短コースは一つしかないから、私たちが滑ったコースも推定できるはず。探す場所が絞れれば、私たちの発見も早くなる。

だから、私たちは見つけてくれるまでがんばればいいんだ。

私は放ってあった私と昴さん二人分のボードを拾い集めて、昴さんのすぐ脇、風上側に二つ並べて雪に刺し立てた。

これでちょっとは風と雪を防げるはずだ。

ボードとは反対側の昴さんの隣に座ると、昴さんが訝しげな表情を向けた。

「雪奈？」

「気温が低いと導電率が落ちるってことは、暖めたら一時的にでも繋がるかもしれないってことですよね？」

私はできるだけ元気な声で昴さんに尋ねた。昴さんが頷いたのを見て、ケータイを今度はウェアの内側にあるポケットに入れる。外ポケットに入れておくよりも、内ポケットに入れておく方が暖まるはずだから。

「この雪の中、私たちが帰らなかったら絶対にマスターが心配して助けてくれるはずですから、それまでがんばりましょ？」

私が笑いかけると、昴さんもようやくふっと肩の力を抜いて優しいな笑顔を向けた。

「雪奈、強いんやなあ」

頭をぽんぽんと撫でてくれる昴さんに、心の中だけで返事をする。全然強くないですよ、私。昴さんの隣にいるから、強くなるうっと思えるんです。昴さんの太陽みたいなパワーを、私もちよつとだけ分けてもらってるだけなんです。だから、強いのは私じゃなくて、昴さんなんですよ。

そして、そんな昴さんだから、私は好きになっちゃったんです。頭の上にあった昴さんの手が、私の肩を抱くようにして降りてきた。びっくりして身体がこわばる。

「雪奈、こっち」

空いている方の手で昴さんがぽんぽんと示したのは、自身の腿の上だった。

ん？

「ホレ、ここに座り」

え？ ええええっ！？

ここって、昴さんの上じゃないですか！！

「そんなとこ座ってたらあかんよ。お尻冷えるさかい」

絶句している私に昴さんは容赦なく言い、私を引っ張り上げようとする。

「えっ、いや、でも」

「『でも』ちゃう。それに、ひつついてた方が暖かいあったやろ？」

有無を言わせぬ物言いに、私は仕方なく昴さんの膝の上にちよこんと座った。背筋を伸ばして、できるだけ昴さんの負担にならないように――っていう気遣いは無駄に終わった。

「ふえっ!？」

昴さんの両腕が私を包むと、一気に抱き寄せられる。私は抵抗もできないまま、気が付いたら昴さんの胸の中にいた。

51 冬空の日（9）

え？　へ？　ちょ、う、うわあああああ——！？
な、なななな、なんでこうなってるの？

私、氷像並に、完全に、硬直。

って言うか、昴さんの両腕に身体がしっかりと抱かれているせいで、身動きできないんですけどっ！

パニックになっていて私の頭に昴さんの片方の手が触れたと思った途端、胸元に押し付けるように引き寄せられた。

心臓が跳ね上がり、自分の顔が真っ赤になったのが自分でもわかった。すごく恥ずかしい。恥ずかしくて、上手く思考がまとまらない。余計に焦る。

「あ、あの、昴さん？」

動けないんです、けどっ！

って言うか、死ぬ！　心臓壊れて死ぬ！！

私が焦ってるのは絶対にわかってるはずなのに、昴さんは全然反応してくれない。それどころか、ようやく発した言葉は。

「雪奈、うるさい。ちょお黙ってじっとしとき」

いやいやいやいや、うるさいとかじゃないですから。

当然の反応ですから。

え？　私、間違ってる？

「ほら、こうしてた方が暖かいあったやろ？」

——って、ソコですか？

確かに、昴さんの言うとおりで暖かいですけどっ！　いや、むしろ

顔から火が出てそうですけどっ！？

私が逃れようと身じろぎすると、昴さんはさらにぎゅっと腕に力を入れて私の帽子に顔を埋めた。うず

ああああ……ダメ、もう死ぬ。

なにがなんだかよくわからなくなって目を瞑ると、昴さんの息遣いが、鼓動が、はつきりと耳に届くようになる。

それを聞きながら、この状況にデジャヴを感じた。

ああ、そうだ。今朝昴さんを起こしに行ったときだ。あのときも、こうして昴さんに包まれたんだっけ。

あのときの昴さんの言葉を思い出したら、だんだん気持ちが落ちていく。

冷静に、今の状況を分析できるようになる。

そうだ、私の感覚と、昴さんの感覚は違うんだ。昴さんは本当にただ暖を取るためにこうしてるだけだもの。

「――る……」

昴さんの掠れた声が聞こえてきた。

え？ 何？ 何て言ったの？

聞き返した私に、昴さんがさっきよりもはっきりとした声で答えてくれた。

「雪奈、ええ匂いする……」

「なっ、何言ってるんですかッ!!」

冷静になったつもりだったのに、これ以上赤くなれないって思ってたのに、自分の身体に見事に裏切られた。熱くなりすぎたせいで視界が滲む。

きつと今鏡を見たら、私、茹で蛸に勝てると思う。

「だって、ホンマのことやもん」

昴さんはそう言いながらも私を閉じ込めたままだ。

「シャ、シャンプーは、昴さんと一緒ですよ？」

しどろもどろになって言ってみただけ、昴さんは「ん、知ってる」って言っただけ。

でも私、香水とか付けてないし、今日はヘアスタイリング剤だっけ付けてない。

「そういうのんとかちゃうねん」

昴さんがそう言い、それきり、なんか会話がなくなってしまった。

聞こえてくるのは、風の音と昴さんの鼓動だけ。

目を開けても、見えるのは雪の白さだけ。

——なんだか時間の感覚がなくなりそうだ。

河合さんたちは、上手くペンションに帰れたかな……。

ここに落ちてからもものすごく長い時間経ってる気がするけど、実際はまだせいぜい二十分くらいな気がする。

実際に、どれくらい経ったのかな？

完全にケータイに頼っていたから、時計も持っていない。これからちゃんと腕時計する癖をつけよう。

風で煽られた髪を手で耳にかける。

手が顔に触れたはずなのに、感覚があんまりないや。

多分、顔に当たる雪が体温で溶けて、その水が風で冷えて凍って、軽いしもやけみたいになってるんだろうな。

だけど身体の芯は暖かい。

確かに一人ひとりで座ってるよりもこうしてくっついてる方が断然暖かいって思う。私、冷え症だし。

昴さんが言っていたとおりだ。

昴さんにそれを伝えようと顔を上げたとき、昴さんの腕から力が抜けたように思えた。

締め付けられていた腕が緩んだせいか、なんだか心許なくなる。

「……昴さん？」

呼びかけてみた。だけど、反応がない。
どうしたの、かな？

「昴さん？」

「ん……？」

もう一回呼んでみると、なんだか朦朧とした声でようやく返事が聞こえてきた。

その声の感じから、なんだ、寝てたのかって思う。

——え、寝てる？ この吹雪の中で？ それってまずいんじゃないの？

私は慌てて昴さんのウェアを掴むと揺すった。

「ちよっ、昴さん！ 起きてください。寝ちゃダメです」

私が揺らすのに合わせて、頭がぐらぐらと動く。

それなのに、一生懸命起こそうとしてるのに、昴さんはなかなか覚醒してくれない。

眠そうな声で「ん、わかってる」って言うけど、全然わかってないですよ！

映画やドラマで、ビバークの中「寝るな、死ぬぞ！」って主人公が仲間に向かって叫んでるシーンが鮮明に思い出される。

あんなのテレビの向こうの出来事だと思ってたのに、まさか、それが自分の身に起こるなんて——

「昴さんってばっ！！」

大声で言いながら突き放すみたいに昴さんの胸を押して立ち上がる。

温もりが消えて、吹き付ける風に身体が一気に冷えた。

そうなってようやく、私は昴さんがどんな状態になっていたのか目の当たりにした。

昴さんは身体の風上側ほとんど全部に雪を被っていた。ボードを立てて壁を作っておいたから何も無いよりはましなんだろうけど、でもこんなに覆われてたんじゃ効果なんてないに等しい。

私は風下に顔を向けて昴さんの脚をベンチみたいにして座っていたから、わからなかった。背中側にあったし、昴さんがぎゅってしてて身動きできなくて見えなかった。

ううん、多分違う。昴さんは、私に見せないようにしてたんだと思う。

私を雪や風から庇ってくれてたんだと思う。

昴さんは目を開けない。

木の幹にも垂れたまま、脚を伸ばして座ってるだけ。私が立ち上がったせいで解けた腕が、力なく雪の上に落ちていた。

52 冬空の日 (10)

一番考えたくない言葉が、頭を過よぎる。

——嘘……ですよね？

嫌ですよ、こんなところで。

死ぬ、とか。

悪い冗談ですよ？

冗談ならすぐやめてくださいよ、ただでさえ大変なときなのに。すぐにいつもみたい「驚いたやろ」って笑いながら起き上がってくださいよね？

……。

——ねえ、昴さんってば。

ゴキブリ並みの生命力じゃなかったんですか？

マスターにそう言われてたじゃないですか。

こんな吹雪くらい、笑い飛ばしてくださいよ。

「昴さんってば！！」

言いながら、昴さんに掛かる雪を手で払い始める。

そうしていないと、不安で、怖くて、辛くて。

後から後から雪が降るけど、そうせずにはいられなかった。

「起きて、くださいよ……ッ！」

目を閉じたままの昴さんに堪らなくなった私が頬をぺちぺちと叩いても何度も呼びかけても、昴さんからの反応は相変わらず薄い。

「昴さんっ！！ こんなところで寝ちゃダメです！一緒に、ペンションに戻るんですから！」

自分自身をも励ますためにも声に出していいながら、雪に突き刺していたボードを、昴さんのすぐ隣にもう一度立て直した。

そして昴さんがこれ以上冷えないように、上から覆い被さるよう
にして頭を抱く。

ああ、神様……お願いします。

もしいらっしやるなら、私たちのことを見てくださっているなら、
どうか、昴さんを助けてください。

お願いします。

お願いします。

お願いします――



空耳、かな。

風の間に、聞き覚えのある音色が聞こえてくる。少し前に放送し
てたドラマの主題歌。私がケータイの着信音に設定してる曲だ。



まだ聞こえる。私ってば、こんなときに。ケータイだなんて……。
――ケータイ？

弾かれたように身体が動いた。ウェアの内ポケットからケータイ
を取り出す。温まったケータイが私に誰かからの着信を告げていた。
河合さんだ……！！

夢中でケータイを耳に当てると、いつもの落ち着いた声が聞こえ
てくる。

「あ、ようやく繋がった。もしもし？」

「河合さ……ッ！」

我慢してたのに、知ってる人の声を聞くだけで涙が出てくる。視界が滲む。

胸が詰まって声が出なくなる。私の中から出て来れなくなった言葉が、泣きしゃっくりに替わった。

「雪奈さん、どうしたの？ 泣いてるの？」

「か、河合さ……どうし……。す、昴さんが……死んじゃう……！」
涙が止まらない。

だって怖いもん。怖いんだもん。

昴さんが死んじゃうかもしれないって考えるだけで、怖くて死にそうになるんだもん。

河合さんは驚いたのか一瞬だけ黙ったけど、すぐに優しく声を掛けてくれた。

「雪奈さん、落ち着いて。今どこにいるの？」

「ゲレンデ、です」

なんとか息を整えて伝える。

そうだ、泣いてる場合じゃない。

あまり時間はないはずだ。ケータイを外に出してるから、冷えてまた繋がらなくなっちゃうかもしれない。

「コースから……落ちちゃったんです、私。それを、昴さんが庇って……くれて……」

「昴君、怪我してるの？ 出血してる？」

「外傷は……ないみたい……。でも、脚を傷めた、みたいで、動けない、ん、です」

また込み上げそうになる涙を我慢する。

私がしっかりしなきゃ。二人とも助からない。

「昴君に替われる？」

「それが……昴さん、さっきから意識が……」

言葉に出そうとして、吹雪とは違う寒さに襲われた。

嘘、私、膝まで震えてる。

河合さんは私の気持ちを察してくれたのか、それ以上昴さんのことを尋ねようとしなかった。

私が河合さんに聞かれて、落ちる直前まで滑っていたコースの名前を告げると、河合さんは真剣な声で言ってくれた。

「みんなで探してるんだ。マスターも一緒だよ。すぐ行くから、それまでがんばって。電話はこのまま切らないでいいから」

「でも……」

きつと、すぐ、電源が切れちゃう。

もう耳に触れるケータイが冷たいもの。

「うん、わかってる。でも、君は今少しでも長い時間、誰かと話してなきゃいけない」

その言葉に、昴さんを抱く片手に力が籠もる。

私が心細くならないように気遣ってくれてるんだ。

電話の向こうで、河合さんは移動してるみたいだったけれど、河合さんはそのままずっと私に話しかけてくれた。

本当に心配してくれてるんだってわかる。会って間もないような旅行が終わったらそれきりになっちゃうようなペンションのアルバイトの子相手に。

河合さんには、何の得にもならないのに。

思ったとおり、しばらくしたらケータイの音が途切れ途切れになってきた。

「：きなさん、もうちょっとだか——」

そして、切れた。

耳からケータイを離す。画面は真っ暗だ。

周囲も暗くなってきた。ナイター設備のあるゲレンデだけど、こんな雪の日は夜営業もしないから明かりもついてない。

私はケータイをポケットにしまうとまた昴さんを抱きしめた。
暖かい。

昴さんの鼓動。

生きてる。

絶対、死なせたりしませんから。

それから、本当にすぐだったと思う。

強い光が私たちの方に向かって当てられた。眩しくて目を開けると、光源となってるスノーモービルらしき乗り物の影が、私たちが転がり落ちたあたりに停まっているのが見えた。

逆光だからよく見えない。

だけど、何人かがロープみたいなものを手繰りながら、斜面を降りてくるのが見える。男の人たちの声も聞こえる。

助かった、みたいです。昴さん。

相変わらず目を瞑ったままの昴さんに心の中で伝えた――

53 別れの朝 (1)

目を開けると蛍光灯のついた天井が見えた。

もとは白かったんだろうけど、建物自体が古いのか天井は黄ばんでいる。

蛍光灯が灯ってないのに明るいとところを見ると、朝、なんだよね？それにしても、見たことのない天井なだけど。

えっと。ここ、どこだっけ……？

すぐ脇に人の気配を感じて首をそちらに向けると、椅子に座って編み物をしている浩美さんの姿が目に入った。

いけない、寝坊したっ！？

慌てて跳ね起きた私に気付いて浩美さんが顔を上げた。目が合う。

「あ、あのっ」

弁解しようとした私の目の前で、浩美さんの表情が驚きのそれからぐしゃりとゆがんだと思ったら、いきなり抱きつかれた。

「ふわっ！？」

「雪奈ちゃん！ よかった……本当によかった。心配したのよ」

お腹の赤ちゃんに影響が出ちゃうんじゃないかって思うくらいの熱烈なハグの後、両手で私の肩を持った浩美さんと向かい合わせになる。

浩美さんは泣いていた。

「ごめんなさいね。怖かったでしょう」

ああ、そうか。思い出した。

私、昴さんと遭難したんだ。

吹雪の中、私がコースアウトして、昴さんが私を庇ってくれて、動けなくなっ

それで救助隊の人たちが助けに来てくれて、私たち一緒に、そのまま病院に運ばれたんだ。

運ばれてる途中あたりから、記憶が曖昧になってるけど……。

病室を見回したら、他にいくつかベッドがあっただけど、そのどこにも昴さんの姿はなかった。

「あの、昴さんは……？」

私が尋ねると、浩美さんは指で涙を拭いながら微笑んだ。

「昴君なら隣の病室にいるわ。同じ部屋は空いてなかったの」
よかった。昴さんも助かったんだ！

あ、でも肝心なことがある。

「あの、昴さんの容態は……？」

意識不明のまま重態です、なんて言われたらどうしよう？

私の不安を余所に、すっかり泣き止んだ浩美さんはフツツと笑った。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。あの子が死ぬわけないでしょ？
大介がゴキブリ並みって言ってるの、あれ、褒め言葉なのよ？」

緊張で強張ってた私の身体からへなへなと力が抜けていく。

よかった……。昴さん、無事なんだ。本当に、よかった。

「なんなら、今から会いに行く？ 一時間ほど前に起きたはずだから」

え？ 昴さん、もう起きてるの？ 私よりもずっと容態は悪そうだったのに？

私は不思議に思ったけど、昴さんに会えるのが嬉しくてこくりと頷いた。

看護師さんと呼んで点滴を外してもらうと、私は浩美さんがペンションから持ってきてくれていたパーカーを羽織って隣の病室へと向かった。

隣の病室も、私が寝ていた部屋と同じようなつくりだ。ベッドが六つ並んでいる。

昴さんは、その一番奥のベッドの上に、上半身を起こして座っていた。ベッドの脇にはマスターもいる。

マスターと昴さんは何か話してたけど、マスターが私に気が付いて顔を上げた。昴さんもそれに倣って私の方を向き、そして笑顔になる。

「昴さん……！」

「おお、雪奈、起きたんか。おはようさん」

駆け寄った私は、ものすごく能天気な言葉に迎えられた。

私の頭をぼんぼんと撫でながら、昴さんが続ける。

「雪奈、ホンマにごめんな。怖かったやろ。オレがしっかりせなあかんかったのに……。がんばってくれたんやてな。おおきに」

いえ、そんなことないです。

昴さんが庇ってくれてなかったら、私、本当に死んでたと思う。言いたいことはいっぱいあるけど、やっぱり言葉にならなくて、私はただ首を振った。

「そんなこと……。それより、昴さんの方こそ大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、この通りや。ただ、脚はやっぱり捻挫してるんやって」

言いながらめくった布団から、包帯でぐるぐる巻きにされた脚を見せてくれた。二周りくらい太くなった脚にそつと触れると、硬いギプスに覆われているのがわかった。

「ホンマ、かっこ悪いわ……」

頭を掻く昴さんの顔に視線を戻したとき、その頬が赤くなってるのを認めた。

片側の頬だけだから、照れとかそういうのじゃなさそうだ。昨日は全然気が付かなかったけど、落ちたときにどこかぶったのかな。私の表情の陰りを目ざとく見つけたたらしい昴さんが、頬に手を当てながらにやりと笑う。

「ああ、コレは落ちたときとちゃうで」

「そうなんですか？」

「さっき、大介兄ちゃんに殴られてん」

「ええっ!？」

思わず隣に立つマスターを見上げる。マスターは苦笑して「本当だよ」と言った。

「なんで……？」

「雪奈ちゃんを危ない目に合わせたんだ。これくらい当たり前だろう。怪我してなかったらもっと思いつき殴ってただろうから、むしろ軽い方だ。肝心なときに頼りにならない甥っ子ですまなかったね」

「いえ、そんな……。昴さんがいなかったら、私、がんばれませんでした。お礼を言いたいの私の方なのに」

「雪奈ちゃん、コイツに礼なんてもったいないよ。昴はね、あの雪の――」

「わ――――!!」

マスターが何かを言いかけたとき、昴さんが大声を出しながらマスターの言葉を遮ろうと腕をぶんぶん振り回す。

「大介兄ちゃん、ちよお待ち! 言うたらあかん!」

「こら、昴。ここ病院だぞ。静かにしなさい」

脚を動かせない昴さんより、マスターの方が圧倒的に優勢だ。昴さんはあつという間に動きを封じられ、ついでに口を手で抑えられてもごもごと抗議の声を上げ続けている。かなり元気そうだ。

マスターはそんな昴さんをニヤニヤしながら眺め、私に向かって驚愕の事実を述べた。「コイツね、あのとき、本当に寝てたんだよ」

――へ？

「あの、どういう……」

「遭難してたとき、雪奈ちゃん電話で昴の意識がないって言ってただろう？ あのときね、昴、低体温になってたから意識がなくなりかけてたわけじゃないんだ。もともと睡眠不足で、本気で眠りそう

「なってただけらしいんだよね」

え？

あの状況下で？

ええええええええ——！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3028p/>

私をボードへ連れてって

2011年12月16日20時40分発行